429
66

286

勅定褒章條例六十年史

0009099-000

429－66

勅定褒章条例六十年史

大日本勅定褒章協会・編

大日本勅定褒章協会

昭和16

ABI

新商

中華十年

慶豫章

429
66

勅定勲章六十年史目次

題字……公爵 一條實孝閣下
題字……貴族院議長 男爵 本庄繁閣下
題字……大日本勲章奨勵會會長 子爵 岡澤精一閣下
刊行之辭……一
凡例……
褒章之圖・褒章條例（彩色版）……
前編……
人名索引……
賛助會員小傳……
後編……
人名索引……
紅綬褒章編……
綠綬褒章編……
藍綬褒章編……
紺綬褒章編……
黄綬褒章編……
外人拝受者編……

公曰一條實非國下之言

亦

公子一條實於是

忠誠

前陸軍大将 本庄繁閣下之書

大日本仙年堂書協会
集千字 岡部精一聞下之題字

刊行の辭

明治十四年褒章條例制定せられてより茲に六十年、この間褒章拜受の光榮に浴せしもの數千名にのぼる。洵に聖代の盛事と謂ふべし。

國家より表彰せらるる恩賞の一として、褒章を拜受することの光榮たるは論を俟たず。曾に被表彰者個人の光榮たるにとゞまらず一族一門の榮光にして、家門の譽れこれに過ぐるものなし。

褒章は褒章條例の定むるところに依り、紅綬褒章、綠綬褒章、藍綬褒章、紺綬褒章、黄綬褒章の五種ならびに飾版にわかたる。即ち紅綬褒章は自己の危難を顧みず人命を救助したる者に綠綬褒章は孝子順孫節婦義僕の類にして德行卓絶なる者または實業に精勵し衆庶の模範たるべき者に藍綬褒章は學術技藝上の發明改良著述教育衛生慈善防疫事業學校病院の建設、道路河渠堤防橋梁の修築、田野の開墾、森林の栽培、水產の繁殖、農工商業の發達に關し公衆の利益を興し、成績顯著なる者または公同の事務に勤勉し、勞效顯著なる者に、紺綬褒章は公益の爲め私財を寄附し功績顯著なる者に、黄綬褒章は私財を獻納し防海の事業に贊成する者に賜ひ、褒章を賜はりたる者再度以上同樣の實行ありて褒章を賜ふときは、其の都度飾版壹箇を賜ひ、五個以上に達したるときは別箱の金飾版を引替へ賜ふものにして、被表彰者の事績たるや、直ちに以て範儀師表となすに足れり。

本協會が紀元二千六百年の佳歲を迎へて勅定褒章條例六十年史を編纂刊行するに至りし所以は明治、大正、昭和三代にわたるこれら有德の士の善行を現代に顯彰し未來に傳へ以て社會敎化の資料たらしめ、報國の至誠と公益の精神を昂揚せしめんとするにあり。本書の刊行に依りて、非常時局下の國家社會を動かにても裨益するところあらば幸ひなり。

昭和十六年

大日本勅定褒章協會

凡例

一　各褒章拝受者は總て官報に據り收錄し紅綬は紅綬、紺綬は紺綬とそれ〳〵統一の上、褒章賜與の年月日を追つて列記した。府縣別が理想的と思つたが、位階勳等の所有者に住所なき爲め止むなく賜與の日附順にした次第である。

一　賜與の日附が同じで功績文の同一のものの中には便宜上一緒に纏めた部分もある。功績文の終りに紅綬ならば「依テ明治十四年十二月七日勅定ノ紅綬褒章ヲ賜ヒ其善行ヲ表彰ス」とある如く、各褒章拝受者に一々附せられてゐるのであるが本書では各綬の最初の拝受者だけに掲げ他は全部省略した。

一　既に褒章を賜つた者が再度以上同樣の功績を擧げたときは、其の都度銀製飾版五箇以上には金製を賜はる例であるが、其の條分を略して單に飾版一箇下賜飾版二箇下賜といふ具に取扱つた。

一　褒章拝受後に於て改姓改名された者は、その變更を用ひ、取消禁錮の處分を受けた者は全部削除した。

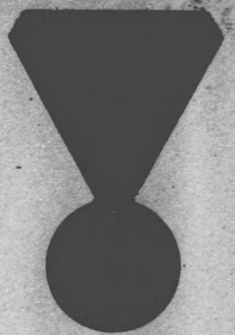
一　巻頭に褒章條例及賞授褒章臨時制定、褒章條例取扱手續の條文を附して讀者の參考とした。

一　以上の編輯方針に基いて編纂の完璧を期したが、資料の締切を昭和十六年六月末日としたため、その後の改姓改名は訂正せざる場合あるを諒とされたい。

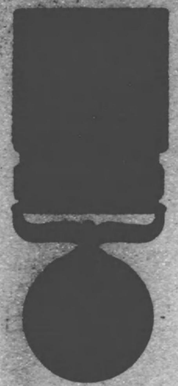
一　從つて公職、職業、住所、其の他の變更もまた同前である。

一　探檢者のうち物故せられた拝受者も無きを保し難いが、これまた同前の理由によるので諒とされたい。

紅綬褒章



黄綬褒章



紺綬褒章

褒章ノ種別及功績ノ範圍

褒章條例（明治十四年太政官布告第六十二號）賞授褒章規則（明治二十年勅令第十六號）參照

紅綬褒章

自己ノ危難ヲ顧ミス人命ヲ救助シタル者ニ與フ

藍綬褒章

孝子順孫節婦義僕ノ類ニシテ篤行卓絶ナル者又ハ實業ニ精勵シ衆民ノ模範タルヘキ者ニ與フ

黄綬褒章

學術技藝上ノ發明改良著効、教育衛生慈善救疫ノ事業、學校病院ノ建設、堤防河流道路防禦橋梁ノ修築、田野ノ開墾、森林ノ栽培、水産ノ繁殖、農商工業ノ發達ニ關シ公衆ノ利益ヲ興シ成績著明ナル者又ハ公同ノ事務ニ勤勉ヲ勞效顯著ナル者ニ與フ

緑綬褒章

公益ノ爲メ私財ヲ寄附シ功績顯著ナル者ニ與フ

黄綬褒章

私財ヲ献納シ防海ノ事業ヲ賛成スル者ニ與フ（金章銀章ノ二種）

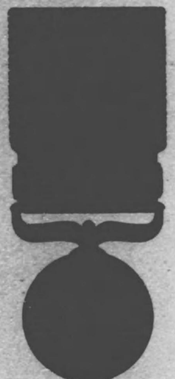
紫綬褒章

右褒章ヲ與ハリタルモノ再度以上同樣ノ實行アリテ褒章ヲ與フヘキトキハ其ノ都度賜與證書ヲ與與セラレ五回以上ニ逮シタルトキハ五個毎ニ別種ノ飾版（金銀製）ヲ引替ヘ與フ

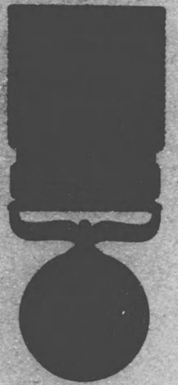
佩用式

褒章ハ左肋ノ適ニ佩ヒ勳章及從軍記章ヲ有スル者ハ左ヘ列シ帶フ

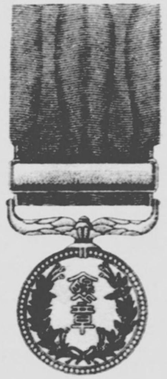
（服裝、略服禮用等ハ省略ス）

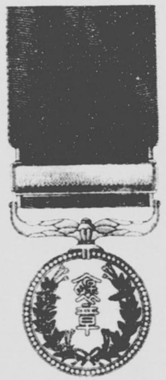


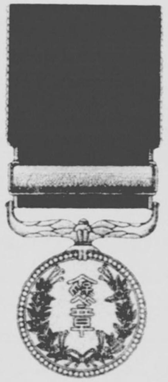
藍綬褒章

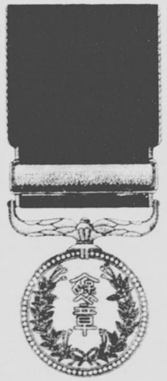


紺綬褒章









褒章條例

（明治十四年十二月七日太政官布告第六十三號）

明治廿三年五月勅令第七二號、同廿七年一月同第一號、大正七年九月同第三四九號、同九年一月第二四號、同十年四月同第一四七號、同十四年六月同第二二二號、昭和二年一月同第三九五號、同十二年十二月同第六八五號改正

褒章條例調製ノ勅額定ノ明治十五年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

右勅語ヲ奉體シ茲ニ條章ヲ設ク

（勅語）

褒章條例

第一條　凡ソ自己ノ危難ヲ顧ミス人命ヲ救助シタル者又ハ学子開拓勧業殖産ノ開ニシテ施行卓越ナル者又ハ實業ニ精勵シ衆民ノ標準タルヘキ者又ハ學術技藝上ノ發明改良著シク、教育衛生慈善防疫ノ事業、學校病院ノ建設、道路河堤堤防橋梁ノ修築開墾ノ開墾、森林ノ植栽、農商工業ノ發達ニ關シ公衆ノ利益ヲ興シ成績著明ナル者又ハ公同ノ事務ニ勤勉シ勞效顯著ナル者又ハ会社ノ資財ヲ寄附シ功績顯著ナル者ヲ表彰スル爲メ左ノ四種ノ褒章ヲ定ム

紅綬褒章

右自己ノ危難ヲ顧ミス人命ヲ救助シタル者ニ賜フモノトス

紺綬褒章

右学子開拓勧業殖産ノ開ニシテ施行卓越ナル者又ハ實業ニ精勵シ衆民ノ標準タルヘキ者ニ賜フモノトス

黄綬褒章

右學術技藝上ノ發明改良著シク、教育衛生慈善防疫ノ事業、學校病院ノ建設、道路河堤堤防橋梁ノ修築、田野ノ開墾、森林ノ栽培、水産ノ繁殖、農商工業ノ發達ニ關シ公衆ノ利益ヲ興シ成績著明ナル者又ハ公同ノ事務ニ勤勉シ勞效顯著ナル者ニ賜フモノトス

緑綬褒章

右公益ノ爲私財ヲ寄附シ功績顯著ナル者ニ賜フモノトス

第二條　本條例ニ依リ表彰セラルヘキ者同一ナルトキハ表狀ヲ賜フ

第三條　已ニ褒章ヲ賜ハリタルモノ再度以上同一ノ賞行アリテ褒章ヲ賜フヘキトキハ其都度飾版一個ヲ賜與シ其章ノ綬ニ附加セシメ以テ標識トス

前項ノ飾版五個以上ニ至リタルトキハ五個毎ニ別個ノ飾版一個ヲ引替ヘ賜與ス

授與褒章

第四條　褒章ハ本人ニ限リ終身之ヲ佩用スルコトヲ得

第五條　第一條ノ規定ニ依リ褒章ヲ賜フヘキ者ニハ褒章ト金銀木杯又ハ金圓トヲ併セ賜フコトアルヘシ

第六條　第一條ノ規定ニ準スヘキ者特ノ行爲アリタル者ニハ金銀木杯金圓又ハ表狀ヲ賜フコトアルヘシ

第七條　本條例ニ依リ表彰セラルヘキ者死亡シタルトキハ金銀木杯金圓又ハ表狀ヲ其遺族ニ賜ヒ之ヲ頒賞ス

第八條　第六條ニ依ル行賞ニシテ金銀杯ノ賜與二十圓ヲ超ユル金圓ノ賜與及千圓以上ノ寄附ニ對スル褒狀ノ賜與ハ賞勳局總裁之ヲ專行ス

第六條ニ依ル行賞ニシテ木杯ノ賜與二十圓以下ノ金圓ノ賜與及千圓未滿ノ寄附ニ對スル褒狀ノ賜與ハ地方長官之ヲ專行ス

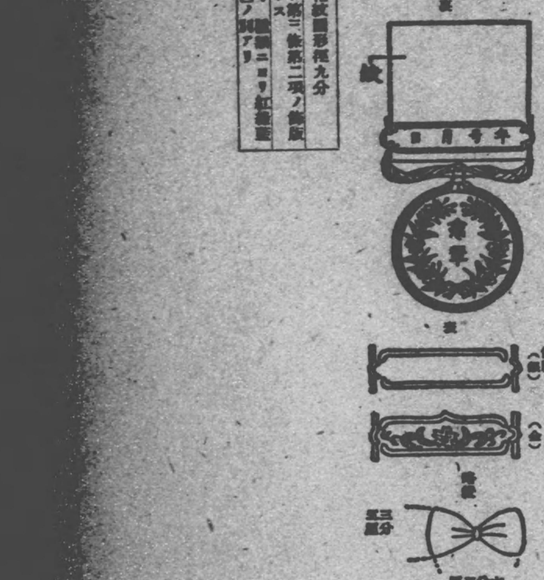
第九條　本條例中地方長官ニ關スル規程ハ朝鮮、臺灣、關東州及南滿洲鐵道附屬地、樺太、南洋諸島並外國ニ於テハ各別ノ定ヲ設ケ勅裁ヲ經テ之ヲ施行ス

第十條　褒章ノ授與ニ關スル細則ハ賞勳局總裁之ヲ定ム

附則

第十一條　本條例施行ノ日ヨリ從前ノ褒章條例ハ之ヲ廢止ス

第十二條　從前ノ褒章ハ本條例ニ依リ之ヲ授與シタルモノト看做ス



章	徽章
紅綬褒章	徽章ハ金製ニシテ直徑九分
紺綬褒章	徽章ハ金製ニシテ直徑九分ノ飾版ヲ附シ第二條第二項ノ飾版ヘ金トス
黄綬褒章	徽章ハ金製ニシテ直徑九分ノ飾版ヲ附シ第二條第二項ノ飾版ヘ金トス
緑綬褒章	徽章ハ金製ニシテ直徑六分五厘ノ飾版ヲ附シ第二條第二項ノ飾版ヘ金トス

褒章ノ飾版ニ依リ紅綬ノ場合ハ白色ノ部分アリ

備考　第三條第二項ノ飾版ヲ賜フトキハ褒章ノ裏面ニ引替ヘタル各飾版ノ賜與年月日ヲ記入ス

佩用式

一　褒章ハ左肋ノ邊ヘ佩フヘシ

但勳章及従軍記章ヲ有スル者ハ其章ノ左ヘ列シ帶フヘシ

○賞牋褒章當時制定

（明治二十年五月二十四日勅令第十六號）

【改正】大正一〇年第一四八號

第一條　私財ヲ獻納シ防遏ノ事業ヲ賛成スルモノニ授與スル爲メ賞牋褒章ヲ制定シ分テ金章銀章ノ二種トス

第二條　賞牋褒章ヲ佩用シ又ハ返牧スルノ事項ハ明治十四年十二月第六十三號褒章條例ニ據ル

第三條　賞牋褒章ノ圖式左ノ如シ

章	金及銀圖形表面ニ朝ノ字褒章ノ二字大倉ノ圖裏面ニ賞成防遏事業ノ六字ヲ鐫出ス
綬	橙黄色

○褒章條例第八條ノ規定ニ依ル賞牋

（明治二十七年一月六日勅令第一號）

【改正】大正九年第一號　一四年第三號

第一條　褒章條例ニ依リ褒章ヲ賜フヘキ者アルトキハ地方長官主務大臣ニ具申シ主務大臣ハ其ノ當否ヲ審査シ賞勳局總裁ヘ申牒スヘシ

第二條　賞勳局總裁ハ申牒書ヲ點檢シ褒章ヲ賜フヘキモノト認ムルトキハ先ツ勅可ヲ得在京ノ者ニハ之ヲ直授シ其ノ他ノ者ニハ主務大臣ヲ經由シテ之ヲ傳達スヘシ

第三條　外國人ニ褒章ヲ賜フヘキトキハ主務大臣外務大臣ト通牒シテ之ヲ申牒スヘシ授與ノトキハ外務大臣ヲ經由シテ之ヲ傳達ス其ノ公私備ニ係ル者ハ第二條ニ依ル

第四條　褒章條例第八條第一項ニ依リ賞勳局總裁ノ專行ニ屬スル行賞ニ該ル者アルトキハ地方長官主務大臣ニ具申シ主務大臣ハ其ノ當否ヲ參酌シ賞勳局總裁ヘ申牒スヘシ授與ノトキハ主務大臣ヲ經由シテ之ヲ傳達ス

第五條　行賞ニ關シ二以上ノ地方長官具申又ハ專行スヘキ場合ニ於テハ關係地方長官ノ協議ニ依リ其ノ一地方長官之ヲ行フコトヲ得

第六條　外國人ニ對スル金銀木杯、金圓又ハ賞狀ノ賜與ハ內國人ノ例ニ依ル但シ帝室ノ賞賚又ハ外國使臣ニ對スル賜與ハ外務大臣賞勳局總裁ヘ申牒スヘシ授與ノトキハ外務大臣ヲ經由シテ之ヲ傳達ス

第七條　褒章條例ニ依リ表彰セラルヘキ者具申後行賞前ニ於テ死亡シ又ハ刑金以上ノ刑ニ該ル罪ヲ犯シタル者ナルコトヲ知リタルトキハ地方長官ハ速ニ其旨主務大臣ニ申報シ主務大臣ハ之ヲ賞勳局總裁ニ通知スヘシ

第八條　本令中主務大臣ノ職務ハ朝鮮、臺灣、關東州及南滿洲鐵道附屬地ニ在リテハ各朝鮮總督、臺灣總督、關東長官之ヲ行ヒ地方長官ノ職務ハ朝鮮、臺灣、關東州及南滿洲鐵道附屬地、樺太、南洋諸島竝外國ニ在リテハ各朝鮮總督、臺灣總督、關東長官、樺太廳長官、南洋廳長官、領事官之ヲ行フ

附　則（大正九年勅令第一號）

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

明治十六年太政官達第十七號金銀木杯金圓賜與手續及明治四十四年勅令第十三號ハ之ヲ廢止ス

勅令第六百九十三號

褒章條例第六條ノ規定ニ依ル行賞ニシテ文官高等官ニ關スル私財ノ寄附ニ關スルモノニ付テハ同條例第八條ノ規定ニ拘ラス賞勳局總裁之ヲ專行ス

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

【參照】明治十四年十二月七日太政官布告第六十三號褒章條例抄錄

第六條　外國人ニ對スル金銀木杯、金圓又ハ賞狀ノ賜與ハ內國人ノ例ニ依ル但シ帝室ノ賞賚又ハ外國使臣ニ對スル賜與ハ外務大臣賞勳局總裁ヘ申牒スヘシ授與ノトキハ外務大臣ヲ經由シテ之ヲ傳達ス

第八條　本令中主務大臣ノ職務ハ朝鮮、臺灣、關東州及南滿洲鐵道附屬地ニ在リテハ各朝鮮總督、臺灣總督、關東長官之ヲ行ヒ地方長官ノ職務ハ朝鮮、臺灣、關東州及南滿洲鐵道附屬地、樺太、南洋諸島竝外國ニ在リテハ各

第二條　賞勳局總裁ハ申牒書ヲ裏議シ褒章ヲ賜フヘキモノト認ムルトキハ奏請裁可ヲ得在東京ノ者ニハ之ヲ直授シ其ノ他ノ者ニハ主務大臣ヲ經由シテ之ヲ傳達スヘシ

第三條　外國人ニ褒章ヲ賜フヘキトキハ主務大臣外務大臣ト連署シテ之ヲ申牒スヘシ授與ノトキハ外務大臣ヲ經由シテ之ヲ傳達ス其ノ公私備ニ係ル者ハ第二條ニ依ル

第四條　褒章條例第八條第一項ニ依リ賞勳局總裁ノ專行ニ屬スル行賞ニ該ル者アルトキハ地方長官主務大臣ニ具申シ主務大臣ハ其ノ當否ヲ審查シ賞勳局總裁ヘ申牒スヘシ授與ノトキハ主務大臣ヲ經由シテ之ヲ傳達ス

第五條　行賞ニ關シ二以上ノ地方長官具申又ハ專行スヘキ場合ニ於テハ關係地方長官ノ協議ニ依リ其ノ一地方長官之ヲ行フコトヲ得

第六條　外國人ニ對スル金銀木杯、金圓又ハ賞狀ノ賜與ハ內國人ノ例ニ依ル但シ帝室ノ貴賓又ハ外國使臣ニ對スル賜與ハ外務大臣賞勳局總裁ヘ申牒スヘシ授與ノトキハ外務大臣ヲ經由シテ之ヲ傳達ス

第七條　褒章條例ニ依リ表彰セラルヘキ者其申牒行賞前ニ於テ死亡シ又ハ罰金以上ノ刑ニ該ル罪ヲ犯シタル者ナルコトヲ知リタルトキハ地方長官ハ速ニ其旨主務大臣ニ申報シ主務大臣ハ之ヲ賞勳局總裁ニ通知スヘシ

第八條　本令中主務大臣ノ職務ハ朝鮮、臺灣、關東州及南滿洲鐵道附屬地ニ在リテハ各朝鮮總督、臺灣總督、關東長官之ヲ行ヒ地方長官ノ職務ハ朝鮮、臺灣、關東州及南滿洲鐵道附屬地ニ在リテハ各朝鮮總督、臺灣總督、關東長官ノ指揮ヲ受ケ之ヲ行フ

（關東長官ニ樺太廳長官、南洋諸島並外國ニ在リテハ各朝鮮總督、臺灣總督、關東長官ノ職務ヲ行フ）

附　則（大正九年閣令第一號）

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

明治十六年太政官達第十七號金銀木杯金圓賜與手續及明治四十四年閣令第十三號ハ之ヲ廢止ス

勅令第六百九十三號

褒章條例第六條ノ規定ニ依ル行賞ニシテ支那事變ニ關スル私財ノ寄附ニ對スルモノニ付テハ同條例第八條ノ規定ニ拘ラス賞勳局總裁之ヲ專行ス

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

（參照）明治十四年十二月七日太政官布告第六十三號褒章條例抄錄

第六條　外國人ニ對スル金銀木杯、金圓又ハ賞狀ノ賜與ハ內國人ノ例ニ依ル但シ帝室ノ貴賓又ハ外國使臣ニ對スル賜與ハ外務大臣賞勳局總裁ヘ申牒スヘシ授與ノトキハ外務大臣ヲ經由シテ之ヲ傳達ス

第八條　本令中主務大臣ノ職務ハ朝鮮、臺灣、關東州及南滿洲鐵道附屬地ニ在リテハ各朝鮮總督、臺灣總督、關東長官之ヲ行ヒ地方長官ノ職務ハ朝鮮、臺灣、關東州及南滿洲鐵道附屬地、樺太、南洋諸島並外國ニ在リテハ各朝鮮總督、臺灣總督、關東長官、樺太廳長官、南洋廳長官、領事官之ヲ行フ

勅令

朕支那事變ニ關シ私財ヲ寄附シタル者ノ表彰ニ關スル褒章條例第八條ノ特例ノ件ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム

御名御璽

昭和十四年十月六日

內閣總理大臣　阿部信行

前編

索引

アの部

安藤秀三……一二九
安藤安太……七四
安部彦平……六六
足達保治郎……四七一
足立元三郎……三五五
阿部義次……七五

伊藤松太郎……五四五
飯田才蔵……一七一
飯田清七……四一
生嶋繁三郎……三七一
池田謙斎……一九〇
池貝庄太郎……二五〇
池貝庄太郎……二五一
石崎敏行……二〇一
石崎清助……三五六
石田友輔……三五八
石田友吉……三五八

索引

ア の 部

安藤秀三……一二九
安藤安太……七四
安部彦平……六六
足立保治郎……四七一
足立元三郎……三五五
阿部義次……七五
相川文五郎……九〇
青山秀夫……五八六
青沼彦治……三〇七
青沼吉治……三〇八
赤尾元一……一一五
赤尾善治郎……二四〇
浅井御三……三四六
浅田貞次郎……一五〇
麻生武兵衛……三一四
荒田太吉……四一九
有馬市蔵……七一

イ 、ヰ の 部

井上源之丞……一三
井上周……四五
井上永次……一六五
井上宗一……三二三
井上富太郎……一九二
井上重蔵……二四六
井上貞次郎……二四七
伊東あや……三一一
伊東榮……一九四
伊藤清次郎……四三
伊藤長兵衛……二二八
伊藤次郎左衛門……二四九
伊藤忠兵衛……三五七
伊藤直四郎……三四八
依藤松太郎……五四五
飯田才蔵……一七一
飯田新七……四一
生嶋繁三郎……三七一
池田證寿……一九〇
池貝庄太郎……二五〇
池貝庄太郎……二五一
石崎敏行……二〇一
石崎清助……三五六
石田友衛……三五八
石田友吉……三五八
石黒長平……三六二
板谷吉吉……一八八
市川文太郎……三六四
市田鯛吉郎……三六一
泉吉次郎……一八九
和泉眞……三六八
絲原武太郎……二五四
絲原武太郎……二五五
稲畑静太郎……一一
稲垣恒吉……三五九
乾茂……三六七
今井又次郎……三七〇
今橋秀貞……三六三
岩尾真蔵……二九
岩崎豊治……三六九
岩田芳之助……二五二
岩出惣兵衛……一六四

ウ の 部

宇都宮宇作……一九九
上田静兵衛……三七二
上田忠三郎……二二一
上山英一郎……一六六
上山勘太郎……一六七
上山ゆう……一六八
上杉順治……三七三
植田定一……三七五
植田嘉右衛門……三七七

エの部

江口理三郎……三七九
榎本　正……三〇九
遠藤徳吉……三七四
遠藤ヲク……三七四

オヲの部

小栗三郎……一九七
小倉常吉……二六
小倉清男……一五八
小野耕一……二五三
小田切長之助……三八四
小澤大平……三八五
尾崎元次郎……三八七
大本寅治郎……一一七
大野宗太郎……一六〇
大塚茂十郎……三八三
大塚栄吉……三八〇
大篠千太郎……三一八
大谷善八郎……三八二
大河内ヲエ……三八一
大久保増吉……一九五
岡崎鶴吉……二六一
岡崎正亀……一六二
岡崎公一……三七八
岡田菊治郎……一七七
郡田勢一……三二九
岡谷惣助……三四五
岡谷惣助……三四五
岡本社造……三四七
岡部儀平……三七六
岡部長景……七三
奥田卯治……三八六
奥小賀亀……一五六
帯谷吉次郎……二五九
織田虎雄……三六〇

カの部

加藤平次郎……三七
嘉門長蔵……一四九
笠岡幸助……四一三
春日井丈右衛門……一九
片岡金七……三九七
風間善九郎……四〇〇
風間善九郎……四〇一
桂　勲佑……三八八
金本栄三……四一七
鎌田勝太郎……一六一
神田静夫……三三〇
亀井信次郎……三九八
川村千代吉……五
川都　豪三……三三五
川崎半兵衛……四一一
川延宗三郎……二五六
川延善一郎……二五七
河合亀太郎……三三一
河崎助太郎……二八三
河村唯雄……一五二
鎌倉　賢……四四

キの部

木島豊治……四〇二
木田要蔵……一〇五
木下空太……二一六
木村作五郎……三二八
木村源兵衛……一五四
木村竹太郎……二五八
木村静彦……三九九
木村　靖……一三四
木村長四郎……二一四
木村栄吉……一三二
木本勇二……六九
木曾延一……四〇三
貴志米吉……三九

ク の部

久保喜助……四二三
久保勘太郎……四〇五
久保田権四郎……一〇九
北島徳松……八七
倉多　徳……四〇四
鴻竹大蔵……二八八
熊谷太郎……二三七
栗林　栄……五八九
小林吟右衛門……二三六
小泉信十郎……四二九
小山新三郎……一五九
見玉保一……四二五
後藤彦三郎……六七
高津久右衛門……二一八
高良宗七……四三三
鯨部浅五郎……四三二
近藤　徳吉……四三四
近藤友右衛門……二八九
金光文孝……二二〇
駒岡栄蔵……四三一

岡崎鶴吉……二六一
岡崎正也……一六二
岡崎公一……三七八
岡田菊治郎……一七七
國田勢一……三二九
岡谷惣助……三四五
岡谷惣助……三四五
岡本松造……三四七
岡部傳平……三七六
岡部長景……七三
奥田靜治……三八六
奥小賢也……一五六
帶谷吉次郎……二五九
稲田虎雄……三六〇

キの部

木島豊治……四〇二
木田要蔵……一〇五
木下杢太……二一六
木村作五郎……三二八
木村源兵衛……一五四
木村竹太郎……二五八
木村靜彦……三九九
木村靖……一三四
木村長四郎……二一四
木村榮吉……一三二
木本勇二……六九
木曾延一……四〇三
貴志米吉……三九
北地精松……八七

ク の 部

久保喜助……四二三
久保惣太郎……四〇五
久保田維四郎……一〇九
久保田庄左衛門……一六三
日下部庄吉……四〇八
熊三郎……四〇九
高原三次郎……四一〇
苟和善雄……三三
國方新吉……三二一
國武喜次郎……二三四
國武金太郎……二三五
國東熊太……三二七
國重時右衛門……四〇七
熊田重吉……一二八
栗林徳一……三八
黒川四三二……三六五
黒田重助……三二六
黒田徳次郎……一三〇
黒澤利貴……四〇六
桑原源藏……二一
桑原七……二三
車弘……五八八
郡是製絲株式會社……五二

コ の 部

小口静太郎……二五
小池興平……四二六
小島駒吉……四二八
小島金藏……四二七
小杉善之助……一八七
小高元三郎……三四四
小林吟右衛門……二三六
小森信十郎……四二九
小山新三郎……一五九
兒玉保一……四二五
後藤彦三郎……六七
高津久右衛門……二一八
高良宗七……四三三
越部浅五郎……四三二
近藤吉……四二四
近藤友右衛門……二八九
金光文幸……二一〇
駒岡繁證……四三一
肥塚安雄……八九

サ の 部

佐藤貢二……二一一
佐藤保……四三六
佐藤誠之助……四三五
佐藤惣太郎……五八〇
佐野川谷安太郎……四四一
齋藤恒三……七二
齋藤喜之助……一七九
坂口徳次郎……一八三
坂口平兵衛……四八八
坂口豊藏……四八八
坂本豊一……四一五
酒井忠治……一六九
酒巻敬之助……四四〇
澤井幸助……一八一
澤井藤助……一二六
澤田長左衛門……四四四
澤山政治……三九一

シ の 部

柴田善左衛門……一五七
重野義三郎……三二五
重原又雄……六三
重谷喜助……四四五

島田德太郎……二八五
清水釘吉……一二四
白井松之助……四二一
白崎栄次郎……二一三
神八三郎……一四
神野金之助……二二二
神野金之助……二二三
新間嘉兵衛……四四三

スの部

末永四郎平……五四六
杉田與次郎……一七五
杉本米治……四四八
鈴木梅太郎……一二二
鈴木幸作……一八五
鈴木桝次郎……三一七
鈴木友調……二〇三
鈴木文七……九二
住友元夫……二九二

セの部

關喜兵衛……二一五

ソの部

相馬半治……二八

タの部

田中博……二四一
田中幸……四〇
田中徳三郎……五五〇
田中長兵衛……五四四
田中新七……五四二
田端龍三郎……五四一
田部長……五七
田部長右衛門……五九
田村俊次郎……四六五
田村部太郎……三一九
高石重治……五四八
高津伊兵衛……五四〇
高倉泰次……二一二
高松德三郎……一三一
高宮政太郎……五三七
高谷英雄……二〇五
高橋直治……五三六
高橋正彦……五五三
高橋宗太郎……五五二
高橋ヲツ……五三八
瀧定助……二三九
瀧信四郎……二三八
瀧川喜太郎……五四七
竹田由松……五三五
竹内映子……五八二
竹内龜雄……二〇七
武内廣治……四六三
竹村栄太……五五一
橘與一……三四三
谷口作治郎……六一
谷野留吉……八三
谷岡スエ……四七四
玉置良直……五六四
玉置子朝……五六五
大岡盛徹……五三九

チの部

千葉利之助……五三三

ツの部

津田静五郎……五五七
辻利右衛門……五六一
辻本新三郎……五五五

テの部

寺井四郎兵衛……五七〇
寺田福吉……二八一
寺田有師……五七二

トの部

外村市郎兵衛……二九三
土井市兵衛……九三
土井忠兵衛……五七三
德永芳治郎……二七
利光鶴松……一一一
富田平八郎……五五
中村秀三……二六九
中村傳……五八三
中村榮助……五七四
中村平三郎……五六二
中村直吉……二九一
中山太一……一
中山恒三郎……五六六
中澤勤十郎……一九八
長島甚助……五五四
長瀬傳三郎……五八一
長野忠次……五五八

相馬半治……二八

夕の部

田中博……二四一
田中孝……四〇
田中幾三郎……五五〇
田中長兵衛……五四四
田中新七……五四二
田端源三郎……五四一
田部長秋……五七
田部長右衛門……五九
田村俊次郎……四六五

チの部

千葉利之助……五三三

ツの部

津田勝五郎……五五七
辻利右衛門……五六一
辻本新三郎……五五五

テの部

寺井岡部兵衛……五七〇

寺西福吉……二八一
寺田省帰……五七二

トの部

外村市郎兵衛……二九三
土井市兵衛……九三
土井忠兵衛……五七三
徳永芳治郎……二七
利光鶴松……一一一
富田平八郎……五五
富田金七……五七九
富田重助……二〇二
富岡熊治……五二八
富岡清一郎……五七五
富岡俊次郎……五三二
豊田佐吉……二四三
豊田喜一郎……二四三
豊田利三郎……二四二
鳥居久吉……三五

ナの部

名守富次郎……三九五
名和助市……三二〇
内貴清兵衛……三一六
中川福七……二二五
中川福右衛門……五五九
中川伊作……五二七
中島豊三郎……七九
中島敬治郎……五三
中島徳太郎……五七一
中嶋隻吉……八一
中嶋弘……五二五
中戸川平太郎……五五六
中戸川秀一……五五六
中西一雄……五八五
中林仁一郎……二四五
中林源次郎……五二二
中林正夫……五二三
中村秀三……二六九
中村傳……五八三
中村栄助……五七四
中村平三郎……五六二
中村直吉……二九一
中山太一……一
中山恒三郎……五六六
中澤勉十郎……一九八
長島甚助……五五四
長瀬傳三郎……五八一
長野忠次……五五八
長浜礒慶……五四九
灘田義雄……一二三
難波マチ……五七六
成瀬治兵衛……二〇〇
成瀬正恭……五三四

ニの部

仁田大八郎……五二六
西尾正七……五二一
西川竹松……一九三
西川大六……五三一
西尾幸太郎……一五三
西村宇吉……二七一
西村直……五二四
西村重郎兵衛……二八六
新田長次郎……一五

ノの部

野田文次郎……三五三
野田幸作……五二〇
野村宗十郎……五三〇
能賀喜三兵衛……五二九

ハの部

羽生田仁作……九五
羽田長次郎……一五一

芳賀茂元……五四三
波多野鶴吉……五一
橋本太四郎……五一五
長谷川一九一郎……四九九
長谷川末吉……五一八
長谷川鳥慶……五一九
服部七兵衛……一九六
服部守次……二七九
服部鉦吉……二八四
花田卯造……四七
濱田三郎……三四一
濱田增……七〇
濱中重慶……二二四
早川智寛……五一四
林國藏……三四九
林國藏……三四九
林繁子……二八二
林清太郎……四六
林米七……二三二
林田順雄……四七三
原富太郎……五一七
原善一郎……五一七
原德枝……五一七
原清兵衛……五一六
原田久吉……四三八
原田義太郎……二九〇
原田有恒……一二一
原田敬治……六八
番場鐵作……五一二

ヒの部

氷室タラ……五六〇
東谷種德……五六三
平井仁兵衛……五一一
平井由太郎……五〇九
平田佐次郎……九七
平塚常次郎……二七三
平野吉左衛門……三九三
平野十三……三三九
平松理太郎……二〇九
弘世助太郎……六四
弘世正方……六五

フの部

福井繁太郎……二七七
福川忠平……五〇七
福島彌兵衛……五一〇
福島彌兵衛……五一〇
福田政之助……五六七
福中千代……四九七
藤井忠兵衛……八五
藤田元吉……四六九
藤武衛三……三〇五
藤原宗兵衛……二八〇
藤村九平……五〇八
藤本長藏……五〇六
藤山要吉……三六六
古市公威……五〇四
古川久吉……五〇五
古莊政吉……二七六
古谷辰四郎……四三七
古屋德兵衛……四二

ホの部

鳳博公……五八七
法師善五郎……五七七
星野喜右衛門……三〇一
細田善兵衛……三〇〇
細田吟藏……三二二
細溝宗次郎……二四八
堀越義太郎……二七五
本岡泰輔……五七八

マの部

鹿雅生德次郎……二二九
眞宅正一……二一七

前川萬治郎……二四
前田新平……九四
牧野元次郎……九
增野貴壽……一一九
町田嘉之助……四九四
松居元右衛門……三〇三
松居庄七……五〇三
松下德藏……四九六
松田文藏……一一三
松永功……五一三
松原市太郎……四九五
松原フヲ……五〇一

ムの部

陸田えよう……二六五
村上賢二……四八六
村山清八……四八五

モの部

本山秋一……四八〇
守谷定吉……九六
守谷定吉……九六

原田龜太郎……二九〇
原田有恒……一二一
原田敬治……六八
番場義作……五一二

ヒの部

氷室クラ……五六〇
東谷種雄……五六三
平井仁兵衛……五一一
平井由太郎……五〇九
平田佐次郎……九七
平塚常次郎……二七三
平野吉左衛門……三九三
平野十三……三三九
前川萬治郎……二四
前田新平……九四
牧野元次郎……九
增野清香……一一九
町田嘉之助……四九四
松居元右衛門……三〇三
松居庄七……五〇三
松下熊雄……四九六
松田文藏……一一三
松永勇……五一三
松原市太郎……四九五
松原フヲ……五〇一
松久永助……五六八
松久才治郎……五六九
松本敬次郎……二七八
松本能次郎……三二四
松本徹治郎……一四七
松本清一……一三三
的場仁市……二九八
丸龜小六……四九三
圓山龜次郎……四六七
萬代龍作……五八四

ミの部

三宅敏介……四八九
三好德三郎……一二
三輪嘉兵衛……四九一
三輪利一……九九
御法川直三郎……八八
溝手一雄……四八七
水野英一……四九〇
皆月榮一……五〇二
南方眞次郎……九一
宮川保全……二六三
宮坂照慶……一三五
宮崎彌作……二九九
宮崎吉次郎……四八四
宮本武之助……四四六
宮本禅七……四九二

ムの部

陸田よう……二六五
村上賢二……四八六
村山清八……四八五

モの部

本山政一……四八〇
守谷定吉……九六
守谷定吉……九六
守山甲子太郎……一四一
森平藏……一〇一
森六郎……九八
森下彌三八……一三九

ヤの部

八木久兵衛……四五八
八十島誠之……三三七
安川寛……二九六
安井治兵衛……四五七
安居喜八……四六〇
安居喜三郎……四六一
柳瀬ヒロ……四五五
山口玄洞……二九七
山口安兵衛……四七九
山口由太郎……四七七
山崎種二……四五九
山崎惣吉……四二四
山崎德松……二六七
山添清兵衛……一〇二
山田市郎兵衛……三八九
山田市治……三八九
山田吉兵衛……四六二
山田啓之助……四七六
山田幸吉……四七五
山田定次郎……一四三
山田藤一……四七八

ホの部

鮑博公……五八七
法師善五郎……五七七
星野嘉右衛門……三〇一
細田善兵衛……三〇〇
細田吟龐……三二二
細渓宗次郎……二四八
堀抜義太郎……二七五
本間泰輔……五七八

マの部

麻殖生德次郎……二二九
眞宅正一……二一七

山地土佐太郎……四三〇
山成雷六……四三九
山中兵右衛門……三三三
山本嘉兵衛……一〇〇
山本吉五郎……四八三
山本重敏……二二六
山本健治良……二二七
山本厚太郎……二三一
山本秀太郎……二三〇

ユの部

湯川公二……二九四
湯川茂……二四四

ヨの部

横田永之助……三一五
横山隆俊……四五四
吉岡美国……三五一
吉田龜吉……一四五
吉田嘉之助……一五五
吉田丹治郎……四五六
吉田長敬……一二五
吉田龜一……二三三
吉田彦太郎……二一九
吉田弁左衛門……四四二
吉原定次郎……二九五
吉村龜之助……四八一
米井久美子……四四七
米田權一……三一三
米田治郎兵衛……一二七
龜本一……四八二

ワの部

和田久左衛門……二八七
脇坂要太郎……四五〇
渡野卯八……一〇四
渡邊うた江……四五一
渡邊吉右衛門……四四九
渡邊孝平……四五二
渡邊孝平……四五二
渡邊藤作……六二
渡邊益太郎……一九一
渡邊莊……四五三
渡邊綱治……一〇三

謹、補綴表章受賞者

中山太一氏

明治十四年十一月十七日生
住所　大阪市住吉區帳場町二ノ五二
營業所　大阪市東區瓦町四丁目〇番地

各種勲章、大阪開工會員、財團會員、大阪實業組合聯合會會員、大阪貿易協會會員、大阪市住吉區會議員、大阪市住吉區教育會長、クラブ化粧品製造株式會社、中山太陽堂株式會社取締役、中山化學、國文化化粧品研究所、ブラトン婦人會社取締役社

吉田 繁一……二三三
吉田彦太郎……二一九
吉田 幷左衛門……四四二
吉原定次郎……二九五
吉村 繁之助……四八一
米井久美子……四四七
米田 權一……三一三
米田 治郎兵衛……一二七
義本 一……四八二

ワの部

和田 久左衛門……二八七
脇坂要太郎……四五〇
鷲野 卯八……一〇四
渡邊うた江……四五一

緯、緋綬褒章受賞者

中山太一氏

明治十四年十一月十七日生
住所 大阪市住吉區松崎町二ノ五二
事務所 大阪市港區水崎町四〇番地、
東京支店 東京市京橋區銀座二丁目七番地

貴族院議員、大阪商工會議所副會頭、大阪實業組合聯合會々長、大阪實業倶樂部理事長、大阪化粧品同業組合長、クラブ化粧品株式會社、中山太陽堂取締役社長、中山化學、同文化各研究所主、プラトン株式會社取締役社長

○大正九年十一月廿二日
大正八年三月市立大阪市民博物館へ自働ヤネオラマ裝置一式、同九年一月恩賜財團済生會本部へ金弐萬圓寄附す、依て大正七年九月十九日勅定の緋綬褒章を賜ひ以て之を褒彰せらる。

○大正十四年五月二十九日
肌に化粧品を海外に仰ぐを慨し大阪に於て之が製造を創め鋭意製品の改良と事業の擴張を圖り益々非額を增産し今や海外へ輸出するの盛況を見るに至る殊に實業に精勵し業民の模範たるものとす、依て明治十四年十二月七日勅定の緋綬褒章を賜ひ其善行を褒彰す。

○昭和四年二月十六日
大正十二年十二月大震災救護會へ金壹萬圓寄附す、依て大正七年九月十九日勅定の緋綬褒章を賜ひ以て之を褒彰せらる。

○昭和四年二月十九日
大正十二年關東大震災救護會金壹萬六千圓寄附す、依て大正七年九月十九日勅定の緋綬褒章を賜ひ以て之を褒彰せらる。（御版一個下賜）

○昭和四年三月二十日
大正十四年十二月大阪府農業能率研究費として金壹萬圓寄附す、依て大正七年九月十九日勅定の緋綬褒章を賜ひ以て之を褒彰せらる。（御版一個下賜）

○昭和四年六月十九日
大正十三年三月山口縣豊浦郡豊東尋常高等小學校建築費として金弐萬参千四百圓寄附す、依て大正七年九月十九日勅定の緋綬褒章を賜ひ以て之を褒彰せらる。（御版一個下賜）

○昭和五年十二月十三日
大正十二年九月關東大震火災救護會金弐萬圓寄附す、依て大正七年九月十九日勅定の緋綬褒章を賜ひ以て之を褒彰せらる。（御版一個下賜）

○昭和六年四月金鵄勲を引續賜よ。

○昭和拾六年二月二十六日
昭和十五年三月紀元二千六百年奈良縣奉祝會へ金二萬圓寄附す、依て大正七年九月十九日勅定の緋綬褒章を賜ひ以て之を褒彰せらる。（御版一個下賜）

略歴

本邦實業界の權威、現今我が化粧品界に於ける巨擘を以て目され、而かも其の人物の雄大にして一方ならず卓然たる勢力を有するもの是を貴族院議員、中山太陽堂社長、中山太一氏と爲す。

氏は中山小三郎氏の長男に生れ、稍長じて普通學を卒りたるも、當時家運振はず故に天性の向學心を十分に滿足せしむる能はず、初め厳格なる父君の膝下に訓育せられ、專で乃木大將と無二の友人たりし長府の名士、毛利一翁の門に入り其の薫陶を受く。氏十九歳にして郷里を出で門司の雜貨商石炭商等に入り、後大分市の藥種問屋志賀伊太郎氏方に入り、斯くて氏の正直と熱心振りは早くも認められ、一年後には同店の神戸支店長に擧げられしが、偶々感ずる所ありて禁酒斷行と共に同店を辭し、獨立雜貨商を創始し、明治三十六年四月中山太陽堂なる商號の下に化粧品卸商を開店せり。是れ氏が今日の大を爲す發端にして、當來氏が特有の着實性と而かも進取的營業方針を以て、孜々として努力せしかば、忽ち雜貨化粧品の卸業者として有數の地歩を占め、遂にパンぜ水白粉の東洋一手販賣權をも獲得するに至る。明治三十八年△店を大阪に移せり。是れ中山太陽堂初期の沿革なり。

明治三十九年四月優良化粧品の製造によりて海外よりの輸入を防遏せんと欲し、これが先驅としてクラブ洗粉を創製發賣せり。

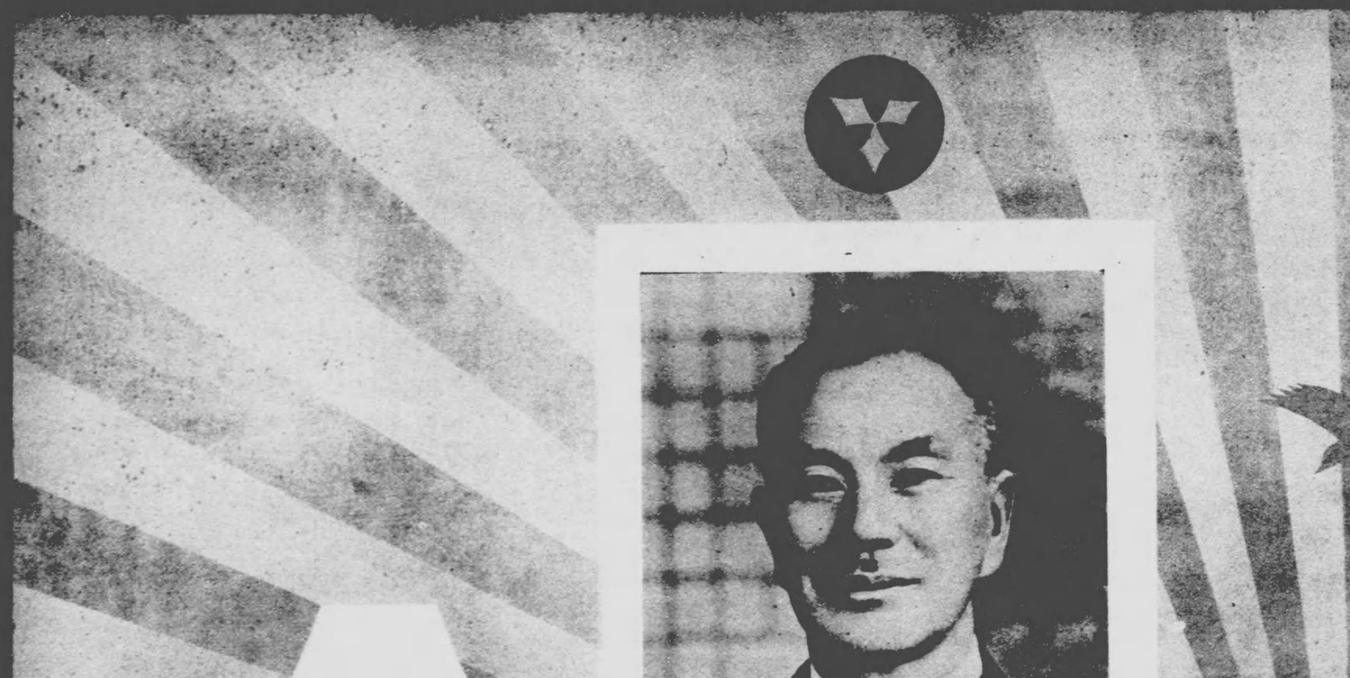
顧來各種のクラブ化粧品及石鹸等を學理と實驗との兩方面より研究の上製造せしが、何れも品質優良にして、大いに其の信用を博し事業益々發展して店舗は延年增加し、國内重要に應ぜしのみならず海外へ輸出するの盛況を見るに至れり。

氏は何人も追從すべからざる向上的研究心と老練の手腕を以て、克く傳來製品の販路を開拓すると共に、異常なる努力の下に事業を發展せしめ基礎漸く鞏固なるを得、中山化學工業所、中山文化研究所を新設して化學工業界の發展に盡瘁すると共に、精神文化の向上に俟り、最も完全なる日本文化の完成を期し、又大正七年現在の地に大規模の工場及營業所を新築するや能率調を特設して年來主張せる能率增進の諸施設を率先實行し、其の經營方法は一般實業界に活模範を示すに至れり。而して氏は自己の工場にこれを實施するを以て足れりとせず、各方面に亘つて能率增進法實施の急務なるを力說唱道する所あり、即ち大阪府市並に商工會議所が能率展覽會又は能率講習會等を開くや必ず率先して其の擧を助け斡旋盡力到らざるなく、或は大阪府立能率研究所の設立に、或は大阪商工會議所内産業實務振興助長委員會の設立せらるゝや之が委員長として産業の改善生活の改善等に關する調査の研究調査に專日なく、或は大阪府農業能率調査會、山口縣農業能率促進會設立に際しては何れも巨費を投じて之が事業を援助せしのみならず、他方農業能率增進の研究にも歩を進め或は農村振興策として農業村問題を研究發表し、非常時農業村救濟對策に貢する等、其の功績枚擧に遑あらず、即ち氏は大阪商工會議所内對支問題調査委員會委員長として、對支外交貿易に關する徹底的調査研究を行ひ、その結果を當局に建議し或はパンフレットを作成して我が朝野當局は勿論外國にまで頒布して我が帝國民の進むべき道を啓示し、正義公正と共存共榮の理想信念を高調とし倦ゆるが如き鞭と力を以て、擧國の産業振興に邁進せる氏の活動振りは恰も明治維新に於ける國士の活躍にも比すべきなり。

氏曰く「現時國家の危機に方り實業家は明治維新に貢獻したる志士の心を以て心となし現下直面せる國難打開に當らざるべからず、個人が皆國の爲め身命を捧ぐるが如く、吾等實業家が國家非常時に際し、個人の利害を超越して身命を賭し、一意産業興國に向つて邁進すべきは吾等實業家本來の使命なり」と。蓋し至言と云ふべし。

大正九年以來實業發展例に依り表彰せらるゝ事六回昭和六年四月金鵄勳を下賜せられ、其の他表彰せられたる數實に多く昭和四年今上陛下關西地方に行幸被ばされ、帝國産業の中心地たる阪神の商工業狀態を觀はせ給ふに際し、産業功勞者として特別の有難き御思召を以て拜謁を賜はり、更に工場には海江田侍從を御差遣ありて殖産奬勵の有難き聖旨を拜受し尚製品は屢々天覽又は獻上御高納の光榮に浴したるは洵に事業の面目業界の榮譽といふべし。

昭和十四年九月貴族院議員に當選し勅任せられたる外、大阪商工會議所副會頭を始め公私諸團體組合等の役員を兼ぬるもの八十有餘に及び一意專心産業報國のために勇往邁進しつゝあり。今や氏は實に本邦産業界の第一人者たるのみならず財界に於ける一方の巨頭として實力手腕を揮せらる。思ふに其の全身に溢る熱誠の精力と至誠赤誠に餘く今日の大をなさしめたるもの蓋し立志傳中の人物にして當代紳士の一模範たり。



の理想信念を基調とし燃ゆるが如き熱と力を以て、泉岡の産業振興に邁進せる氏の活動振りは恰も明治維新に於ける國士の活躍にも比すべきなり。

氏曰く「現時國家の危機に方り實業家は明治維新に犠牲したる志士の心を以て心となし現下直面せる國難打開に當らざるべからず、軍人が君國の爲め身命を捧ぐるが如く、吾等實業家が國家非常時に際し、個人の利害を超越して身命を賭し、一意産業報國に向つて邁進すべきは吾邦實業家本來の使命なり」と。蓋し至言と云ふべし。

大正九年以來實業發展に依り表彰せらるゝ事六回昭和六年四月金飾版を下賜せられ、其の他表彰せられたる數實に多く昭和四年今上陛下關西地方に行幸遊ばされ、帝國産業の中心地たる阪神の商工業狀態を聽はせ給ふに際し、産業功勞者として特別の有難き御思召を以て拜謁を賜はり、更に工場には海江田侍從を御差遣ありて殖産奬勵の有難き聖旨を拜受し御製品は屢〻天覽又は獻上御嘉納の光榮に浴したるは洵に事業の面目業界の榮譽といふべし。

昭和十四年九月貴族院議員に當選し勅任せられたる外、大阪商工會議所副會頭を始め公私諸團體組合等の役員を歷ぬるもの八十有餘に及び一意專心産業報國のために勇往邁進しつゝあり、今や氏は實に本邦産業界の第一人者たるのみならず財界に於ける一方の巨頭として實力手腕を嘱せらる。思ふに其の全身に漲る熱誠の精力と至誠は遠に能く今日の大をなさしめたるもの蓋し立志傳中の異彩にして當代屈指の一傑物たり。

株式會社川村商店相談役

褒賞受賞者

川村千代吉氏

明治七年十月十七日生

住所　東京市牛込區納方町一三

書類所　東京市日本橋區芳町二ノ一

株式會社川村商店相談役

緑綬褒章受賞者

川村千代吉氏

明治七年十月十七日生

住所　東京市牛込區弁天町一三

會社所　東京市日本橋區芳町二ノ一

氏は滋賀縣人川村長右衛門氏の四男にして滋賀縣神崎郡能登川村字北須田に生る。幼にして俊英の譽高く、群童の秀でたるが、夙に獨立自尊の念に富み、所謂近江商人たるの商魂と意氣を早くも示し、大いにその將來を囑目さる。

當時鄉黨同輩の外くは、京都または大阪を志すを例となせしが、氏は幼少ながら深く期すところあり、業を起し名を成さんには帝都に如かずと決意し、父君慈母に乞ふて同鄉の豪商にして東京に盛名高かりし田源商店の一小店員とはなれり。これ實に氏が今日の大を成すに至りたる第一歩にして、氏も亦立志傳中の逸材たるを失はず。

田源商店の一店員となりたる氏は、主家に仕へて精勵克く忠勤を勵み、身を持すること極めて謹嚴に、儉約を得てはこれを善用して教養の向上に勉め、心身の鍛錬陶冶を怠らず、專ら獨立自營の日を期待して商道の修得に務むところを知らざりしかば、年を逐ふて商才は嶄然に、人格また圓滿に備はり、同僚の景仰長敬するところとなり、主家先輩また氏を信認すること極めて厚かりき。

幼少にして父母の膝下を離れ孤獨の境遇に在りて、しかも幾多の刻苦辛酸に耐へ、不屈不撓の精神を堅持し得る者は稀れなり。氏の如く初志の貫徹に邁進し、これを達成すること速やかなりし者はまた異例とする足る。蓋し氏が非凡の才能を錬磨修練するに、到底凡人の企及し能はざる努力を拂ひたるに因るものにして、氏の足跡こそ、後進の以て龜鑑となすに足るものと謂ふべし。

明治三十五年主家を辭して獨立、繊物問屋を創業す。主家に在りて習得せし商道の機微に加ふるに、氏獨特の獨創的商略を以てし、着實堅實なる方針のもと、家業の興隆を期して孜々營々、一日半夜を怠せにせざる愛業の熱意は、商勢をして益々盛運ならしめ、業績頓々堂圖を加へたり。即ち昭和七年個人經營を合資會社に革め、機織の强化を圖ると共に、業容を整備基礎し、以て大成を期するの基礎を確立せり。

斯くて合資會社川村商店の名は嶄然東都同業界を壓するに至り、全國的信用を博し、販路頗る擴張するに及びしかば、昭和十二年更に組織を更改して株式會社川村商店となし、堂々の陣營を以て業界に臨むことにせり。

しかも氏は株式組織に變更の事成るや業務の一切を店員に委ね、自らは第一線を退きて、後陣に在つて大綱をのみ統ぶるにとどまる。經營を委ねられたる店員の總ては、もとより多年にわたりて同店に勤務したる、所謂一騎當千の强者揃ひたることは論を俟たざるも、委ぬるに業務の一切を以てしたる氏の雅量こそ氏の人格を物語るに足る歴然たる事實として推賞し措く能はざるところなり。

斯くの如き雅量と信賴と理解ありてこそ衆に長たるの資格ありと謂ふべく、また店員の將來を囑望して餘すところなき氏の宏大なる愛の象徴として着眼せざるを得ず。

氏の愛の宏大なるは、啻に店員に其の慈淨を齎らしたるにとどまらず、同郷後進に及ぶこと無邊にして、氏の恩寵によりて今日あるを得たるもの多く、殖産の誘掖指導、子弟の育英に盡瘁せし美擧枚擧に遑あらず。

ます夫人また天賚温良にして慈愛に富む。夙に高等女學校を卒へ才媛の譽高く、川村氏に嫁すや獻身一心同體の至誠を披瀝して夫君を扶けて內助の功偉大なるものあり、深く佛教に歸依して信仰の念厚く、子女の教養に渾身の努力を拂ひ、洵に子女の鑑にして現に京都村雲瑞龍寺門跡、東京村雲婦人會幹事長、愛國婦人會牛込區分會長、牛込婦人會名譽會員たり。

長男眞一氏東京帝國大學に學び鐵道省に奉職。とみ夫人との間に千惠子嬢あり。祖父祖母の鍾愛を一身に鍾め川村家圍欒の中心たり。

氏は叙上の如く鄉黨後進を導きて向上の途を拓き、慈父の如く敬慕さるるのみならず、私財を投じて一般社會公共に寄與せしほか、淨財を神社佛閣に寄進奉獻して敬神崇祖の精神を昂揚せし奇特の行爲尠からず、大正十四年以後における善行擧ね左の如し。

昭和三年九月滋賀縣官幣大社多賀神社修繕費として金壹千圓、同四年一月東京織物組合へ組合事務所新築費として金五百圓、同五年四月東京市杉並區猿之內立正高等女學校建築費として金壹千圓、同十年二月滋賀縣神崎郡能常高等小學校へ增築費として金五百圓、同六月滋賀縣神崎郡鄉守國神社石造大鳥居建立費として金五百圓、同十月日本赤十字社事業費として金壹千圓、同十一年十一月恩賜財團濟生會へ東京市窮民救療費として金壹千圓、同十二年七月東京市牛込區衞生會事業費として壹百圓、同十一月牛込區社會事業後援會事業資金として金五百圓、同十五年五月帝國水難救濟會へ事業資金として金壹千圓を寄附、更に信仰の發露として大正十四年八月靜岡縣清水市村松海長寺寶藏建立費として金百五拾圓、昭和二年九月同寺の殿堂建立費として金六百圓、同六年三月東京市大森區池上本町日蓮宗大本山本門寺宗祖六百五十遠忌記念事業費として金五百圓、同九年九月本門寺勅額並に修復費として金五百圓、同十年八月山梨縣南巨摩郡身延山日蓮宗總本山身延久遠寺本願金として金壹千五百圓を、同十一年四月京都市西陣村雲瑞龍寺門跡保存會基金として金壹千圓、同十月開基寺鬼子母神堂建立費として金貳百五十圓、同九月本門寺境內に勝海舟、西鄉南洲兩雄記念碑建立に際しこれが資金として金參百圓、同十二年一月本門寺基本金として金壹千圓、同十三年二月東京市下谷區上野町德大寺改築費として金七百五十圓をそれぞれ寄附

關係當局より受賞すること二十數回に及び日本赤十字社有功章、恩賜財團濟生會黃色有功章、帝國水難救濟會一等有功章を授與されしが、就中昭和十三年十二月日本赤十字社事業費として、壹萬圓を寄附せし廉に依り、同十四年四月十三日勅定の褒章を賜ひ其の善行を表彰せらるるの光榮に浴したるは、氏の光榮たるのみならず一族一門の光榮と謂ふべきなり。

榮光燦然たる川村家の主柱たる氏は、更に紀元二千六百年奉祝式典參列せらるるや東京府代表として盛典に參列するの光榮に浴す。氏の餘生を飾るに足る榮誉と謂ふべし。

今や氏は家業の第一線を退き、株式會社川村商店相談役として、大綱をのみ統ぶるの任にありと雖も、職域奉公臣道實踐の至誠を披瀝して、餘生を奉公の一途に投ぜんことを志し、機會を捉へては全店員を激勵し、苟しくも私利に走るを戒めて國策に翼贊せしめ、愈機の搗ぎなきを期すると共に、公益優先の理念を會得せしむるに專念し、悠々自適の生活に似て然かも實行を怠せにせず、多年の經驗と修道を說きて自らこれを實踐し、模範の實を示せる偉挙なる態度は、以て非常時局下における産業人が儼乎として學ぶに足るものなり。

川村千代吉氏

一等有功章を授與されしが、就中昭和十三年十二月日本赤十字社事業費として、壹萬圓を寄附せし廉に依り、同十四年四月十三日勅定の緋綬褒章を賜ひ其の善行を表彰せらるるの光榮に浴したるは、氏の光榮たるのみならず一族一門の光榮と謂ふべきなり。

榮光燦然たる川村家の主柱たる氏は、更に紀元二千六百年奉祝式典擧行せらるるや東京府代表として盛典に參列するの光榮に浴す。氏の餘生を飾るに足る榮譽と謂ふべし。

今や氏は家業の第一線を退き、株式會社川村商店相談役として、大綱をのみ統ぶるの任にありと雖も、職域奉公臣道實踐の至誠を披瀝して、餘生を奉公の一途に投ぜんことを志し、機會を捉へては全店員を激勵し、苟しくも私利に走るを戒めて國策に順應せしめ、堅實の擡ぎなきを期すると共に、公益優先の理念を會得せしむるに專念し、悠々自適の生活に似て然かも言行を忽せにせず、多年の經驗と修道を說きて自らこれを實踐し、垂範の實を示せる眞摯なる態度は、以て非常時局下における産業人が龜鑑として學ぶに足るものなり。

故郷元次郎氏

勲級表章受賞者

牧野元次郎氏

明治七年一月十七日生
住所　東京市麻布區仲之町十六
勤務所　東京市芝區大門通

多年貯金奨励に特異の存在を示し、全国に隆盛なる基礎を布く不動貯金銀行頭取牧野元次郎氏は、明治七年二月十七日を以て、彼の大國學者新井白石の生地たる千葉縣管轄久留里町に生る。實家は造り酒屋を大規模經營し、地主たり。父を治と言ひ、母をひさと呼ぶ。共長生日は恰も一箇月正月元日に當り、時刻は丁度午前七時頃にして、元次郎の名は、父君の名と元旦の元とを採り、又元は牧野家の元を成すといふ意味を含めり。後戸籍簿の書誤ひに由り、治と次を誤り、今の元次郎となれり。

明治十三年七歳にして、久留里町小學校に學ぶこと約半歳、父の任に伴つて旭國土宮村小倉良則の北總英語塾に入る。同廿一年十五歳の時、同塾廢業式當日の演説によりて、成田山新勝寺住職三遊亭圓朝師に共英才を認められ、同夏三遊師に伴はれて上京、共庇護により、當時九段上に在りし東京高等商業學校豫備門に入る。同廿五年過度の勉學の爲健康を害し、暫も病臥く。遂に學業廢止の宣告を受けて大に憔悴し、決死の覺悟を決し、御日基廟を入力率に描られつつ成田に歸還す。然るに病息漸に癒え、九死に一生を得たり。此時、眞心報力の不可思議を痛感す。同廿六年三遊師の勧奨する現時成田市參の前身成田共義會議に就職を取り、翌廿七年成田町に創立の成田銀行に遷へられ、銀貨の傍に當る。頭取は當時小倉良則氏なり。時に弱人三遊師の逝花に遭よ。氏が終生の情と感謝すべし。

明治三十一年和歌山縣士小學清氏の長男みつ子と結婚す。同三十三年平素抱懐せる所の國民貯金法を實施せんと欲し、資本金拾萬圓を以て不動貯金銀行を創立す。岳父小場氏名義上の頭取たるも、開業今日に至る迄で不動貯金銀行の歴史は本氏の歴史たるなり。同三十四年日清戰後の反動に襲はれ、財界に一大恐慌起りたるも、氏は代理店制度を組成して代理店三百箇所を設置し、早くも盛大の基礎は礼、同年九月四圓貯金を開始す。翌年取締役に共義會議員を増員して會議主義の新機軸を作り、隅も無く全國貯金を開始す。同三十九年出資金を三千萬金と改称す。同四十年大阪、京都、神戸其他六箇所に代理店を設置し、翌年東に廿四箇所に之を増設す。同四十四年政府の公債政策により財界好轉し、同年一月元旦始めて大廣告を執行す。同二月十一日ニコニコ貯金會を設立し五月本店を東京市芝區宮本町に新築移轉す。大正二年元旦貯金一千萬圓記念の觀音を表し、名古屋代理店を廢して支店と改称す。同五年、三年貯金をニコニコ貯金と改め同七年資本金五千萬圓に増額す。同八年五月十五日勝父治氏の長男に譲よ。此年は創立第二十年に當れり。同九年取締役會の改選に際はれ、銀行の取付、休業、破産説出したるも、同年今日に至る迄で不動貯金銀行の歴史は本氏の歴史たるなり。同三十四年日清戰後の反動に襲はれ、財界に一大恐慌起りたるも、氏は代理店制度を組成して代理店三百箇所を設置し、早くも盛大の基礎は礼、同年九月四圓貯金を開始す。翌年取締役に共義會議員を増員して會議主義の新機軸を作り、隅も無く全國貯金を開始す。同三十九年出資金を三千萬金と改称す。同四十年大阪、京都、神戸其他六箇所に代理店を設置し、翌年東に廿四箇所に之を増設す。同四十四年政府の公債政策により財界好轉し、同年一月元旦始めて大廣告を執行す。同二月十一日ニコニコ貯金會を設立し五月本店を東京市芝區宮本町に新築移轉す。大正二年元旦貯金一千萬圓記念の觀音を表し、名古屋代理店を廢して支店と改称す。同五年、三年貯金をニコニコ貯金と改め同七年資本金五千萬圓に増額す。同八年五月十五日勝父治氏の長男に譲よ。此年は創立第二十年に當れり。同九年取締役會の改選に際はれ、銀行の取付、休業、破産説出したるも、同行は堪つて益々盛況に赴き、預金五千萬圓の觀音を表し、本店を設け、資本金を二百萬圓に増加す。同十二年九月一日の大震火災には本店及上野、銀座、浅草四箇所の出張所共全部焼失の悲に遭ひたるも、幸営支拂を決行し共朝三千萬圓に達す。而も一方には預金二億圓を算せり。共後不正金融會社の跳梁、金融恐慌に悩るモラトリアムの發布等數多の波瀾ありたるも當行は微動だもせず。共間資本金を四百萬圓に増加し、更に八百萬圓とし、又現在の芝本店地鎮祭を執行し、昭和七年には創立第三十年記念祝典を執行する等、着實歩々仲進す。國家國民為め、各地に支店を増設し、重役陣を集化する等一層の發展を策し、昭和十四年には預金七億圓を突破し、金融機々として今日に至り、今や旭日昇天の勢を示せり。

氏は公共公開の念願る厚く氏の学生を調みれば物も銀行業と公共事業の爲に、此世に生を享けたるが如き感あり。去る昭和三年十月三日公益のため私財若干の寄を以て、勲定の綬綬賞牌下賜の光榮に浴し、同十一月銀綬功勞者として従六位に敘せらる。昭和八年五月十五日、共立女子職業専門學校に於て勲綬賞式を挙行せられ、翌年三月勲六等に敘金綬一條を賜はる。爲多國事に盡して綬綬賞牌を下賜せらるること前後五回に及べり。又當國水難救護會創設當より一等有功者として表彰し、共他牧野銀行會社に一百萬圓を寄附したる外、日本赤十字社、星製藥株式會社、帝國生命、帝國海上保險、日本體育協會を始め、数十の學校、慈善、教育、社會、勲綬等へ寄附を致したること實に数百萬圓を突破せり。

貴族院議員、大阪商工會議所、日本商工會議所各副會頭、ルーマニア國名譽領事、白耳義國、皇帝牙、ポリヴィア國各名譽領事、日本勉勵銀行株式會社取締役會長、株式會社鳥井製作所、株式會社新大阪ホテル各取締役、大日本航空株式會社、株式會社朝日商店各相談役、日本電氣興業株式會社監査役

故、勲一等瑞寶章受賞者

男爵 稲畑勝太郎氏

文久二年十月三十日生

住所　京都市左京区吉田牛諸地町

勤務所　大阪市北区堂島町二丁目

略歴

氏は京都府の人稲畑利助氏の長男、京都市烏丸通御池に生る。先代利助氏は京都市に機屋と稱する寫子商を營みて屢に繁昌あり、氏流を傳し文雅の途に通じたる過材にして、子女の教育に努力を拂じ、殊に勝太郎氏の如き應用化學の大家にして、わが國染色工業界の先覺者たり、關西財界の重鎭たるの偉傑を育成せり。

勝太郎氏明治九年六月京都府師範學校に入りしが、拔群の成績を認められて、至十年京都府より命ぜられて佛國に留學す。同十一年リヨン工藝學校に入學、專ら純正化學ならびに應用化學を專攻すること四ケ年、同十四年實地修得の目的を以て、同地工業家マルナス氏經營の染色工場に入り、自ら勞働に從ひて修練すること滿三ケ年、染色に關する學術と技能を會得したる氏は、更に同十七年リヨン大學に入りて應用化學の蘊奥を究むること一ケ年、同十八年歸朝するや京都府御用掛を命ぜられ、染色に關する敎授の任に當り、この間斯業の研究のため洋行すること八囘に及び、本邦染色業界に貢獻せし功勞顯著なるものあり。しかも修生を染色工業の一學究たるに甘んぜざる氏は、明治廿四年大阪市に進出して稲畑商店を創立、同二十九年合資會社稲畑染工場を創設自ら社長となり、商次實業界に意氣を成し、大阪商業會議所議員、同副會頭を歷任して大正十一年十二月同會頭に推さる。斯くて氏の大阪財界における地歩は確立し、副來その德望益々高く、業績とみに擴大し株式會社稲畑商店、稲畑染工場、日本染料製造株式會社各社長を經て、現に關係諸會社の顧問に參與し名實ともにわが國財界の重鎭たるに至れり。

大正六年三月一日染色工業に貢獻したる功績により勅定の褒賞後援會へ、それぞれ金五千圓を寄附せし廉により緒綬賞章を賜ふの光榮に浴す。

預金一千萬圓記念の祝意を表し、名古屋代理店を廢して支店を設置す。同五年、三年貯金をニコニコ貯金と改め同七年資本金五十萬圓に增額す。同八年五月十五日畿父治氏の長逝に遇ふ。此年は創立滿二十年に當れり。同九年歐洲戰後の反動に襲はれ、銀行の取付、休業、破產續出したるも、同行は却つて益々盛況に赴き、預金五千萬圓の祝意を表し、全國廿數箇所に支店を設け、資本金を二百萬圓に增加す。同十二年九月一日の大震火災には本店及上野、橫濱、橫須賀の四店燒失の厄に遇ひたるも、非常支拂を決行し其額三千萬圓に達す。而も一方には預金二億圓を算せり。其後不正金融會社の彈壓、金融恐慌に因るモラトリアムの發布等幾多の波瀾ありたるも當行は微動だもせず。其間資本金を四百萬圓に增加し、更に八百萬圓とし、又現在の芝本店地續祭を續行し、昭和七年には創立滿三十年記念祝典を執行する等、業勢愈々伸張す。顧來順風滿帆、各地に支店を增設し、重役陣を强化する等一層の發展を來し、昭和十四年には預金七億圓を突破し、業績隆々として今日に至り、今や旭日昇天の勢を示せり。

氏は公共公同の念頗る厚く氏の平生を顧みれば恰も銀行業と公共事業の爲に、此世に生を享けたるが如き感あり。去る昭和三年十月三日公益のため私財寄附の廉を以て、勅定の緒綬褒章下賜の光榮に浴し、同十一月民間功勞者として從六位に敍せらる。昭和八年五月十五日、共立女子藥學專門學校に於て胸像除幕式を擧行せられ、翌年三月陸海軍に航空機各一臺を寄附する等、幾多國事に盡して緒綬褒章飾版を下賜せらるること前後五回に及べり。又帝國水難救濟會總裁宮より一等有功章を拜受し、其他牧野報國會に一百萬圓を寄附したる外、日本赤十字社、恩賜財團濟生會、帝室博物館、日本體育協會を始め、數十の學校、警察、神社、佛閣等へ私財を致したること實に貳百萬圓を突破せり。

茶業

故 従五位勲五等 三好徳三郎氏

明治八年五月二日生

生地 京都府久世郡宇治町

自邸 滋賀市柴町二丁目二十四番地

略歴

夙に茶業に従りて、茶業に従事すること四十年、其間宵に製茶業の振興に多大の功労ありしのみならず、或は殖産興業に、或は社会公共に貢献し、又歴代総督を援助して、直接間接に鳥治上偉大なる貢献を致したる故三好徳三郎氏は、先代徳次郎の長男として、明治八年五月二日、京都府久世郡宇治町字宇治に生る。天資英邁剛毅にして、機略に富み、幼時の主情に依ゆ。創意、常時不振の極に在りし茶業の復興を期し、前田正名に従ひ、全国各地に奔走して、産業振興の金を叫び、進んで欧米各国の博覧会等に出品して彼を来する等、宇治茶業の更生に貢献する所大なるものあり。明治廿一年、皇太子殿下宇治に行啓の御時、其御行を拝せられ、長くも拝謁御調の光栄に浴せり。時に年僅に二十四歳なりき。

明治三十二年四月、新領土茶業の開拓に志して勇躍渡台、基北に於て茶業を開始す。爾来本島特産たる烏龍茶の創製研究に従事し、同三十六年には支那厦門、福州、汕頭、香港等の貿易政情を視察し、又同年大阪に第五回内国勧業博覧会の開催せらるゝに際し、茶業物産の共同販売店及び茶業茶の製茶店を設け、向之を機として本島人茶業の一覧として、内地と見事せしむる等茶業の発展に於ける貢献甚大なり。夏に温泉事業、大安北市の経営其他同島に於ける殖産興業の、あらゆる部門に氏の関与せざることと無く、基北商工会副会長を経て同議員となり、又総督府の最高諮問機関たる基隆総督府評議会員、同産業調査会委員を始め、教育、衛生、社会等数十を算する各種公共団体の重職に推さる、固も一野人にして克く官民融和の媒介たる存在として推戴せられつゝありき。

茲に大正十二年四月十六日、長くも皇太子殿下本島行啓の御際、基隆観光に当現したる功を賞せられ、勅定の銀盃を下賜せらるゝの光栄に浴せり。

昭和十四年初春、基隆官民代表皇軍慰問使を丟嘱せられ、南支及び仏印に、皇軍陣営将兵を慰問し、聖寿無病を祈、同四月三日凱旋として帰く。危篤の報天聞に達するや同十二日特旨を以て従五位を追賜せらる。死して餘栄ありと言ふべし。

丸武印刷、巴川製紙所、昭和写真工業、東京セロファン紙、三協日本エッチビー特許製版各株式会社々員、東京印刷、東京美術、凸版工場、大明印刷紙、新民印書館、華中印書局、日満文化各株式会社取締役

故銀盃授与者

井上源之亟氏

明治十二年十一月三日生

本籍 東京市麹町区五番町十番地五

自邸 同 上

勲一等瑞寶章受賞者

井上源之亟氏

明治十二年十一月三日生
本籍　東京市麹町區五番町十番地五
自邸　同　上

略歴

印刷が一國文化の程度を示す尺度たると、又紙業代の家業たる製紙業に密接不可分の關係にある點より夙に本邦印刷界の啓發を志し、敢然此事業に精進して、甚大なる貢獻を致し今や業界に君臨するの概あるもの、之を井上亟之丞氏其の人と爲す。

氏の先々代は大阪に於て紙問屋を營み、榮座と號し、多く江戸物を主として營業し、又先代源三郎氏は製紙に志し、あらゆる所有特種製紙の研究に沒頭したる新界の先覺者たり。氏は明治十二年十一月三日を以て生れ、長じて父君を援けて製紙の業に携り、傍ら明治三十三年印刷業を創始す。元來電信用雁皮紙及び現字紙は專ら海外より其の供給を仰ぎつゝありしが、一朝輸入杜絶せんか、我通信機關上に受くる打撃計り知るべからざるを慮り、一に國家的見地より深謀を廣外觀し、大正三年靜岡縣安倍郡入江町に於て、未だ曾て何人も着手せざりし製紙技術上の最難事たる之等特殊の研究製造に當る。是今日の株式會社巴川製紙所の濫觴たり。爾來倦憊たる苦心を重ねて逐歩改良を加へ、遂に外國品に優るの實績を擧げ、其の輸入を防遏するに成功す。大正九年先代の逝去と共に、其の遺業を繼承して社長を襲ひ、益〻内容の充實、經營の刷新に努力し、以て今日の隆盛を見るに至れり。其の他電氣絶緣紙を始め、電信用感光紙、紙幣各種證券類革包裝切符等の特種用紙、一般洋紙等の製造に當り、之等の中には十數種の特許權、新案權を有するものありて、國内の用途に充つるのみならず、滿洲、支那、其他諸外國へ輸出しつゝあり。斯の如く氏は製紙業の發展に努むると共に、印刷業にも力を注し、曩に東京印刷同業組合長に推さる。其の間オフセット印刷、エッチピー特許製版法の輸入紹介、關東大震火災の際内閣印刷局を始め、帝都に於ける印刷機能の停止を見るや、百方奔走の方策を講じ、以て當局の委囑を完了したる等功績顯著なるものあり。爲めに内閣印刷局長より表彰せらる。又印刷事業に精勵し、新業の發達に力を致したる廉を以て大正十二年十一月三日勅定の綬褒賞章下賜の光榮に浴せり。

凸版印刷、巴川製紙所、昭和寫眞工業、東京セロファン紙、三弘日本エッチピー特許製版各株式會社々長、臺灣興業、東京帝國、證倉工業、大昭和製紙、關東製紙、新民印書館、帝中印書局、日滿文化各株式會社取締役

會副會長となり、又總督府の最高諮問機關たる臺灣總督府評議會員、同產業調查會委員を始め、敎育、軍事、社會等數十を算する各種公共團體の重職に推さる。而も一野人にして克く官民融和の體關を擔り、民間總督の名を恣にせられつゝありき。

茲に大正十二年四月十六日、長くも　皇太子殿下本島行啓の御砌、殖産興業に寄與したる功を賞せられ、勅定の綬褒章を下賜せらるゝの光榮に浴せり。

昭和十四年初春、臺灣官民代表皇軍慰問使を委嘱せられ、南支及び廈門に、皇軍陸海將兵を慰問し、歸來病を得、同四月三日遂逝として逝く。危篤の報天聽に達するや同十二日特旨を以て從五位を追賜せらる。死して榮ありと言ふべし。

故 吉 原
義、緑綬褒章受賞者

神 八 三 郎 氏

慶應二年二月十九日生
北海道釧路市村本町一番地

略 歴

氏は青森縣人神治五右衛門氏の長男、青森縣西津輕郡鰺ヶ沢村に生る。夙に北海道開拓の雄圖を抱いて渡道、釧路市において先づ土木請負業を營む、のち農業に轉じ、家業の興隆に精勵して怠りなかりしが、傍ら農業の振興に意を用ひ、農會をもつて開拓の初志を達成せんことを期し、明治二十七年來開拓地五十餘萬坪の貸下を受け、專心牧場の經營に從ふに至れり。

爾來優良馬の增殖に勉め、盛ん外國種馬の貸下を受けて改良を圖ると共に、國內優良牧場を具さに視察して種馬を購入するほか、牛馬の改良を期するには組合の結成を急務とする に鑑みてこれが實現に奔走し、同三十九年組合の設立を見るや推されて副會長たり、更にまた馬匹共進會を開きて產馬事業の發展に資し、釧路圖を組織しては馬匹知識の向上に勉め、或ひは共同牧場、家畜市場の設置を促進せしむるなど、北海道畜產事業今日の殷盛あるは氏の努力の賜にして、其の功績偉大なるものあり。

氏の產業興業に貢したる功績は、實に畜產業界にとどまらず、農業の振作につきても寄與するところ鮮少ならず。明治三十三年初めて農會設立さるゝや副會長たり。農林省、陸軍省馬政局、日本產馬協會、大日本農會、北海道廳、北海道畜產組合聯合會、其の他關係當局ならびに、諸團體より表彰され、受賞すること又一再にとどまらず、就中大正九年二月鳩比戰亂神社基本金として金壹萬圓を寄附せし廉に依り、同十五年十月十八日勅定の緑綬褒章を賜ふの光榮を荷ぬ。

しかも同年十一月十日赤坂離宮御苑において開催されたる觀菊御會に召され、越へて昭和六年四月十日新宿御苑において開催されたる觀櫻御會に召さるゝの光榮に浴す。以て氏の功勞の偉大なるを證するに足るべし。

緑綉綬褒章受賞者

故 新 田 長 次 郎 氏

安政四年五月二十九日生
大阪市浪速區久保吉町

○明治三十五年五月八日

夙に製靴用諸革の輸入を外國に仰ぐを慨し奮然之れが製造を起業し刻苦研鑽遂に純粹なる油革を製出し品質

緑綬褒章受賞者

従五位 故 新田長次郎氏

安政四年五月二十九日生
大阪市浪速區久保吉町

○明治三十五年五月八日

夙に製靴用諸革の輸入を外國に仰ぐを慨し奮然之れが製造を紀業し刻苦研鑽遂に純粋なる油革を製出し品質優良絶倫品を凌駕し新田製油革の名聲を遠邇に發揚し等で諸工業の機なるに臨ひ機械帶革の需要益増加するを觀て其製作と改良とに苦心し尚ほ進で斯品の輸入を杜絶せんと欲し慘憺經營日夜職工を督勵し支店を各地に設けて以て供給を便にし歐米各國に派航して商況を視察し益々業務を擴張し販路を海外に開くに至る洵に實業に精勵し衆民の模範たり依て明治十四年十二月七日勅定の緑綬褒章を賜ひ其善行を表彰せらる。

○大正二年六月九日

大正十一年八月恩賜財團濟生會へ金一萬圓寄附す依て大正七年九月十九日勅定の紺綬褒章を賜ひ以て之を表彰せらる。

○大正十三年二月十一日

夙に調革を創製して一般工業の發展に資し其功績紗からず關係益々製造技術の改善事業の發展を圖り販路を海外に擴むるに至る其他牧畜開墾に力を盡すなど功績意々顯著なりとす依て明治十四年十二月七日勅定の緑綬褒章を賜ひ其善行を表彰せらる。

○昭和二年五月廿三日

大正十二年十二月及同十四年十一月愛媛縣道後温泉郡味生等常高等小學校改築費並北海道帝國大學醫學部創立費寄金金二萬五千圓寄附す依て大正七年九月十九日勅定の紺綬褒章飾版一箇を賜ひ以て之を表彰せらる。

○昭和三年八月十六日

昭和三年四月日本赤十字社大阪支部病院建築費金一萬圓寄附す依て大正七年九月十九日勅定の紺綬褒章飾版一箇を賜ひ以て之を表彰せらる。

○昭和四年二月十八日

大正九年九月明治神宮事業會へ金一萬圓寄附す依て大正七年九月十九日勅定の紺綬褒章飾版一箇を賜ひ以て其善行を表彰せらる。

○昭和五年一月廿八日

昭和四年四月愛媛縣道後令建築費金一萬圓寄附す依て大正七年九月十九日勅定の紺綬褒章飾版一箇を賜ひ以て之を表彰せらる。

○昭和五年二月十八日

大正二年九月關東大震火災救援費金二萬圓寄附す依て大正七年九月十九日勅定の紺綬褒章飾版一箇を賜ひ以て之を表彰せらる。

氏は安政四年五月二十九日愛媛縣温泉郡味生村山西に生る。父は喜惣次、母を宇多と曰ひ其の第二子なり。五歳の時父を喪ふ。母氏常に稚子に訓へて家を興すを志さしむ。曾て呼倫布の事蹟を聞き自ら奮つて曰く、丈夫須く人に先んじて見を立つべしと。弱冠にして志を決して漢事に來り、獨人に從うて醸革の術を習ひ明治十八年工場を難波に設け其の業を創む。時に工業時に興らんとす。醸革の用必ず多量なるべきを察し、潜心研鑽發明する所多く遂に之を完成し市俄古、巴里の博覧會に賞牌を得たり。亦親ら欧米を巡りて見聞を弘む。

歸後其の業年を追うて盛に、遂に外品を駆逐するに至れり。性明敏強毅款誠に明に、志す所は必ず成し一事已に成れば又其の次を慮ふ。創むる所の工業用開業、圓形單寧、木綿圓寧、膠ゼラチン及ベニヤ板の類皆一世の先驅たり。而して大に實業を興盛し海外に波及す。其の工場各地にあるもの六萬餘坪に達す。山林三萬町を北海道に得て農圃牧場を營めり。

又私財を以て有隣小學校を設けて鄉里の子女を教へ、松山高等商業學校を建て、地圓の青年を育す。其の身赤皆を寺西易堂に學び晩年以て樂しみとせり、其の工場に使ふ所數千人之を愛すること家人の如く衆の喜ふこと慈親の如し。唯是のみならず大正の初林業を紀州熊ノ地方に創め以て保養に資し遂に廣く公衆の樂園となせる如きは其の已を推して人に及ぼすの心亦見るべきなり。

故を以て其の業益々進んで聞して其の業益々顯はれ明治三十五年帝に勲綬褒章を受け大正十三年更に其の飾版を受く。大正四年特に正六位に敍せられ従業の勤勞を賞して工場に臨まれしこと前後四回。而して又屢々勲等階級の昇に浴す。

昭和十一年七月十七日病を以て卒す、享年八十。井上氏の女ヅルを娶り五男三女あり、卒するや特旨従五位に追敍せらる。其の逸話に不朽なるべきなり。（藤澤幸太郎氏談）

大正四年特に正六位に叙せられ侍従の聖旨を奉じて工場に臨まれしこと前後四回、而して又數々賜謁陪餐せらる。其の榮誉に不朽なるべきなり。（藤澤章次郎氏撰）

偏の恩に浴す。

昭和十一年七月十七日病を以て卒す、享年八十。井上氏の女ツルを娶り五男三女あり、卒するや特旨従五位に

氏 閘右

春日井丈右衛門氏

明治三十二年十二月七日生

住所　名古屋市千種區若竹町三ノ一七

營業所　名古屋市中區御幸本町通六

○昭和二年四月恩賜財團救生會（會金壹圓寄附の度に依り、同年六月二十一日勅定の紺綬褒章を賜ひ、其の普行を表彰せらる。

○大正十二年關東震火災救援費として金壹萬圓寄附の度に依り、昭和二年十月二十八日勅定の紺綬褒章飾版壹個を賜ひ、其の普行を表彰せらる。

○昭和七年二月名古屋市公會堂建設資金として金壹萬圓寄附の度に依り、同年九月二十四日勅定の紺綬褒章飾版壹個を賜ひ、其の普行を表彰せらる。

○昭和十二年四月愛知縣立第一中學校に入り優秀の成績を以て大正六年三月卒業するや愛知縣立第一中學校に入學、專念學業の修得に邁進せしも、家事上の都合に依り在學一ケ年に滿たざるに先き立つて、第二學期を終るや大正八年中途退學、歸鄉して家業に從事することとなれり。

氏家業に從事するや厳父を助きて家業の組織を刷新して株式會社春日井商店となし、自ら社長の重責に就くと共に、父君を顧問として萬端の一切を統管するに至る。

即ち氏は父君傳來の家業を經營するに當りて、先づ時代に適應せる組織機構の確立を期したるものにして、株式會社春日井商店社長として登場したる氏は、方に新進氣鋭の少壯實業家として、同業界注目の的となれり。

氏の實施斷行にして當實、實利ある英斷を包むに謙遜の美德を以てし、擅進果實の營業方針を以て家業の發展を促進せしなるを店是と爲し、聊かも奇調に走ることなかりしかば、春日井商店の商勢は頓々重厚を加へ、その主柱たる氏の人格を反映するに至れり。

氏は家業を經營する傍ら餘力を擧つて、中京實業界に進出し、其の手腕せる事業夥からざるも、株式會社名古屋銀行、帝國生命保險、同火災保險重役として金融、保險界に活躍するとともに、土地經營に興味を關心を有し、巨額の資本を投じて、中京實業に貢したる功績また洵すべからず。中京名古屋が近時急速なるテンポを以て大産業都市たるの地歩を築き得たるは、氏らを中心とする土地經營のよろしきを得たる賜といふべきなり。

いまや氏の關係する諸事業は、國家未曾有の時局に際會して、益々其の使命の重大性を加へつつあるも、夙に事公の赤誠を披瀝して、同業社會に率先するの念慮き氏は、必ずやさらに職域奉公の實績によりて、重大責務を遂行すべく、中京財界の重鎭として多大の期待をもつて、其の將來を注目されつつあり。

勤續く四十餘歳にして氏今日の地歩を築き得たるは容易の業にあらず、父君の恩寵大なりと雖も氏が非凡の人材たるを證して餘りあり。

父君丈右衛門氏は夙に昭和二年紺綬褒章を賜はの光榮に浴したるが、氏も亦同揚の諸事行に依り、勅定の紺綬褒章並に御厩を賜ひ、家門に不滅の榮光を添へたり。

森原雅藏氏

卽ち氏は父祖傳來の家業を經營するに當りて、先づ時代に適應せる組織機構の確立を期したるものにして、株式會社春日井商店社長として登場したる氏は、方に新進氣鋭の少壯實業家として、同業界注目の的とはなれり。

氏の資性温厚にして篤實、溌剌たる英氣を包むに謙讓の美徳を以てし、穩健堅實の營業方針を以て家業の發展を促進せしむるを店是と爲し、聊かも奇矯に走ることなかりしかば、春日井商店の商勢は彌々重厚を加へ、その主柱たる氏の人格を反映するに至れり。

氏は家業を經營する傍ら餘力を驅つて、中京實業界に進出し、其の干與せる事業尠からざるも、株式會社名古屋銀行、帝國生命保險、同火災保險重役として金融、保險界に活躍するとともに、土地經營に深き關心を有し、巨額の資本を投じて、中京發展に資したる功績また沒すべからず。中京名古屋が近時念逸なるテンポを以て大産業都市たるの地歩を築き得たるは、氏らを中心とする土地經營のよろしきを得たる賜といふべきなり。

いまや氏の關係する諸事業は、國家未曾有の時間に際會して、益々其の使命の重大性を加へつつあるも、夙に奉公の赤誠を披瀝して、國家社會に奉ずるの念厚き氏は、必ずやさらに職域奉公の實踐によりて、重大責務を遂行すべく、中京氣鋭の產業人として多大の期待をもつて、其の將來を注目されつつあり。

齢漸く四十餘歳にして氏今日の地歩を築き得たるは容易の業にあらず、父祖の恩惠大なりと雖も氏が非凡の人材たるを證して餘りあり。

父君丈右衛門氏は夙に昭和二年紺綬褒章を賜ふの光榮に浴したるが、氏も亦嗣揚の諸善行に依り、勅定の紺綬褒章並に飾版を賜ひ、家門に不滅の榮光を添へたり。

日本金属株式會社、日本電気冶金株式會社、國光鋼線鋼索株式會社、大平鐵鋼株式會社各取締役、日本鍛鋼工業株式會社、北海道クローム工業株式會社各監査役、廣島瓦斯作所相談役、合資會社桑原商店代表社員、緑綬褒賞有資

緑綬褒章受賞者

桑原雅隆氏

明治三十年五月十八日生
神戸市葺合區諏訪町二ノ九二

桑原家の祖は今治藩士。雅隆氏は先代雅次郎の長男として廣島縣今治に生る。

父雅次郎氏は、夙に商工を以て家を立てんと志し、功を樹て名を成さんには、今治にとどまらんよりは、寧ろ藩下の首都たる廣島に出づるに如くはなしと、多年傳統の家門を断る家郷の地今治を去り、決然と廣島に居を移し一家の振興に專念する傍ら、子女の教育に勉め、大いに將來に期するところあり、即ち長男雅隆氏をして、凡庸の實業家たらしめんよりは、飽々たる覇気を以て國運進展上にありたる工業界に雄飛せしめんことを期し廣島縣立工業學校に入學せしめたり。

父君の意圖を體得したる雅隆氏は、家にありては克く父の家業を扶けて學業に怠りなく、學校にありては專心學業に勵み、常に優秀なる成績を擧げて、學友間歿の的となる。

學業を卒るや、直ちに神戸市に出で、鐵鋼材料の取扱ひ業を開始せしが、習得したる專門知識は、材料品の選擇ならびに用途の選別を誤らしめず、當時同業の多くが、無反省にして無責任なる紙賣により、不當なる巨利を壟断とする中にありて、常に良心的なる營業方針に終始し、鐵鋼業に拜袋するところ夥からず、關係方面の信用また加うにして加はり、業界噺みに嘱目し、期せずして今日の大を成す基礎を築くに至れり。

業務の確立を見たる氏は鐵鋼業の使命の重大性と家業の重責に鑑みて營業機構の擴充整備を期し、大正十年四月合名會社桑原商店を創立、益々の資本と機構のもとに、清々業界に於ける地歩を進めしめるとともに、關聯ある諸事業に參畫し、重工業の原動力の振興に拜身の努力を投じ、非常時國家の產業人として、滅私の職域奉仕に眞金を期しつつあり。

夙ち日本金屬株式會社、日本電氣冶金株式會社、國光鋼線鋼索株式會社、大平鐵鋼株式會社、其他諸會社に取締役たるほか、日本鍛鋼工業株式會社、北海道クローム工業株式會社監査役、廣島瓦斯作所の相談役として經營の手腕を揮ひつつあり。

氏は斯くの如く特殊なる產業人として、戰闘の至誠を自ら職域を通じて披瀝しつつあるのみならず、常に意を社會公共事業の發展に用ひ、私財を投じて新興の助成に盡瘁せしところ枚擧に遑あらず、また各種公職を歴任して、海軍の眞珠問題克く其の使命を達成し、今や後望を負ふて指導者の任にあり、吉岡在海軍人會名譽會員として、海軍の振興を助長し、司法保護委員として社會秩序の保全に協力したる功績は特に顯著なるのみならず、すでに救濟會一等有功社員、日本赤十字社有功社員、飛行協會有功社員たるの榮譽を擔ふ氏が、國家有用の職事業に貢獻したるところは、誠めて多大なり。

鐵鋼事業に關聯せる從業により、財を成し富を積みたる者にして、所謂經濟浮利なる成金的美名を厭ひ、私利を遠ふに急なるも、公益を忘れて關みざる者多き中にあげて、氏の如く實質最關の美徳を備へ、公益優先の觀念を勞行して怠らず、社會國家に奉するところ偏めて厚き者は極めて稀れなり。まさに非常時國家に於ける模範的實業家にして、また國民常態の鑑となすに足れり。

支那事變勃發するや、皇軍連戰連勝の勝功に關ひるため、あるひはまたこれを慰問激勵するため、慰兵費として私財を投じ銃後國民の實踐を遂行するの眞摯なると、軍時眞摯を示しつつあることは、わが國特有のことにして、眞に勝るべき現象なるが、神戸市に於て先づ率先して陸海軍に獻金したるは實にわが皇軍崇敬氏にして、氏が金壹萬圓を陸海軍に獻金するや、獻金の美擧續出し、神戸市の名を擧しめざる良好なる成績を示すとともに、愛國精神を昂揚し、銃後國民の實踐遂行を刺激促進せしめる上にも多大の效果ありたり。後世若し光輝ある獻金史を編む者あらば、必ずや氏の功績を讃ふるため、一頁を割くに吝かならざるべし。

氏の養父雅次郎氏は大正十五年三月逝去し、氏の養金く成るの感時を見ざりしと雖も、父君の素志は、氏今日の盛名によりて、豈々實現遂度されたりといふべく、氏の學愛また金きを得たりといふべし。

昭和七三年一月日本赤十字社兵庫支部事業費として金壹萬圓寄附の擧に依り、同年四月二十三日勲定の緑綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

紺綬褒章受賞者

桑原セイ氏

明治十年十一月二十六日生
神戸市葺合區諏訪町二ノ九二

略歴

氏は鹿山幕士岩川清光氏の長女として、鹿島郡鹿山に生る。

明治二十八年今治藩士桑原静平氏の三男雅次郎氏に嫁す。

氏は所謂良妻賢母の典型にして、夫貴雅次郎氏の指導の妻として内助これ努め、家業の隆盛に與つて力ありたるのみならず、子女の教育に當りては寛厳よろしきを得、其の天性を伸べしめるに留意し、特に因循姑息の風に染まるを戒しめしかば、子女能ね明朗闊達の裡に育成され、剛健また明晰にして優秀なる成績を擧げて慈母に報ゆるを常とせり。

氏は特に長男雅賊氏の凡傭ならざる資性に留意し、其の將来を嘱目せしが、夫君の意に従つて鹿島郡立工業學校に學ばしめ、工業家を以て身を立てしめんことを期せり。

大正十五年三月、夫君逝去するや、既に學業を卒へ、製鋼材料商として神戸市に活躍せる長男雅賊氏を扶け、慈母としても將また愛兒の優秀なる助手として、家業に精勵倦むところを知らず、家業の隆盛と、雅賊氏の成功を唯一の慰樂となせり。

慈母の愛に育まれ、更にまた、其の敏身的助力に激勵されたる雅賊氏の活躍は、常に目覚ましとして生氣あり、家業の發展頓に良好を加へ、遂に業界に堂々の地歩を占むるに至りたるのみならず、日本金属、日本電氣冶金、關光製鋼鋼業、大平鋼業、日本製鋼工業、北海道クローム工業、鹿島旭製作所等諸會社の重役として、關係業域多岐にわたつて擴大するに至れり。

雅賊氏が、幼くして父君を失ひ、幼にして母君を喪ひ、幼にして家業を繼ぎ、幼にして一家の主人となり、幼にして事業界に活躍せるは、勿論、氏の非凡にして卓抜せる才能と、精勵不撓の努力に因るものなるも、また、慈母セイ氏の愛と、賢母セイ氏の督勵よろしきを得たる賜といふべく、セイ氏の良妻にして賢母たりし生活記錄は、推して餘道の亀鑑とするに足れり。

今や愛息雅賊氏、同ヨシ子夫人ならびに孫、一二男晋、敬子孃の愛孫に擁せられて一家團欒の中心たるセイ刀自は、愛息とともに社會公共事業に盡瘁するため私財を投ずるを唯一の樂となし、刀自名義の寄附獻金許しとせず。

昭和十四年十一月愛國結人會兵庫支部事業費として金壹萬圓寄附の廉に依り同十五年六月五日勅定の紺綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

活躍を助長し、司法保護委員として社會秩序の保全に協力したる功績は特に脳著なるのみならず、すでに城崎會一等有功壯員、日本赤十字壯有功壯員、飛行協會有功壯員たるの榮譽を擔ふ氏が、國家有用の諸事業に貢獻したるところは、極めて多大なり。

製鋼事業に關聯せる家業により、財を成し富を積みたる者にして、所謂經濟淨滅なる成金的奢奢を誡ひ、私利を逐ふに急なるも、公益を忘れて顧みざる者多き中にありて、氏の如く質實剛健の美徳を備へ、公益優先の理念を勵行して怠らず、社會國家に奉ずるところ極めて厚き者は極めて稀れなり。まさに非常時國家に於ける模範的實業家にして、また國民業庶の範となすに足れり。

支那事變勃發するや、忠勇義烈なる將兵の勳功に酬ひるため、あるひはまたこれを慰問激勵するため、恤兵費として私財を投じ銃後國民の責務を遂行するの風熾んとなり、麗しき銃前銃後一體の戰時風潮を示しつつあることは、わが國特有のことにして、萬國に誇るべき現象なるが、神戸市に於て先づ卒先して陸海軍に献金したるは實にわが桑原雅隆氏にして、氏が金壹萬圓を陸海軍に献金するや、献金の美擧續出し、神戸市の名を昂しめざる良好なる成績を示すとともに、愛國精神を昂揚し、銃後國民の責務遂行を刺戟促進せしめる上にも多大の效果ありたり。後世若し光輝ある獻金史を編む者あらば、必ずや氏の功績を讃ふるため、一頁を割くに吝かならざるべし。

氏の嚴父雅次郎氏は大正十五年三月逝去し、氏の業全く成るの盛時を見ざりしと雖も、父君の素志は、氏今日の盛名によりて、堂々貫徹達成されたりといふべく、氏の孝養また全きを得たりといふべし。

昭和七三年一月日本赤十字壯兵庫支部事業費として金壹萬圓寄附の廉に依り、同年四月二十三日勅定の紺綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

株式會社前川商店取締役社長、前川太兵衛商
店代表者、株父自動車株式會社取締役社長、
全日本計理士協會理事、計理士

緑綬褒賞受賞者

從七位　**前川萬治郎氏**

明治二十四年四月六日生
住　所　東京市小石川區大塚窪町三八
勤務所　東京市日本橋區富澤町九ノ三

略　歴

氏は東京府の人、前川太兵衛氏の長男にして、東京市日本橋區富澤町に生る。

夙に學問に學び、初等、中等科を終るや、更に進んで東京商科大學の前身たる東京高等商業學校に入り、大正二年優秀なる成績を以て卒業、直ちに父君の家業たる織物卸業に從ふ。父君を扶けて家業に精勵し、大正七年四月貿易部主任となり、非凡の商才を發揮して、家運の隆昌に資するところ尠からず、大正十二年家督を相續するや織物賣買並に加工業株式會社前川商店を設立し、自ら取締役社長たり。

これよりさき餘力に伸べて大正九年紡織機、兵器並に一般機械製造業株式會社日本機械製作所監査役に就任、昭和十二年同社解散に至るまで同社の機機に參畫して斯業の發展に寄與するところ多く、更に大正十四年不動産、有價證券賣買業千代田合資會社代表社員に就任、昭和四年自動車運送業秩父自動車株式會社監査役に就任、同八年同社取締役社長に就任して益々關係事業の多彩を加ふ。

この間昭和三年計理士認可登錄を受け、東京市小石川區大塚窪町三十八番地に計理士事務所を開設、同四年日本橋區通二丁目きん藤ビルディングに出張事務所を設け、更に同十五年日本橋區兜町二丁目三十七番地に千代田橋事務室を增設して、計理士の業務に從ふ。洵に氏の如きは精力旺盛なる活動家と謂ふべく、家業を營する傍ら金融、運送業を主宰し、な性計理士として活躍す。到底凡俗の士の企及し得るところにあらず。しかも氏は陸軍主計中尉として麻布聯隊區將校團日本橋區名譽評議員たるほか、P.本橋區青年團理事、日本橋區商業學校及び日本橋區高等小學校軍事訓練教官、圖婦支部顧問、防空指導本部參與、在鄉軍人會日本橋區聯合分會、富澤町中部町會、警防研究會各顧問、其の他軍事、公共諸團體の關係公職にありて專公の至誠を披瀝し區運實施に垂範の實を示しつゝあり。

昭和六年十一月恩賜財團濟生會へ金壹萬圓寄附せし厚に依り同七年八月調日勅定の緑綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

丸興製絲株式會社取締役

緑綬褒章受賞者

小口勝太郎氏

明治廿年十二月廿七日生
長野縣岡谷市下濱區

略　歴

氏は小口清助氏の長男、長野縣岡谷市下濱區に生る。

丸興製絲株式會社取締役

緑綬褒章受賞者

小口勝太郎氏

明治廿年十二月廿七日生

長野縣岡谷市下諏訪

略歴

氏は小口清助氏の長男、長野縣岡谷市下諏訪に生る。

先考清助氏夙に製絲業に從事し、いまだ斯業全く其の基礎をすら確立せざる時代にありて、研鑽克くこれが發展振興に精勵し、蠶種の改良、機業法の改善、同業の指導等に常に先覺者的企畫を試み、同業を刺戟當時し、家業の基礎確立するや、同族を糾合して小口組製絲所を創立、業界に盛名を馳せると共に、小口家の業績をして益々堅固ならしめたり。

勝太郎氏父業を嗣ぐや、又父君の遺志を伸ぶるに專念し、家業の興隆に過進して怠らず、時代の推移に伴ひて漸次家業の機構を改革し時代に適應せしめ、業容愈よ整然前勢頓みに殷盛を加ふるに至りて、小口組製絲所を擴充し丸興製絲會社を設立、自ら取締役となりて機機に參與し、社業の發展に資するところ鮮からず、今や父名を恥しめざる業界の重鎭として重きを成せり。

氏が小口組製絲所々長の任にありて、慧眼よく時代を達觀し、これを擴充して丸興製絲社の創立に參加せし業績は、事業人の夙しく學ぶべきところにして、氏の業界に信望あるは、偏遠明敏なる資性に負ふところ多しと雖も、また業界の發展を冀求してやまざる誠忠の熱誠に據るところ鮮からず。

氏の誠忠の熱誠は、其の發展するところひとり業界にとどまらず、社會、公共に奉ずるの至誠となりて發揚するを常とせり。

氏が司法保護委員方面委員、少年敎護委員、其の他社會事業關係諸團體の幹部を委嘱され、繁忙なる業務の中にありて日夜渾身の努力を投じ、其使命の達成に邁進しつつあるは、これ總て奉公の至誠が然らしむるものと謂ふべし。

氏はさらに今や軍優下にありて軍事援護聯絡指導委員、長野縣軍事援護中央相談所相談委員を囑託せられ、銃後國民の最前線を擔當し、責務の遂行に眞金を期しつつあり。氏が岡谷市會議員として自治の發展に寄與せし功績もまた沒すべからざるものあり。

昭和四年十一月八日社會公共に盡瘁したる善行鮮からざる廉に依り勅定の緑綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

今日本橋區内に一丁目三十七番地に生れて、計理士の業務に從ふ。洵に氏の如きは精力旺盛なる活動家と謂ふべく、家業を督する傍ら金融、運送業を主宰し、なほ計理士として活躍す。到底凡傭の士の企及し得るところにあらず。しかも氏は陸軍主計中尉として麻布聯隊區將校團日本橋區名譽評議員たるほか、日本橋區青年團理事、日本橋區商業學校及び日本橋區高等小學校軍事訓練教官、國郷支部顧問、防空指導本部參與、在鄉軍人會日本橋區聯合分會、富澤町中部町會、等防研究會各顧問、其の他軍事、公共諸團體の關係公職にありて奉公の至誠を披瀝し臣道實踐に垂範の實を示しつゝあり。

昭和六年十一月恩賜財團濟生會へ金壹萬圓寄附せし廉に依り同七年八月四日勅定の緑綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

日本硝子工業組合聯合會理事長、大阪府硝子工業組合理事長、大阪商工會議所議員、德永硝子株式會社々長、德永板硝子製造株式會社社長、德永硝子工業株式會社相談役、日本硝子屑統制株式會社々長

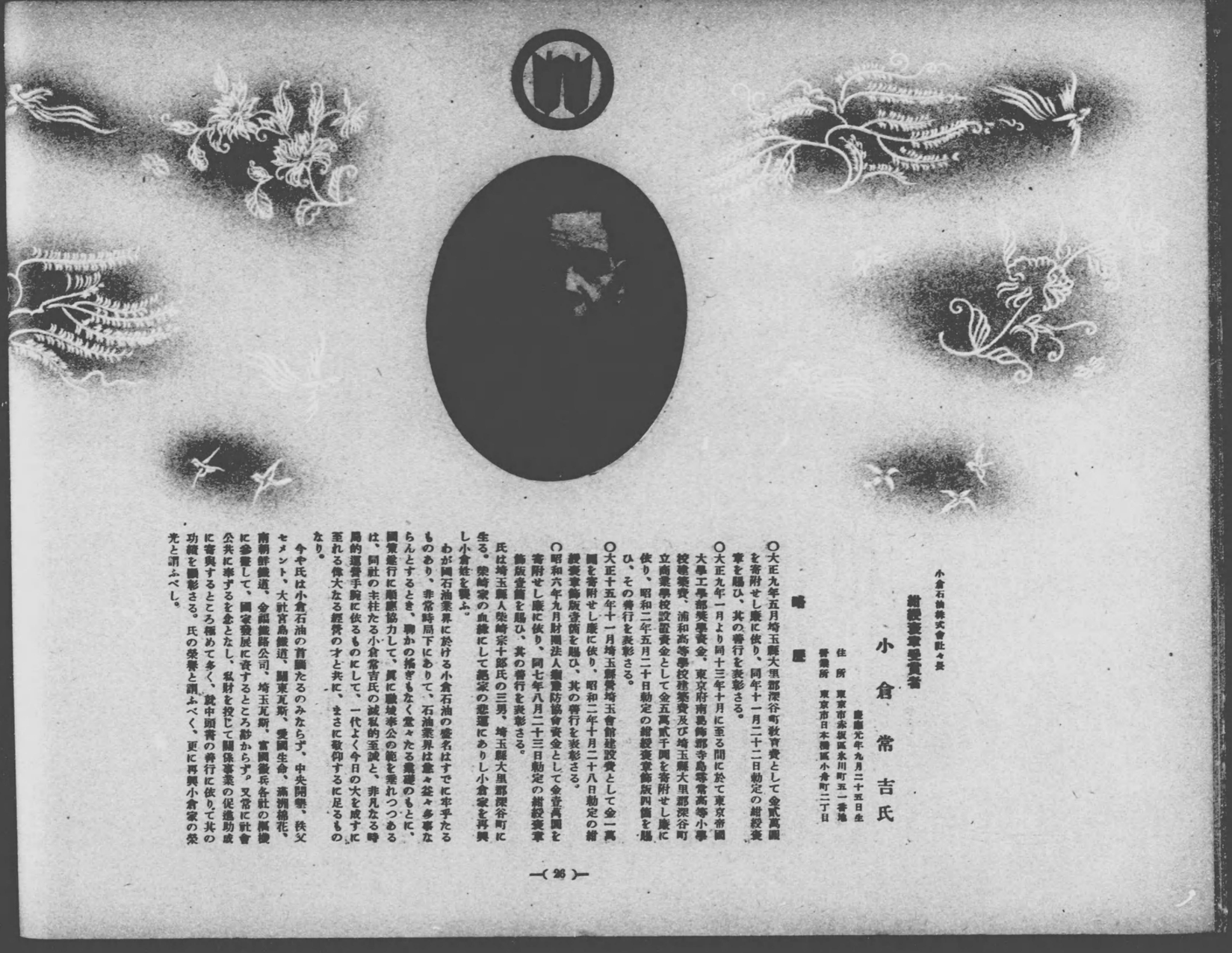
緒綬褒章受賞者

德永芳治郎氏

明治十四年十月二十八日生

住所　大阪市東淀川區三國町七三五

事業所　大阪市北區興力町二丁目一八



小倉石油株式會社々長

緒綬褒章受賞者

小倉常吉氏

慶應元年九月二十五日生

住所　東京市赤坂區氷川町五一番地

事業所　東京市日本橋區小舟町二丁目

略歴

○大正九年五月埼玉縣大里郡深谷町教育費として金貳萬圓を寄附せし廉に依り、同年十一月二十二日勅定の緒綬褒章を賜ひ、其の賞行を表彰さる。

○大正九年一月より同十三年十月に至る間に於て東京帝國大學工學部奬學資金、東京府南葛飾郡寺島等尋常高等小學校維持費、浦和高等學校維持費及び埼玉縣大里郡深谷町立商業學校設置資金として金五萬貳千圓を寄附せし廉に依り、昭和二年五月二十日勅定の緒綬褒章飾版四個を賜ひ、その賞行を表彰さる。

○大正十五年十一月埼玉縣貴埼玉會館建設費として金一萬圓を寄附せし廉に依り、昭和二年十月二十八日勅定の緒綬褒章飾版壹個を賜ひ、其の賞行を表彰さる。

○昭和六年九月財團法人國防協會資金として金壹萬圓を寄附せし廉に依り、同七年八月二十三日勅定の緒綬褒章飾版壹個を賜ひ、其の賞行を表彰さる。

氏は埼玉縣人柴崎宗十郎氏の三男、埼玉縣大里郡深谷町に生る。柴崎家の血統にして名家の悲運にありし小倉家を再興し小倉姓を襲ふ。

わが國石油業界に於ける小倉石油の盛名はすでに牢乎たるものあり、非常時局下にありて、石油業界は益々益々多事ならんとするとき、聊かの搖ぎもなく堂々たる鐵壁のもとに、國策遂行に順應協力して、眞に職域奉公の範を垂れつつあるは、同社の主柱たる小倉常吉氏の滅私的至誠と、非凡なる時局的運營手腕に依るものにして、一代よく今日の大を成すに至れる偉大なる經營の才と共に、まさに敬仰するに足るものなり。

今や氏は小倉石油の首腦たるのみならず、中央開發、秩父セメント、大社宮島鐵道、關東瓦斯、愛國生命、滿洲棉花、南朝鮮鐵道、金福鐵路公司、埼玉瓦斯、富國徵兵各社の樞機に參畫して、國家發展に資するところ尠からず。又常に社會公共に率ずるを念とし、私財を投じて關係事業の促進助成に寄與するところ極めて多く、就中頭脳の善行に依りて其の功績を顯彰さる。氏の榮譽と謂ふべく、更に再興小倉家の榮光と謂ふべし。

らんとするとき、聊かの揺ぎもなく堂々たる基礎のもとに、國策遂行に驀進協力して、眞に職域奉公の範を垂れつつある時局的運營手腕に依るものにして、一代よく今日の大を成すに至れる偉大なる經營の才と共に、まさに敬仰するに足るものなり。

今や氏は小倉石油の首腦たるのみならず、中央開發、秩父セメント、大社宮島鐵道、關東瓦斯、愛國生命、滿洲棉花、南朝鮮鐵道、金福鐵路公司、埼玉瓦斯、富國徵兵各社の機擾に參畫して、國家發展に資するところ尠からず、又常に社會公共に寄與するを念とし、私財を投じて關係事業の促進助成に寄與するところ極めて多く、就中頃者の善行に依りて其の功績を顯彰さる。氏の榮譽と謂ふべく。更に再興小倉家の榮光と謂ふべし。

日本硝子工業組合聯合會理事長、大阪府硝子工業組合理事長、大阪商工會議所議員、德永硝子株式會社々長、德永板硝子製造株式會社社長、德永硝子工業株式會社相談役、日本硝子屑統制株式會社々長

紺綬褒章受賞者

德永芳治郎氏

明治十四年十月二十八日生

住所　大阪市東淀川區三國町七三五

營業所　大阪市北區興力町二丁目一八

略歷

○昭和十年五月財團法人大阪府方面委員後援會應急救護資金として金壹萬圓を寄附せし廉に依り、同年九月二日勅定の紺綬褒章を賜ひ其の善行を表彰さる。

○昭和十五年三月日本赤十字社大阪支部事業費として金壹萬圓を寄附せし廉に依り、同年八月八日勅定の紺綬褒章飾版壹個を賜ひ其の善行を表彰さる。

德永硝子の業績は內外に高く、わが國硝子製造業界の發展に貢する處極めて多く、殖產興業の功績亦尠からざるは凡そ世人の知悉するところなり。德永家の硝子製造事業は、先代德永玉吉氏が明治十三年大阪市北區與力町の現所に、德永硝子製造所を創立したるに始まる。玉吉氏の精勵努力は事業の發展を促進せしめ、業礎漸く鞏固となり將に飛躍的進展を遂げんとするに際し、明治二十六年不幸病を得て再び起つ能はず、事業に一頓挫を來たすの危機に遭遇せしも、きみ未亡人は敢然奮起して織手よく亡夫の遺業を繼ぎ、遺兒の成長を唯一の慰安として刻苦勉勵の蘊路を克服、遂に今日の盛業の基礎を築きたり。世上稀れに見る節婦にして、昭和六年病殁するや、同十年紀元の佳節に際して大阪府知事より表彰さるるの光榮に浴したるが、また宜べなりといふべし。表彰の文に曰く「夙多の波瀾に耐へ遺業の興隆を圖ると共に四男三女の教養を全くせり、其の志行の堅實なる洵に奇特なり」と。

芳治郎氏は玉吉氏の長男、明治三十八年家督を相續、賢母きみ刀自に仕へて孝順、家業の隆盛に專念すると共に、業界の改新に投力を投じ、硝子製造に關する發明改良等枚擧に遑あらず、殊に昭和九年德永板硝子製造株式會社を創設して、本邦に於ける最初の像業たる型板硝子並に金網入板硝子の製造に成功し、當時年額二百萬圓を超ゆる狀態なりし輸入を完全に防遏したる功績は、永久に沒すべからざるものなり。日本產業協會、大阪府等より貿易、產業功勞者として表彰さること再三に及び、さらに頌書の善行によつて紺綬褒章、同飾版の光榮に浴す。

明治製革株式會社取締役會長、明治製菓取締役社長、日本產業協會副會長、愛知社理事長

藍、紺綬褒章受賞者

正七位 **相馬半治氏**

明治二年七月八日生

東京市芝區伊皿子町五二

略歷

○大正十二年十二月大震災善後會へ金壹萬圓寄附の廉に依り、昭和三年十月二十六日勅定の紺綬褒章を賜ひ其の善行を表彰さる。

○夙に明治製菓會社專務取締役社長に擧げられ工場の擴張他社の買收等鋭意事業の發展を圖り今日の盛況を見るに至らしめ公業の利益を興したる功績に依り、昭和三年十一月十一日勅定の藍綬褒章を賜ひ其の功勞を顯彰さる。

氏は舊犬山藩士田中庫氏の三男として愛知縣丹羽郡犬山町に生る。後舊南部藩士下斗米精三氏の養子となり、家督を相續、相馬姓に復す。

小學校を出づるや忽ちにして小學校初等科教員免狀を下附され、一時小學校訓導たりしが、兵役を終りて後、更に進學の志を伸べて、東京工業學校應用化學科に入る。專ら研學に精勵するうち日清の役に會ひ、明治廿七年應召陸軍書記として武勳を樹て、召集解除となるや同廿八年九月東京工業學校に復校して研學を續行、同二十九年卒業後同校助敎授に任ぜられ、同三十三年製藥及び石油業研究のため英獨米三國に留學を命ぜらる。同三十六年歸朝するに至る迄三ケ年間、或ひは學園に、或ひは工場に理論實施を研究し、米國にありてはミシガン大學大學院に入りて砂糖製造法を研究す。氏が後年製菓界に身を投ずるに至りし端緒をなすもの。卽ち歸朝後、氏は東京高等學校敎授に任ぜられ、また臺灣總督府技師を拜任する傍、學園、官界に裨益するところ尠からざりしが、明治三十九年十一月臺灣に新式製糖工場の設立を企畫し、官を辭して明治製糖株式會社を創立、專務取締役の重責に就く。當來專攻の蘊蓄を傾けて社業の發展に資し、我が國製菓業界に寄與貢獻するところ多く、この間、日本グリセリン、日本原毛、東京菓子、スマトラ興業、極東煉乳、其の他諸會社の創設に參與し、殖産興業の發展に盡瘁したる功績極めて顯著なり。

氏はまた其の關係する公共團體歩き中に愛知社理事長に推されて、總當の誘掖指導に奔走しつつあるは、氏の德望の一端を示すに足る。

鳥製糸工業所々長、新開發明發賣業

紺綬褒章受賞者

岩尾萬藏氏

明治二十一年七月十二日生

住所 大阪市住吉區平野西野町一七九

營業所 大阪市北區小松原町四四

紺綬褒章受賞者

岩尾萬藏氏

住所　大阪市住吉區平野西野町一七九
業所　大阪市北區小松原町四四

明治二十一年七月十二日生

幼少にして家庭的不遇に遭ひ、悲惨なる環境裡にありて、なほよく萎縮せざるものは尠し。しかも人生的不幸と逆境を克服し、毅然たる決意のもとに立志、以て名を成すものは又極めて稀なり。

わが岩尾萬藏氏のごときは、逆境に育ちて歪曲せず、荊棘の路を歩みて挫折するなく、刻苦精勤艱難の途を拓きて、遂に初志を貫徹し、成功の彼岸に到達して謙虚、常に過去の苦闘を顧みて自らを戒ち、小成に安んずることなくして、終生を家業の興隆に投ぜんことを期し、財を割きて社會公共事業に資し、以て皇恩に報ひ國家社會に奉ぜんことを志す。蓋し洵に立志傳中の偉材と謂ふべく、その健闘の足跡はまた以て衆庶の範となすに足れり。

氏は大分縣人岩尾平次氏の長男として、大分縣速見郡山浦村字水崎に生る。齢漸く學齢に達したる八歳の時慈母を喪ふ。十歳にして父君に伴はれ同村字勢場に移り住むこととなりしが、父君酒に耽溺して家業に勉むるなく、無情の日を送るのみならず、泥酔して家人を傷はすこと常にして、氏もまた家姉とともに相携へ、深更父を迎へんため地藏峠に至るを常とせりと謂ふ。

一家の主柱たるべき父斯くの如し。家運興るに由なし。搗てて加へて家人の疾病、連帯保證債務の辨濟など、出費多端なること相つぎ、家政を整理すること三回に及び、時に口を糊することすら困難なる日あり、しかもこの間機母を経営すること三度にのぼりしも、留まること極めて短時日にして、いづれも破綻の歎を繰返へし、生母の早逝に遭ひてよりのち、遂に母よと呼ぶ人を得ることを得ざりき。

無味乾燥にして悲惨なる生活の中にありて、氏は血涙を呑みつつ深く決するところあり、初等教育の課程いまだ全く終了せざるに先きだちて、斷然實業に身を投じて名を成さんことを期し、決然學業を廢し、人の斡旋により て長洲町に出で、石部菓子店に丁稚奉公の途を拓くこととはなれり。これ實に氏が今日の大を成す、實社會への第一歩なり。石部菓子店に在ること前後七年、主家に仕へて忠實勤勉、衆に從ひて精勤怠ることろなかりしかば、主家また氏を大いに信頼し、勤續十年に滿つれば暖簾を分ちて別家獨立せしめんことを約し、氏の同店にとゞまらんことを勧奨せしも、二十一歳徴兵檢査の結果乙種合格となるや、偶りて他家に入りて養子となるを口實として同店を去る。

蓋し氏が菓子商店の主人たるに甘んぜざるか、長洲町において盛名を馳するを得たりと雖も、經濟首都たる大大阪において今日あるを得さりしは必然にして、雄圖を抱く氏が、石部氏の厚意を多としながら、なほ且つこれを偶りて退み、報恩感謝の至誠を包んで同店を辭するの擧に出でしは、獨立不羈の氣慨に富み、自尊の精神旺盛なる氏の性格を遺憾なく發揮せしものと謂ふべく、蓋し氏が歩みし人生航路は、決して平坦にあらず、波瀾萬壘紆餘曲折を極むるものありしも、終始一貫素志の實徹に勇往邁進し、今日の榮光を獲得するに至りしは、專ら萬人

無物質に身を投ずるに至りし經緯をなすものの。夙ち前掲氏は東京高等商業學校卒業に任ぜられ、また前掲鳥羽築工業所々長に任ずる等、夙時、官界に轉進するところ勘からざりしが、明治三十九年十一月、鳥羽に電気鉄道工事の設立を企図し、官を辞して明治鉄道株式會社を創立、專務取締役の重責に就く。翌年專業の進捗を計りて社業の整理に努し、帝國鉄道國有に際會するところ多く、この間、日本グリセリン、日本製毛、東京菓子、スマトラ開墾、福寿製乳、其の他諸會社の創設に參與し、殖産興業の實現に貢献したる功績顕著なり。

氏はまた其の關係する公共團體多きを加ふるに社會事業に熱心にして、數年の間社會事業に關係しつつあるは、氏の性質の一端を示すに足る。

の以て挙ぶべき獨立不羈の精神の實踐躬行の賜たり。

石部菓子店を辭したる氏は大阪を志し、歸鄉して其の期を待つこと一週日、偶々同行を約せし友あり齟齬に家を出で、相携して夜を徹し、翌日日出港に出で便船を待つ。時に明治四十一年六月十八日夜より十九日早曉に及ぶことにして氏の終生忘れんとするも、忘することを得ざる愼出の記念日なり。同月二十一日便船を得て、海上平穩の航海に關が上にも雄志を燃やしつつ大阪に着くを得たるも、糊口の途を得るは容易の業にあらず、漸くにして職工募集の倒圖廣告に依りて岡市南區農波立葉町鐘田メリヤス分工場の職工となる。同工場に在ること三ケ月、辛うじてメリヤズ職工の資格を成すや、些かにても給料の高からんことを求めて、主家をかへて轉々すること六ケ月間に實に七八回に及べり。しかもこの間家鄉に在る老父へ月々五圓の送金を怠らざりしといふ。氏の面目躍如たるものあり。

概ねメリヤス職工は冬季に至らば閑散なるを常例となせしが。氏も亦友人とともに閑散期を利用して、機を大阪驛構內實子にもとむることとなせしが、運命まことに奇と謂ふべく、氏が大阪驛實子となりたる奇緣こそ、氏が成功の基礎たる新聞雜誌販賣業を創業するの緒をなすものなり。實子たること三ケ月にして友人利を得て歸鄉するありしが、氏は踏みとどまりて更に轉じて果物屋の實子たること十ケ月、二十三歳の春三度轉じて大阪驛構內新聞實子となる。當時氏は一泊十錢の宿泊料を支拂ひ、一日二錢の燒辛を求めこれを三回に分割攝取するの節約を敢行し、一日の給費僅か十二錢を以て足れりとなすの狀態にして、零細と雖も貯貯の額を增し、他日を期するを唯一の愉樂とせり。

ついで阪神急行電鐵の前身たる笑面電車の乘込實子に轉じ約二ケ年を經て、同電鐵構內新聞販賣の權利を獲得するに至れり。時に氏二十五歳の時にして、爾來五ケ年文字通り單身奴くこの專賣權利を活用して富岡し一日も休業することなかりしと謂ふ。勤儉力行氏の如きは實に稀れなりと謂ふべきなり。

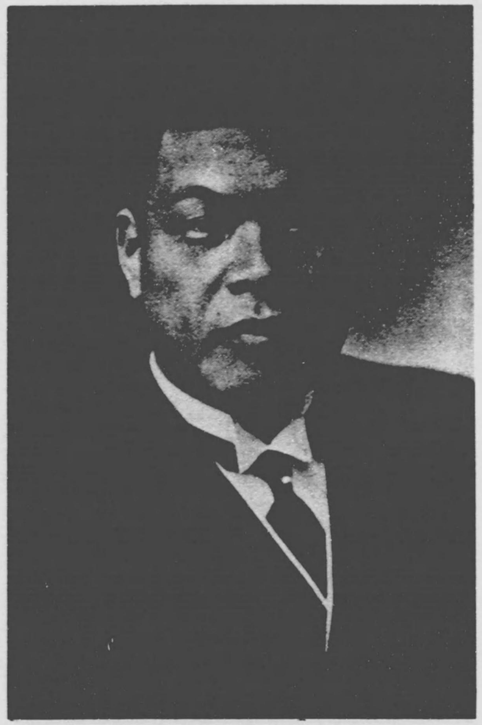
上阪後七ケ年にして氏は血汗の結晶ともいふべき三千圓の貯蓄を得たり。漸くにして資金の一端を得るに至るや、二十七歳妻女を迎へて新家庭を成すと共に、家鄉より老父を迎へて老妻を忘らず、益に意と氏の社會的活躍の基礎は確立せり。氏の幼時における苦闘の賜なりし父君も、孝心厚き氏の新家庭にありて、餘生を樂しむを得るに至りしが、上阪後僅か十ケ月にして長逝す。當時における氏の悲嘆窺ふに足るべし。斯くて氏の家業たる新聞販賣業は、交通機關の發達と交通量の增大するに伴ひ、漸次異數の伸展を遂げ、業容また嶄みに擴大し、遂に加ふるに雜誌の販賣を以てするに至り、俟ら財と成すや三十八歳の頃、預金五萬圓を投じて資金の一部に加へ、大規模なる貸家業を營むに至る。今日氏の所有する家屋は數百戸を數へ、その數地坪數優に二千餘坪を超ゆるの盛況を見るに至る。しかも氏は今日の地位にありてなほ過去における健闘の我次とも謂ふべき印伴纏を捨てず、常にこれを纏ひて阪急梅田驛構內に至りて多數從業員を督勵して怠ることろなし。その精勤こそ方に嘆賞たるものあり、また以て見る者をして襟を正さしむるに足れり。近時繁忙なる業務の傍ら、旭鐵鐵工業所を創設して社長たり、その職域を通じて國家に奉ぜんとする熱意極めて旺んなるものあり。

昭和十二年二月鄉里山浦等當高峰小學校建築費並に同校基本金として金壹萬圓を寄附せし歷に依り、同十二年八月三日勅定の褒狀を賜ふの光榮に浴す。鄉黨また氏の篤行を景仰感謝するため、特に頌德の碑を建設して追慕の費となし、後進發奮の資料となす。

岩尾萬藏氏

開取資業は、交通機關の發達と交通量の增大するに伴ひ、漸次異數の伸展を遂げ、業容また頓みに擴大し、遂に加ふるに雜誌の販賣を以てするに至り、傍ら財を成すや三十八歲の頃、預金五萬圓を投じて資金の一部に加へ、大規模なる貸家業を營むに至る。今日氏の所有する家屋は數百戶を數へ、その數地坪數優に二千餘坪を超ゆるの盛況を見るに至る。しかも氏は今日の地位にありてなほ過去における健闘の後衣とも謂ふべき印伴纏を捨てず、常にこれを纏ひて阪急梅田驛構內に至りて多數從業員を督勵して怠ることところなし。その雄姿こそ方に颯爽たるものあり、また以て見る者をして襟を正さしむるに足れり。近時繁忙なる業務の傍ら、旭製藥工業所を創設して社長たり、その職域を通じて國家に奉ぜんとする熱意極めて旺んなるものあり。

昭和十二年二月鄕里山浦尋常高等小學校建築費並に同校基本金として金壹萬圓を寄附せし廉に依り、同十二年八月三日勅定の紺綬褒章を賜ふの光榮に浴す。鄕黨また氏の篤行を景仰感謝するため、特に頌德の碑を建設して追慕の資となし、後進發奮の資料となす。



葛和善雄氏

株式會社ヤマト商會專務取締役

紺綬褒章受賞者

葛和善雄氏

明治三十年十月三日生

住所　大連市入船町四番地
本店　大連市入船町四番地
奉天市千代田通二十九番地
支店　新京中央通四十番地
哈爾賓埠頭區新政街七十六番地

大陸各地に於けるヤマト商會の盛名はすでに久し。本據を大連市に置き、支店を奉天、新京、哈爾濱に鼎坐せしめ、整備せる機構のもとに自由闊達の氣運を仲張し、自動車及び同部分品並に機械工具類を提供して、大陸發展途上に重大使命を遂行し、わが大和民族の眞價を發揚せるもの、實にわが大和商會なりとす。

同商會が整備の如く現はれ、實に驚異的なる進展を遂げたるは、時代の進運と大陸政策の積極的具體化に依るは勿論なりと雖も、また同社の主柱たる專務取締役葛和善雄氏の、多年の經驗を基礎とする健實なる經營と、識見にして剛毅しかも溫情に富む性格の人格的度量が齎らしたる結果に外ならず。葛和氏いまだ齡壯にして四十餘、しかも今日の基礎を確立して、更に新期的飛躍を試みんとするあり、氏の如きは洵に立志傳中の傑物たるのみならず、大陸を志す者にとりて好個の龜鑑たり、また模範の士たるを失はず。

氏は奈良縣人葛和竹松氏の二男、祖父新平氏、分家獨立して一家を創つ。氏は夙に大陸に名を成さんことを期して、大正八年南滿洲鐵道株式會社自動車部に入り爾かに雌伏の機を窺ふ。同十二年同社を退き大連市に於て獨立自營のタクシーを設立自動車貸切業を創業す。滿鐵に在ること四年に滿たずして、早くも獨立の事業を創業したる氏が、凡庸の士にあらざることは、固より金選度に仲間して息むところを知らざる衆望の擴大と進展により立證するを得べし。

即ち昭和四年八月大連タクシーを合資會社に組織を變更強化し、同年九月合資會社大連モーターセールスを設立、無限責任社員に就任。更に同六年四月自動車貸切業、自動車及び同附屬品の販賣を營業種目となす大連自動車株式會社を設立して專務取締役たり、續えて翌七年四月合資會社滿洲モータースを新たに設立代表社員となり、自動車及び附屬品販賣の擴張に專念して多大の業績を擧ぐるや、同八年合資會社を株式組織に改め、自ら專務取締役に就任す。斯くて業容益々擴大を成すや關係各社の役員を歷任し、同九年七月株式會社ヤマト商會を創設して專務取締役に就任、爾後無盡の商才を發揮するに至る。開通につゞく鐵道途に揚ぎたき業績を確保し為る氏は、夙に知く大連進出の第一歩を印したる思ひ出の地大連市に本據を構へ、重要各地に支店を開設して、大陸發展の商勢に順應と爲しつつ、なほも新たなる商戰々野に於ける奮戰を期しつつあり。

氏はこの間滿洲自動車部分品指定販賣店組合理事、同副組合長を歷任して業界の發展に寄したるところ夥からず、大阪に本社を有する東亞商工株式會社の取締役として東亞發展への一翼を擔當し、日滿支商工界の發達に貢獻せんことを期しつつあり。

氏はまた社會公共に奉ずるの念厚く、奇特の行爲により顯彰されたること一再にとどまらず、大正十五年七月日本赤十字社滿洲委員會業資金を寄附したるに依り本下關東長官より賞狀を授與されたるを最初として、昭和七年五月奈良縣知事より教育事業に貢獻したる點に依り賞狀を贈られ、同年十月小川大連市長より市政の發達に寄與したる功績により感謝狀を贈呈され、同十二年十月日本赤十字社總裁宮より有功章を授與、同十五年一月關東神宮奉賛會事業發達に依り感謝狀を贈られしが、昭和十四年四月鄉里奈良縣高城郡鏡村立農業青年學校及び同附屬圖書館新築費として金壹萬參千圓を寄附せし點に依り、同十五年四月六日勅定の紺綬褒章を賜ひ、其の善行を表彰せらるるの光榮に浴す。

氏が農村青年學校設立の計畫あるを知るや率先して私財を投じたるは、社會公益に奉ずるの至誠と、故鄉を愛慕する至情の發露たるは論を俟たざるも、また身大陸に在るを顧みて、鄉黨後進の子弟をして大陸進出の雄圖を抱かしめんとする積極的意氣に依るものと謂ふべく、果斷にして宏大なる氏の雅圖は實に慎ひするものなり。

氏千代夫人との間に六男一女あり、長男善治君早稻田大學に學び、二男善輝君大連中學にあり、後略、嗣男、敎章、敎章の子女また孫にして健在にして、子孫者たる氏の一家の圓滿は實に和氣藹々たるものあり。

昭和十五年六月三遊圓東州長官より多年の子女を良く健全に養育し國力の仲張に寄與したるところ夥からざる點に依り、表彰狀を授與さる。また一家一門の光榮と謂ふべし。

鳥居久吉氏

貢獻せんことを期しつゝあり。

氏はまた社會公共に奉ずるの念厚く、奇特の行爲により勳彰されたること一再にとどまらず、大正十五年七月日本赤十字社滿洲委員部事業資金を寄附したるに依り木下關東長官より褒狀を授與されたるを最初として、昭和七年五月奈良縣知事より教育事業に貢獻したる廉に依り褒狀を贈られ、同年十月小川大連市長より市政の發達に寄與したる功績により感謝狀を贈與され、同十二年十月日本赤十字社總裁宮より有功章を拜受、同十五年一月關東神宮奉賛會事業費送納に依り感謝狀を贈られしが、昭和十四年四月鄕里奈良縣葛城郡磐城村立農業青年學校及び同附屬圖書館新築費として金壹萬參千圓を寄附せし廉に依り、同十五年四月六日勅定の緑綬褒章を賜ひ、其の善行を表彰せらるるの光榮に浴す。

氏が農村青年學校設立の計畫あるを知るや率先して私財を投じたるは、社會公益に奉ずるの至誠と、故鄕を愛慕する至情の發露たるは論を俟たざるも、また身大陸に在るを顧みて、鄕黨後進の子弟をして大陸進出の雄圖を第二の萬和第三の善雄が、大陸に飛躍する日もまた近かるべきを信じて疑はず。

氏千代夫人との間に六男一女あり、長男善治君早稻田大學に學び、二男善輔君大連中學にあり、澄雄、徹雄、昌子、政意、敬章の子女また概ね健在にして、子福者たる氏の一家の圓滿は實に和氣藹々たるものあり。

昭和十五年六月三浦關東州長官より多數の子女を克く健全に養育し國力の伸張に寄與したるところ尠からざる廉に依り、表彰狀を授與さる。また一家一門の光榮と謂ふべし。

元大阪府教化團體連合團體修養會々長、皇典講究所大阪分所典
事等歷任、皇道興揚會大阪支部顧問、大日本弘道會大阪支部理事、
大日本國防婦人會國本部參與、神道報先教會顧問、大阪府産
業方面委員、地鎮祭物日用品賣捌業

紺綬褒章受賞者

故 鳥居久吉氏

大阪市東區南久寶寺町二丁目四二

名家に生れながら幼にして家運傾廻の悲運に遭ひ、轉々他家に身を託し、しかも継父骨肉早逝する中にありて、克く辛酸に耐へて刻苦精勵、遂に業を立て名を成すや、社會公共に奉仕、特に敬神の精神を昂揚し、仁慈にして仁俠に富み、大阪商人たるよりは、寧ろ昭和の天野屋利兵衛として、全國的に著名なりし、わが鳥居久吉氏の偉しき生涯は、洵に惟神の道を歩みて皇戰の實を示せる典型好個の亀鑑たり。

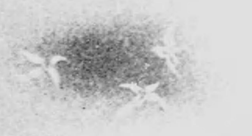
鳥居家の祖は遠く熊野權現の臣員見大臣重高の子孫にして熊野三山の別當たりし雜賀法眼重氏、熊野山の一の鳥居を建立したるに依り、世人自ら鳥居の姓を冠するに至る。重氏の孫忠俊を經てその孫忠勝三河矢作の庄に移り八世の孫皇吉に至る。其子元忠德川に仕へて武勳あり、元忠の血族備後國深津郡野々浪に住し鳥居左近義忠に至る。義忠に二子あり次男義衛寺地継を名乗りて廣島藩食祿甲山町に居を定む。これ實にわが鳥居久吉氏の大祖たり。義衛より六代を經て義矩に至りて鳥居姓に復す。義衛より十四代にして榮助義重に至る。二子あり次男千三郎家督を相續し二代榮助義忠を名乗る。即ち久吉氏の父君なり。

榮助氏具に義俠に富み徳望厚く、庄屋職を勤めしが、醸造業に失敗を重ね、しかも久吉氏實母は氏の生後間もなく鳥居家を去るのやむなきに至りしかば、氏は生後僅か一ケ月餘にして里子となれり。六歳にして實家に帰り甲山町本郷小學校に通學せしが、鳥居家の生計いよいよ困窮を加へ、挽てて加へて明治十五年九月氏九歳の時父榮助氏全逝す。一家の打撃これより大なるはなし。義母に仕へて孝順、十五歳を迎へたる氏は、健氣にも家計を助くるため小間物行商を創業す。衣笠金四圓なりしといふ。氏の幼にしてすでに凡庸ならざりしを觀ふに足るべし。のち家計の經營を輕減せんには、他家に奉公の途を拓きロを糊するに如くはなしと決意し、烏進に出で友諏物問屋林谷和助商店に入る。當時商家の習慣として半年出代りなるものあり、氏もやむなく林谷家を去つて同町雜谷商店、森田商店、三好商店を轉々して二ケ年に四野の店に仕へ、筆舌に盡し難き辛酸を嘗め人生修練の第一期に吉岡の精神を勝みしが、三好商店主淸商を營む傍ら和船問屋を兼ね大阪との往來當に繁く、氏もまた商業政策なる大阪の事情を耳にして、業を創て名を成さんには大阪を歸嘉となすに如かずとなし、斷かに期するところあり、大阪行きの早からんことを神佛に祈願して只管時機の到來を待望せり。氏十七歳にしていよいよ熱望の大阪入りを成就し、直ぐ高麗橋西詰阪岡屋小泰商店の丁稚となる。同家になお在る事一年に滿たずして實兄死去の悲報にあひ、慈母のうちにも尚維正しき鳥居家十七代の戸主となり、自ら實家を繼ふこととなりしも、鳥居家再興の熱意に燃ゆる氏の眷屬は更に目覺しきものあり。小泰家にあること十三ケ年、明治三十年氏二十九歳の新年を迎ふるや、主家より獨立別家の恩賞あり。一ケ年のお禮奉公を經て、明治三十四年三月一日堂々獨立開店、足袋製造問屋ならびに綿物商を創業せり。號して羽柴堂となし、製品に疑するに羽柴久吉足袋の名を以てせり。自らの名久吉に因みて、日本一を目指す心意氣を示したるものたりしが、愚人にその人を得ざりし爲め業績思はしからず、遂に轉業するのやむなきに至る。氏は決然小泰家見別家たりし浮田高太氏の意見を求め、同氏の慫慂と激勵と仁慈により、明治三十七年六月獨立重來の意氣を以て雜穀荳物卸商を開業す。鳥居家再興の偉業を達成するに至る第一歩たり。開來氏の非凡の精勵努力によりて家運は獨々盛運の一途を辿り、世界第一次大戰直後における大不況時代にありても、微動の搖ぎなく、鳥居商店今日の盛業を致せり。昭和十五年十二月十二日歿す。

氏は幼より敬神崇祖の念厚く、長じて愈先祖々靈の祀へを受くるに至りて、更に敬神家たるの面目躍如たるものあり、一堂鳥靈祠靈、敬神崇祖、社會教化のため金錢を傾注し、不撓の努力を投じて惜しまざりしのみならず、自ら皇國精神修養會を起して、その感旨の徹底を期し、全國著名神社佛閣一百箇所へ、皇國精神資金獻納の美擧を完成せしほか、愛國の熱情を籠つて國威の宣揚に邁進し、國防の充實に專念してこれが達成に寄與するなど、その美擧枚擧に遑あらず。

昭和十四年一月廣島縣立福鄙甲山小學校講堂新築資金金壹萬參千圓を寄附せし厚に依り、同年五月八日勅定の紺綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

加藤平次郎



あひ、悲喪のうちにも由緒正しき鳥居家十七代の戸主となり、自ら重責を婚ふことゝなりしも、鳥居家再興の熱意に燃ゆる氏の發奮は更に日覚しきものありき。小森家にあること十三ケ年、明治三十年氏二十九歳の新年を迎ふるや、主家より獨立別家の恩賞あり、一ケ年のお禮奉公を經て、明治三十四年三月一日堂々獨立開店、足袋製造販賣ならびに絲物商を創業せり。號して羽柴堂となし、製品に冠するに羽柴久吉足袋の名を以てせり。自らの名久吉に因みて、日本一を目指す心意氣を示したるものたりしが、職人にその人を得ざりしため業績思はしからず、遂に轉業するのやむなきに至る。氏は決然小森家兄別家たりし浮田高太氏の意見を求め、同氏の慰撫と激勵と仁援により、明治三十七年六月擔士重來の意氣を以て漆器荒物卸商を開業す。鳥居家再興の偉業を達成するに至る第一歩たり。顧來氏の非凡の精勵努力によりて家運は彌々隆昌の一途を辿り、世界第一次大戰直後における大不況時代にありても、微動の搖ぎなく、鳥居商店今日の繁榮を致せり。昭和十五年十二月十二日歿す

氏は幼より敬神崇祖の念厚く、長じて德光教々祖の教へを受くるに至りて、更に敬神家たるの面目躍如たるものあり、一意皇國擁護、敬神崇祖、社會教化のため全精魂を傾注し、不撓の努力を投じて惜しまざりしのみならず、自ら皇國擁護修養會を起して、その趣旨の徹底を期し、全國著名神社佛閣一百箇所へ、皇國擁護資金献納の美擧を完成せしほか、愛國の熱情を鼓つて國威の宣揚に邁進し、國防の充實に專念してこれが達成に寄與する など、その美擧枚擧に遑あらず。

昭和十四年一月廣島縣世羅郡甲山小學校講堂新築費金壹萬參千圓を寄附せし厥に依り、同年五月八日勅定の紺綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

社團法人日本絹業協會、東部日本南米輸出組合、日本南米輸出組合聯合會、日本布帛製品工業組合、横濱輸出絹布布帛製品工業組合 各理事長、日本南米輸入組合、日本輸出布帛製品協會各副理事長、加藤商事株式會社取締役社長、日本輸出布帛製品株式會社取締役會長、日本ハマライト株式會社、朝鮮共榮株式會社各取締役、加藤商會々長、貿易業

勲三等瑞寶章受賞者

加藤平次郎氏

明治六年十二月二十五日生

住所　横濱市中區本牧町四丁目一〇八三

番地所　横濱市中區南仲通一丁目三

略歴

氏は石川縣金澤市に生る。明治三十五年加藤マサ女と婚姻ののち加藤姓を襲ふ。原家の祖は加賀國河北郡河北潟の沿岸大場村の豪家小右衛門の弟にして、今を去る百八十年前別家創立、金澤市春日町の地に一家を構へ原家長左衛門と稱し、代々長左衛門を襲名。未發商を業となす。加藤氏は四代目長左衛門氏の二男たり。

わが加藤氏は中南米貿易の開祖にして、明治三十二年墨西哥と直接取引を開始し、同三十五年店員を同國に派し交易を更に積極化し、同三十七年令弟故原利吉氏を增派し支店を開設、同四十三年墨西哥共和國獨立百年記念祝典に際し、墨國日本品博覽會協會を設立、同協會委員長として盡瘁、日本商品の紹介に與つて力あり、ついで貿易を管利、亞爾然丁、パナマ、コロンビア、玖馬等中南米各國に伸べ、大正五年管利日本品博覽會協會を設立、日本商品國進の基礎を確立、ついで同志と共に太平洋貿易株式會社を設立、管利、ペルー、玖馬に支店を開設し、第一次歐洲大戰を契機として大飛躍をなし日本商品の聲價を高からしめたり。同十一年南米貿易視察團を組織して渡航、歸來南米貿易、殖民に關する卓見を政府當路に開陳して稱賛するところ鈔からず。昭和六年亞爾然丁に人絹織物工場を、墨西哥に鉛筆、貝釦工場を設立し、日本機械並に人絹糸の西半球市場開拓に先驅をつけ、實績するところ多く、この間中南米各國を視察すること一再にとどまらず。昭和八年第五次視察より歸るや、輸出組合結成の必要を強調し、遂に翌九年南米輸出組合を創立して自ら理事長たるほか、關書の諸公職に在りてわが貿易業界を指導しつつある逸材たり。其の貿易振興に資したる功績顯著なるをもつて、昭和十五年十一月十日勅定の紺綬褒章を賜ひ、功勞を顯彰さるるの光榮に浴す。

栗林德一

室蘭商工會議所會頭、北海道多額納稅者、株式會社栗林商會、栗林商船株式會社各社長

續續表彰受賞者

栗林德一氏

明治二十九年三月九日生
北海道室蘭市常盤町一三五

略歷

氏は新潟縣人にして政友本黨所屬衆議院議員として令名ありし栗林五朔氏の長男、新潟縣南蒲原郡長崎村に生る。

父君事業に失敗して北海道に渡るや、氏も伴はれて渡道し小樽高等商業學校に學ぶ。大正七年優秀なる成績を以て同校を卒業するや、直ちに父君の事業を繼承してこれを主宰し、株式會社栗林商會、栗林商船株式會社の各專務取締役の重任に就く。氏漸く二十四、五歳の頃なりしが、しかも克く運營の任にあたつて過ちなく、大いに家業を隆昌ならしめしが、以て氏の優れにみるの逸材たりしを覺ふに足るべし。

父君五朔氏は渡道の當初先づ倉庫業を創業し、漸次業績の確立するに及びて、農牧ならびに海運界に進出し、遂に栗林家今日あるの基礎を築きしが、賢息德一氏學業を卒へて第一線に立つに及ぶや、業務の一切を委ねて、自らは政界に飛躍して國家に貢獻するところ靜からざりき。氏が意を安んじて政界に活躍することを得たるは、德一氏の如き好嗣ありたるによるものにして、父君を政界に送りたる氏は、專企事業の進展に精勵し、栗林商會の盛名をして、全北海道に高からしめたるのみならず、業實を伸べて、登別製鐵所、室蘭土地埋立株式會社、芝浦運輸株式會社、其の他多數會社の樞機に參畫して、各種事業の發展に資し、栗林家をして榮譽ある多額納稅者の列に加へしむ。

今や氏は働いまだ五十歳に達せずして、早くも推されて室蘭商工會議所會頭たり。衆望のもと非常時局下に處する氏の活躍たるや方に刮目して見るべきものありと謂ふべし。

昭和二年十一月室蘭市社會事業費として金壹萬圓を寄附せし廉に依り、同三年七月二十六日勅定の緒綬褒章を賜ふの光榮に浴せしが、氏の母堂カズ刀自また夙に社會公共に奉ずるの念厚く、昭和十年十一月北海道帝國大學病院へ拘束一棟を寄附せし廉に依り、同十二年勅定の緒綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

大阪三品綿糸綿花並ニ人絹部取引員、大阪府多額納稅者

緒綬褒章受賞者

貴志米吉氏

大阪三品綿糸綿花並ニ人絹部取引員、大阪府
多額納税者

紺綬褒章受賞者

貴志米吉氏

明治十年三月一日生

本籍　大阪市天王寺區松ヶ鼻町六六

住所　同　前

略歴

關西實業界の巨擘として嘖々たる令名を馳せ、大阪三品取引界に老練なる才腕を振ひ、絶大なる信用聲望を一身に兼ね業界一方の重要人物として隆々たる令名を謳はれつゝある貴志米吉氏は、大阪府堺市、武藤野友吉氏の四男として生れ、明治二十三年七月小學校卒業後商業見習として同市播屋町富村三郎吉氏の綿花店に入り、同二十八年同店の合名も社と改稱後も引續き勤續す。

明治三十三年九月、父友吉氏の里方貴志氏の絶家せるを再興して同姓を名乘り、同三十四年合名會社富村商店の解散せらるゝや、大阪市東區北濱五丁目富永久吉氏の綿花商店に入り、輸入綿花の賣買主任を擔當して精勵し、遂に同三十九年六月農商務省の認可を得て大阪三品取引所取引員となり、爾來益々精勵努力業績大いに擧がり、大正四年度以降、綿花、綿糸、賣買高多額の故を以て同取引所より賞狀を受くること實に十九回に及べり。

其の間三品取引所市場整理委員、同所組合委員及び副委員長、同所商議員、同總代等に擧げられて業界に盡瘁し、又一面日本赤十字社南區協賛委員を嘱託せられ、現に大阪市敎化委員たり。

夙に公共の念に厚く、日本赤十字社大阪支部事業奬賛のため、私財を寄附して、儀有功章特別社員、日本海員掖濟會大阪支部事業に私財を寄附して特別社員に各列せらる。昭和五年十二月堺市敎育資金として金壹萬圓を寄附せし廉により、同六年四月勅定の紺綬褒章を下賜せらるの光榮に浴せり。

納稅者の列に加へしむ。

今や氏は齢いまだ五十歳に達せずして、早くも推されて室關商工會議所會頭たり。衆望のもと非常時局下に處する氏の活躍たるや方に刮目して見るべきものありと謂ふべし。

昭和二年十一月堂關市社會事業費として金壹萬圓を寄附せし廉に依り、同三年七月二十六日勅定の紺綬褒章を賜ふの光榮に浴せしが、氏の母堂カズ刀自また夙に社會公共に奉ずるの念厚く、昭和十年十一月北海道帝國大學病院へ病棟一棟を寄附せし廉に依り、同十二年勅定の紺綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

株式會社田中航空機製作所取締役社長、東京航空機器製造工業組合理事

緑綬褒章受賞者

田中孝氏

明治二十一年十月十六日生
東京市芝區白金志田町一二

略歴

航空界の發展に伴ひ、航空機の製造は激増の傾向にあり、更に高度國防國家の建設に、重大なる一環をなすものは、また航空機の製造業界と謂はざるべからず。

航空機器の生産能率は、其の任にあたる製作技術者の巧拙と、資材供給の幾何に多大の關係あり、航空機器の製造もまた航空機製作能率に重大關係を及ぼす重要時局産業たるを失はず。

幾近群小の航空機器製造會社簇生する中にありて、堂々たる機構と、優秀適確なる精巧機器を製出するものとして、頗みに嘉名を馳せたるものに株式會社田中航空機器製作所あり。同社は實にわが田中孝氏の主宰するところにして、同製作所が今日の隆運を導するに至るには、氏の刻苦精勵、不屈不撓の努力實に因るところ極めて多し。

氏は千葉縣人田中銅吉氏の長男、千葉縣東隅郡中根村大字押日區に生る。夙に機工業を志し、斯業を研究研鑽すると共に身を挺してこれを習得し、のち財を成すに及んで渡邊發動機製作所に資を投じて取締役たり。これ實に氏が航空機器製作に從事する端緒をなすものなり。大正五年渡邊發動機製作所取締役を辭し、獨立經營の田中鐵工所を創設、孜々營々これが經營に專念せしが、同所製作品漸次聲價を高め、需要愈愈激増するや、業容を逐次擴大して機構の整備強化に勉め、遂に昭和十四年五月株式會社田中航空機器製作所を設立、自ら取締役社長たり。

今や氏は非常時局下に於ける産業人として、重大産業部門を擔當し、戰場率公に萬遺漏なきを期すると共に、東京航空機器製造工業組合理事たるほか、東京司法保護委員、同方面委員、同芝區志田町々會長、同御田小學校保護者會會長、同高輪産業報國聯盟會會長、同高輪交通事故防止會理事、同三光青年學校後援會副會長として銃後國民の責務遂行に赤誠を披瀝しつつあり。また氏は社會公共の企畫く、私財を投じたる善行により千葉縣、東京兩府縣知事より受賞せしこと數度に及ぶも、就中昭和十四年一月日本赤十字社東京支部事業費として金壹萬圓を寄附せし廉に依り、同四月十三日勅定の緑綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

株式會社高島屋社長、高島屋飯田合名會社代表社員

賞、綬、緑綬褒章受賞者

正六位勳六等 **飯田新七氏**

安政六年十月二十八日生
生地 京都市
自部 京都市下京區本町二十一丁目

略歴

株式會社高島屋社長、高島屋飯田合名會社代表社員

黄、綬、紺綬褒章受賞者

正六位勲六等　**飯田新七氏**

生地　京都市
自邸　京都市下京區本町二十二丁目

安政六年十月二十八日生

略歴

關西に於ける代表的呉服店として、又東京、大阪の兩都に宏壯なる大デパートメント・ストーアを有することに於て、名實全國に著聞せる高島屋を主宰し、業界の巨擘を以て目せらるゝもの、之を飯田新七氏と爲す。

飯田家は文政十一年、初代新七江州高島より出で、京都烏丸松原米穀商飯田儀兵衛の女婿となり、翌年分家獨立して呉服商を開業したるに端を發し、屋號を出生地に因みて高島屋と稱し、爾來四代を算す。當代は二代目新七氏の二男にして明治二十一年實兄三代目新七氏退隱後家督を相續し、前名鎌三郎を改め襲名す。其の家業を繼ぐや、時代の趨勢に順應して、逐年事業の擴張を圖り、百貨店を東京、大阪の二大都市に開設し、京都本店と共に三都相呼應して、遂に今日の盛大を致し、本邦の代表的百貨店たるに至る。此の間巴里萬國博覽會に際し、歐米各國及び支那を巡遊す。義に皇居御造營の際、繪物調進の御用命を賜はり、爾來引續き我皇室を初め、滿洲國皇帝其他の御用を拂し、榮譽無上の榮譽を擔へり。明治十二年以來各地博覽會及び共進會等に於て、賞を受くること實に五百回、海外よりの受賞亦實に十回に及ぶ。同二十一年防疫事業を贊助せる功に依り、勅定の黄綬褒章を、同二十六年實業に精勵、衆民の模範たるべきものとして、同綠綬褒章を下賜せられ、同三十二年勅六等に叙し、瑞寶章を賜ふ。次で大正十年五月恩賜財團濟生會へ金三萬圓を寄附し紺綬褒章を、昭和三年七月京都市大禮奉祝事業費金二萬圓を、同五年十一月京都市成徳等小學校建築費金二萬圓を夫々寄附し、同施設を賜ふ。又西暦千九百卅三年獨逸國政府より赤十字二等名譽章を贈られ、更に昭和八年十一月教育上の功勞に依り帝國教育會より表彰せられたる外、各種公共事業に貢獻し、其功を稱揚せらるゝこと枚擧に遑あらず。義に京都商工會議所會頭、京都織物株式會社會長其他多數會社の重役たりしことあり。現時本派本願寺勅定方、同財團理事、同評議員、八阪神社其他諸社の總代、日本赤十字社京都支部參議員、大日本武徳會評議員、其他各種公共事業に與はり、多大の寄與を爲しつゝあり。

益擴張するや、業容を逐次擴大して機構の整備強化に勉め、遂に昭和十四年五月株式會社田中航空機器製作所を設立、自ら取締役社長たり。

今や氏は非常時局下に於ける産業人として、重大産業部門を擔當し、職域奉公に萬遺漏なきを期すると共に、東京航空機器製造工業組合理事たるほか、東京司法保護委員、同方面委員、同芝區志田町々會長、同御田小學校保護者會會長、同高輪産業報國聯盟會幹長、同高輪交通事故防止會理事、同三光青年學校後援會副會長として銃後國民の實務遂行に赤誠を披瀝しつつあり。また氏は社會公共の企畫く、私財を投じたる善行により千葉、東京兩府縣知事より受賞せしこと數度に及ぶも、就中昭和十四年一月日本赤十字社東京支部事業費として金壹萬圓を寄附せし廉に依り、同四月十三日勅定の紺綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

株式會社松屋呉服店社長

緑綬褒章受賞者

古屋徳兵衛氏

明治十一年三月十九日生
東京市銀町區一番町二五ノ七

略歴

氏は神奈川縣の人古屋徳兵衛氏の二男、横濱市石川町四丁目に生る。幼名藤八、中學校を經て慶應義塾理財科に學び、卒業後家業たる松屋呉服店の經營に從ひ、父君歿するや家督を相續して前名藤八を廢して徳兵衛を襲名す。父君徳兵衛氏は山梨縣北巨摩郡鳳凰村の出身、明治二年二十一歳にして横濱に出で呉服太物商を營み鳩屋と號す。店運愈々開け業務確立するや帝都に進出、神田今川橋松屋呉服店を買收、薄利多賣主義を奉じて大衆を迎ふるの方策に出で、同四十年同所に宏大なる建築を完成し、三越、白木屋、松坂屋と比肩して帝都四大呉服店たるの地歩を確立せり。父君の斯くの如き異數の發達の中にありて、商道の蘊奥を極むるに餘念なかりし氏は、父業を經承して父名を恥しめず、着々内容の充實に奔命の努力を拂ひ、令弟惣八氏と圖り組織を株式組織となし、自ら社長に、令弟惣八氏を專務取締役に任じ、家業の興隆に兄弟協力の結晶をつゞけしが、關東大震火災の災害の試練を經て輝しき進展を遂げ、大正十三年帝都の復興いまだ完全ならざるに先きだつて、銀座街頭に進出、その中樞の地に八階樓の大建築を完成し、松葉鶴の商標も輝しき赤旗を翻へし、帝都の人士をして唖然たらしめたり。名聲嘖々として其の隆名日に加はるや、今川橋の舊館はこれを食料品專門店となし、更に新宿街頭への躍進を達成せり。

氏の短期間における驚異的進出はわが國百貨店業界における異例となすに足るもの。氏の非凡の才略と携取に富む果斷剛毅の責任が當らせし結果なるは論を俟たざれども、また氏が終始一貫父君の家訓たる「一、今日一日三つの恩を忘れず家業を大切に勵むこと。一、今日一日の存命を樂しみ決して其の不足を思ふまじきこと。一、今日一日決して嘘を云ふまじきこと。一、今日一日決して腹を立てまじきこと。一、今日一日人の惡口を云はず己の善きを云ふまじきこと」を實踐躬行したる賜といふべし。昭和二年二月父祖の故里鳳來村小學校建築費として金壹萬圓を寄附、同三年十月十二日勅定の褒賞を賜ふの光榮に浴す。當主徳兵衛氏は東京府の人、古屋惣八氏の二男、御ち氏の令嬢にして、昭和十一年妻子となり、家督を相續、前名祐次郎を廢して徳兵衛を襲名。もと司法官たりしが昭和十三年辭して松屋呉服店社長となる。

紡績業

緑綬褒章受賞者

伊藤清次郎氏

明治十六年十二月十九日生
大阪市北區富田町一番地

略歴

氏は大阪の人伊藤春次郎氏の二男、大阪市北區に生る。
明治廿九年三月大阪市北野尋常高等小學校を卒業するや、

藤紗綿布洋服卸賣商

緒綬褒章受賞者

伊藤清次郎氏

明治十六年十二月十九日生
大阪市北區富田町一番地

略歴

氏は大阪の人伊藤春次郎氏の二男、大阪市北區に生る。明治廿九年三月大阪市北野尋常高等小學校を卒業するや、直ちに父業を扶けて精勵怠りなく、孝養を忘れず孝子の譽れ高し。四隣氏を推して子弟の範となす。

父君春次郎氏は夙に藤紗綿布洋服卸商を營み、業礎漸く鞏固を加へ、家運いよいよ隆昌に赴かんとするに際し、賢息清次郎氏の助力を得て、ます〳〵業容を整備強化し、業績頓みに良好なるを得たり。

氏長ずるや、明治三十七年十二月、日露戰役に召されて出征、滿洲の野に轉戰して偉勳あり、勳八等に敍せられ、瑞寶章を賜ふ。凱旋除隊となるや、更に家業に從ひて商道の修得に勵むところを知らず、大正九年一月分家して一家を創立、父業にならひて、綿布絨ならびに同加工品の卸商を創業す。時に氏二十八歳の時にして、氏が今日の大を成すの第一歩たり。

小學の課程を終了せしのみにして、父の膝下に在りたりと雖も、幾多の辛酸艱苦に耐へて克く商道を修得し、三十歳に滿たずして一家を創立、父業に比して劣らざるの商陣を繰きたる氏の如きは、まさに大阪商人の代表として推賞に値ひするものにして、不撓精神を以て幾多の波瀾を克服し、初志を貫徹達成せし不斷の健闘は、まことに業庶の範となすに足るもの。氏が不屈の前進を持續して一歩の後退を敢てせず、業礎の確立に光輝あらしめしは、砲煙彈雨の實戰の體驗による牢乎たる精神力の賜と謂ふべきも、また氏の家業を熱愛する勤勉力行の結果に外ならずと謂ふべし。

氏は斯くの如く家業を發盛ならしめたる傍ら、大阪市北區消美第三方面委員、大阪市敎化委員、同稅務調査委員、同北區々會副議長、同西天滿衛生副組長、同富田町々會長の要職を歴任して、國家事業の遂行に、はたまた地方自治の發展に稗益せしところ尠からざるのみならず、常に意を用ひて社會公共に奉ずるの念厚く、私財を投ずるの善行多き中に、昭和六年五月日本赤十字社大阪支部病院改築費として金壹萬圓を寄附せし廉に依り、同年七月六日勅定の緒綬褒章を賜ひ、其の善行を褒彰さるるの光榮に浴す。

箱の人士をして唖然たらしめたり。名聲嘖々として其の聲名日に加はるや、今川橋の舊館はこれを食料品專門店となし、更に新宿街頭への躍進を達成せり。

氏の短期間における驚異的進出はわが國百貨店業界における異例となすに足るもの。氏の非凡の才略と機敏に富む果斷剛毅の資性が齎らせし結果なるは論を俟たざれども、また氏が終始一貫父君の家訓たる「一、今日一日三つの恩を忘れず家業を大切に勵むこと。一、今日一日の存命を樂しみ決して其の不足を思ふまじきこと。一、今日一日決して嘘を云ふまじきこと。一、今日一日決して腹を立てまじきこと。一、今日一日人の惡口を云はず己の善きを云ふまじきこと」を實踐躬行したる賜といふべし。昭和二年二月父祖の故里鳳來村小學校建築費として金壹萬圓を寄附、同三年十月十二日勅定の緒綬褒章を賜ふの光榮に浴す。當主德兵衛氏は東京府の人、古屋惣八氏の二男、卽ち氏の令甥にして、昭和十一年妻子となり、家督を相續、前名祐次郎を廢して德兵衛を襲名。もと司法官たりしが昭和十三年辭して松屋呉服店社長となる。

緒綬賞章受賞者

顏　欽賢氏

明治三十五年二月五日生
臺灣基隆市壽町二丁目一九

基隆信用組合、基隆郵船、海山礦業、和隆木材、臺灣興業信託、臺灣拓殖各株式會社取締役社長、臺灣鑛業會評議員、帝國在鄉軍人會基隆市部分分會後援會々長、臺北州國防義會評議員

略　歷

其の事業關係の廣汎なると、公職の多岐にわたる點に於いて、わが朝欽賢氏の如きは、基隆市に於けるのみならず、臺灣全島に於いて異數の例となす。從つて氏の職域を通じ、公職を擧じて國家に貢獻するところ極めて多く、德望自ら備はり、基隆市財界に重きを成すに至れるは故なきにあらざるなり。しかも氏は齡漸く不惑に達したる少壯氣鋭の士たり。其の前途や、まさに洋々たるものあり、今後の飛躍たるや蓋し更に刮目して見るべきものあるべし。

氏の事業の中樞をなすものは鑛業にして、現に臺陽鑛業株式會社、基隆郵船株式會社、海山郵船株式會社各社長、基隆炭鑛株式會社常務取締役たる外、木村業界にも飛躍し和隆木材株式會社々長、瑞芳營林株式會社代表取締役たり。更にまた拓殖、土地の開發、信託事業にも干與し臺灣興業信託株式會社、臺陽拓殖株式會社各社長、金包里開發株式會社取締役たり、臺灣電化株式會社、同化成工業株式會社取締役たる氏は新興化學工業にも手を染め、臺灣鉛鑛株式會社、臺北州自動車運營株式會社、大成火災海上保險株式會社の機關にも參與して海陸運輸事業の爲全を期し、金融界に臨んでは株式會社華南銀行監查役、基隆商工信用組合理事長たり。

しかも氏は國民精神總動員臺北州支部參與たりしほか、同國防議會、基隆市防空委員會、臺灣鑛業會、基隆市所得稅調查委員會、臺灣總督府燃料品物價格問委員會、同木材及び其の雜品物價格問委員會、軍人援護會臺北州支部、帝國在鄉軍人會基隆市聯合分會後援會等の委員、評議員、又は會長として、國家事業の達成と銃後國民の責務を總行し、臺北州會議員、臺灣自治協會臺北州支部評議員として自治の發展、內臺融和に捧身の努力を投じつつあり、其の縱橫無盡の活躍は洵に敬服に値ひするものあり。昭和十三年二月臺灣軍司令部に國防用兵器資材基金として金壹萬圓、同年三月臺北社會事業資金として金壹萬圓を獻金寄附せし廉に依り、同十四年三月四日勅定の緒綬賞章を賜ふの光榮に浴す。

緒綬賞章受賞者

井上　周氏

明治十二年四月十八日生

日本鑛業會會員、臺灣拓殖株式會社、株式會社甲子園ホテル各部顧問役社長、日本化學產業株式會社取締役會長、王子製紙株式會社、神戶土地興業株式會社、京阪電氣鐵道株式會社、株式會社大阪毎日新聞社、中國合同電氣株式會社各取締役、阪神急行電鐵株式會社、朝鮮鐵道株式會社、株式會社勝田鐵道場各監查役

井上周氏

明治十二年閏月十八日生

住所　大阪市住吉區帝塚山中二丁目三二

營業所　大阪市南區安吉橋通二(日動ビル)

日本觸媒火災保險株式會社、株式會社甲子園ホテル各取締役社長、日本化學產業株式會社取締役會長、王子製紙株式會社、神戸土地興業株式會社、京阪電氣鐵道株式會社、株式會社大阪毎日新聞社、中國合同電氣株式會社各取締役、阪神急行電鐵株式會社、朝鮮鐵道株式會社、株式會社藤田映畫製作所重役

贈、紺綬褒章受賞者

略歷

○明治四十四年十月より大正九年七月に至る慈濟生會基本令として金壹萬圓寄附の廉に依り、大正十年十月十二日勅定の紺綬褒章を賜ひ、其の善行を表彰さる。

○昭和二年大阪醫科大學基金として金壹萬圓寄附の廉に依り、同年五月二十日勅定の紺綬褒章飾版壹個を賜ひ、其の善行を表彰さる。

○昭和三年十月大阪市へ御大典記念事業費として金壹萬圓寄附の廉に依り、同五年二月十八日勅定の紺綬褒章飾版壹個を賜ひ、其の善行を表彰さる。

○昭和三年十月二十七日實業に精勵し功績顯著なるの故を以て、勅定の紺綬褒章を賜ひ、其の功勞を顯彰さる。

氏は香都財界の重鎭たりし今村清之助氏の二男、東京市日本橋區南茅町に生る。清之助氏は長野縣の出身、赤手空拳より身を起して、生糸、米相場の仲買を基礎となし、株式仲買業を以て一關名を成したる明治年間における屈指の成功者なり。周氏幼にして大阪の人井上保次郎氏の養子となる。保次郎氏は關西における有數の實業家にして井上銀行頭取たりき。また諸會社の關係に參與し、巨萬の富を成せる逸材たりき。周氏夙に正期中學校に學び、十六歳にして英國に留學、ケンブリッヂ大學理科を經て、自耳義アントワープ商科大學に入學、明治三十五年同大學卒業、當三十六年十一ケ年にわたる海外留學を終へて歸朝。二十六歳美家の女キミ子夫人と婚姻す。爾來父業を扶くる傍ら、ライスペーパーの製造を目的とせる東洋製紙株式會社を創立し、製紙業界に稗益せしところ尠からず、商業會議を伸べてその關係に參畫して、今名譽々たるものあり。關西財界の重鎭として先考　養父の名を辱しめず、家門に燒えあらしめて餘すところなし。

動車運輸株式會社、大成火災海上保險株式會社の樞機にも參與して海陸運輸事業の爲め盡瘁し、金融界に臨んでは株式會社華南銀行監查役、基隆商工信用組合理事長たり。

しかも氏は國民精神總動員臺北州支部參與たりしほか、同國防講會、基隆市防空委員會、臺灣鑛業會、基隆市所得稅調查委員會、臺灣總督府總料品物價事問委員會、同木材及び其の製品物價事問委員會、軍人援護會臺北州支部、帝國在鄉軍人會基隆市聯合分會後援會等の委員、評議員、又は會長として、國家事業の達成と銃後國民の責務を遂行し、臺北州會議員、臺灣自治協會臺北州支部評議員として自治の發展、內臺融和に捧身の努力を投じつつあり、其の縱橫無盡の活躍は洵に敬服に值ひするものあり。昭和十三年二月臺灣軍司令部に國防用兵器資材基金として金壹萬圓、同年三月臺北社會事業資金として金壹萬圓を獻金寄附せし廉に依り、同十四年三月四日勅定の紺綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

合名會社林商會店主、社會福山銀行取締役、元北ノ王鑛山株式會社常務取締役、元小樽區會議員

紺綬褒章受賞者

林　清太郎氏

明治六年十二月三日生

住所　北海道小樽市緑町五丁目
事務所　北海道小樽市色内町八丁目林ビル

略歴

氏は石川縣人林清一氏の長男、石川縣大聖寺町に生る。東京高等商業學校豫備門を終了後、明治二十三年、父君清一氏に從ひて北海道に渡り、小樽市に於いて海陸物産商を經營す。

當時日本海沿岸諸縣より北門の地北海道に渡りて開拓殖產の業に就く者多く、すでに名を成す者また尠からざりき。茲し氏も亦弱年にして總督先進に刺戟さるゝこと多かりし上に、高等商業の豫備門に學びて、開拓事業の有意義にして、しかも大いに將來性ある國家的事業たるを自覺し、寧ろ父君を說きて勇躍北海道を志したるものなるべし。

海陸物産商の經營の任にあたり父君を扶けて怠りなかりし氏は、更に雄圖もだし難く弱年僅か二十歲にして、明治二十六年同志と相圖り加納能開墾會社を設立して未開地の開發に力め、同四十三年に至りて合名會社林商會を設立して、加納體株式會社の事業一切を繼承、更に進んで河川改修、築堤の事業を起し、自ら進んで私有の農地積を提供し、率範の實を示すなど、常に先覺者的開拓者たるの至誠と熱情を披瀝して拓殖に專念す。北海道千歲郡惠庭村今日の隆盛あるは氏の努力の賜にして、同村長氏を表彰するに「茲し本村產米五萬石豐穰の榮を爲し、住民千數百戶平和鄕たる因を致せるは、氏が卒先永年巨費を投じて經營具さに苦難を嘗むところの惠澤と謂ふべし」の贊辭を以てす。氏の功績の一端を覗ふに足るべし。

氏は開拓事業に精勵渾身の努力を投ずる傍ら、また鑛業界に進出して北ノ王鑛山株式會社常務取締役、生田原金山株式會社監査役を歷任して、斯業界に稗益するところ尠からざりしが、目下北海道有珠郡壯瞥村に壯瞥鑛山を獨立經營し、非常時局下における產金界に貢獻しつつあり。

氏はまた社會公共に牽じたる善行多く、受賞の數枚擧に遑あらざるも就中昭和十三年帝國軍人後援會北海道支部へ事變費金壹萬圓寄附の廉に依り、同年八月九日勅定の紺綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

紺綬褒章受賞者

花田卯造氏

明治十八年六月七日生
東京市赤坂區新坂町八〇番地

假野商事株式會社、假野汽船株式會社各專務取締役、松浦炭鑛株式會社、興昌鑛業株式會社各代表取締役社長、東亞林業株式會社、日本鑛業鑛工業株式會社各取締役社長、日本木材工業株式會社相談役

紺綬褒章受賞者

花田卯造氏

明治十八年六月七日生
東京市麻布區新堀町八〇番地

個野商事株式會社、個野汽船株式會社各專務取締役、松浦炭鑛株式會社、個員鑛業株式會社各代表取締役社長、東亞林業株式會社、日本鐵道構工業株式會社各取締役社長、日本木材工業株式會社相談役

廣汎なる業域にあつて、國家的事業を主宰經營し、しかも公益優先の理念に基きて、其の使命の達成を誤らず、職域奉公の美績の實を示して、他の範たり得るものは尠し。ロに公益優先を說き、職域奉公を强調すると雖も、資本關係の重壓に左右されて徒らに利潤を追ひ、非國家的經營に專らなるもの又なしとせず。高度國防國家の建設途上にあるわが國にありて、關係重大産業部門を擔當するもの、擧げて赤誠を披瀝し、國家に奉ずる努力を投じつつありと雖も、また私利を貪るに急にして國家非常時を忘れたるやの感あるものまたなしとせず。

わが花田卯造氏の如きは、古き傳統と拘ぎなき確固不動の業魂にたつ個野財閥の主柱として、樞要諸事業を統轄して些かの過誤なく、全事業體勤員のもとに、赤誠報國の實績に遺憾なからしめつつあり。盖し光輝ある個野イズムの發揚に外ならざるは論を俟たざるも、また實際的主宰者たるの重責にある花田氏の識見と手腕の卓絶せるに因るところ多しと謂ふべく、特に氏の時局認識の適正にして清純なる、報國の熱意の旺盛なることは、全事業をして擧げたる躍動の一途を辿らしむるに多大の效果あり、また好個の判斷たり拍車たるを失はず。氏の統轄下にある全從業員が、安んじて其の任にありて貢獻を遂行し得るは、氏の斯くの如き全人格を仰ぎて自らの範となすに因る。

其の業に長たるものの人格の反映が齎らす影響の極めて甚大なるは、ひとり教育、宗教、思想界のみならず、産業界また識見豊かにして人格高潔なるの士をもとむるや切なるものあり。技術に長じ、商略に秀で、學術深遠なるものと雖も、人的機構の成員擧りて景仰するに足るべき高潔なる人格を有するものにあらざれば、超非常時局下にける、重大産業部門の經營統管者たるの重職に就くの資格なし。

複雜多岐にわたる重大産業部門の經營もまた偉大なる精神力に俟つところ多きに鑑みるとき、花田卯造の存在は實に個野系諸事業の幸ひたるのみならず、また國家の幸ひと謂ふべきなり。

氏は福岡縣人花田卯四郎氏の長男として、明治十八年六月七日福岡縣直方市直方に生る。夙に幼にして慶應果關の風あり、學業また極めて優秀、鄕黨氏の將來を期待するに大なるものありき。

稍々長ずるに及んで嚮く決するところあり、身を實業界に投じて名を成さんことを期し、個野組に入る。もとより重要の地位持つべくもあらず、一社員として世上一般の例に漏れず、平々凡々たる業務を振り當てられしが、氏は常に一發事と雖もこれを怠せにせず、愼重事にあたりて丹念、上長に從つて極めて從順、同僚と相扶けて親愛の情誼かなりしかば、漸次信頼を得て昇進、重要なる地位を歷任するに至り、斷然頭角を現はして凡庸の徒にあらざるを認めらる。

天賦如何に英邁なりと雖も、努力なくしては其の本質を伸べてこれを發揮し得るものにあらず。氏もまた不屈

不撓幾多の艱難辛苦を克服して精勵怠りなく、業務の餘暇を得ては心身の修錬に餘念なく、智徳を養ひて理想的人格の陶冶に專念せり。

飯野組異數の伸展を遂げ、業容を伸べて各種事業を創業擴大するに至るや、氏も亦凡ゆる事業に參畫して餘すところなく、非凡の才腕に加ふるに貴重なる經驗を以てせしかば、總て飯野組有數の人材として重用せられ、大正八年飯野組組織を變更して株式會社となるや拔擢せられて取締役となる。氏の財界躍進の大道は斯くして堂々と開拓せられ、株式會社飯野商事、飯野汽船を起し更に炭鑛業、林業界に進出するや、その樞機に參與して事業發展に資するところ尠からず。ついに昭和四年飯野商事株式會社專務取締役の重任に就き、ついで飯野汽船株式會社取締役を兼任するに至る。今や兩社專務取締役たる外、松浦炭鑛株式會社、興昌鑛業株式會社、東亞林業株式會社、日本鑛業岩鐵工業株式會社各社長、日本木材工業株式會社相談役たり。

組非常時局下にありて、重大使命を有する事業團に君臨し、一貫せる信條をもつてこれを運營しつつある氏の將來たるや、更に刮目して見るべきものありと謂ふべし。

氏いまだ壯齡に達せず、方に人生活動の最高潮期にあり、しかもこの重責に任ず、また氏にとりても無上の本懐たるべし。

立志よくその初志を貫徹して今日の榮位を獲得したる氏は、青少年時代恩義を受けたる人士の高恩を忘れず、老後不如意のものあらば、數百金を投じてこれを扶助するの美擧尠からず、また出征勇士遺家族にして、貧困なるものあるをもとめては、生活の補助を與へて慰安激勵し、さらに貧困家庭の子弟にして、向學の資に乏しきものあらば、學資を提供して育英を企からしめるなど、奇特の行爲また多し。以て氏の報恩の念に厚く、仁俠に富み慈愛の情ふかきを窺ふに足るべし。

私財を投じて社會公共に奉じたる善行に至りては枚擧に遑あらざるも、その主なるものを擧ぐれば左の如し。

昭和十一年神戸市長田神社改築のことあるや、これが改築費として金五百圓、同十二年福岡縣直方市羽高神社改築費金千六百圓、同市光明寺維持費並に修理費として金壹千參百拾五圓、同十四年同縣筑手中學校において鄕土館新築の計畫あるや、これが建設資金として金八千四百八拾五圓、同縣直方市帆野近津神社改築費として金壹萬圓、同十五年兵庫縣淡路伊弉諾神社改修費として金壹萬圓、同市感田小學校運動場擴張費として金參萬圓をそれぞれ寄附して、敬神崇祖の至誠を披瀝するとともに、麗しき愛鄕の至情を示せり。

これら善庶の範となすに足る奇特の行爲によりて表彰受賞の光榮に浴したること一再にとどまらざるも、前記近津神社修繕費として、金壹萬圓を寄附せし廉に依り、昭和十五年十一月十四日勅定の紺綬褒章を賜ひ、其の善行を表彰せらるるの光榮を重ぬ。實に氏の光榮たるのみならず、また一門に榮光を添ふるものと謂ふべし。

氏が國保消事業を熱愛して、これが伸張を期するは、氏にとりての實務たりまた本業たるは言を俟たざるも、氏の愛業熱は氏の唯一の趣味とも謂ふを得べく、日夜寢食西走活躍奮闘して倦むところを知らざるは、心身の强健なるに因ると雖も、氏が事業を愛することを以て趣味となすの、透徹せる信念の賜たるを失はず。

書畫を愛するの高雅なる趣味あるも、愛業を以て趣味となすに比すれば、また通例のことにして、多くを語るの要あらざるべし。

キヌ婦人との間に愛嬌淳子嬢あり飯野貫吉氏の四男傑四氏をを迎へて養子となす。氏は長崎高等商業學校出身の俊才にして、養父を扶けてすでに彼我の譽れ高し。大正三年八月生れの少壯氣鋭の實業家たり。

花田卯造氏

鄉の至情を示せり。

これら業庶の範となすに足る奇特の行爲によりて表彰受賞の光榮に浴したること一再にとどまらざるも、前記近津神社修繕費として、金壹萬圓を寄附せし廉に依り、昭和十五年十一月十四日勅定の紺綬褒章を賜ひ、其の善行を表彰せらるるの光榮を重ぬ。啻に氏の光榮たるのみならず、また一門に榮光を添ふるものと謂ふべし。

氏が關係諸事業を熱愛して、これが伸張を期するは、氏にとりての責務たりまた本業たるは言を俟たざるも、氏の愛業熱は氏の唯一の趣味とも謂ふを得べく、日夜東奔西走活躍奮闘して倦むところを知らざるは、心身の強健なるに因ると雖も、氏が事業を愛することを以て趣味となすの、透徹せる信念の賜たるを失はず。

書畫を愛するの高雅なる趣味あるも、愛業を以て趣味となすに比すれば、また通例のことにして、多くを語るの要あらざるべし。

キヌ婦人との間に愛嬢淳子嬢あり飯野寅吉氏の四男傑四氏をを迎へて養子となす。氏は長崎高等商業學校出身の俊才にして、養父を扶けてすでに敏腕の譽れ高し。大正三年八月生れの少壯氣鋭の實業家たり。

元郡是製絲株式會社々長

緑綬褒章受賞者

故　正六位　**波多野鶴吉氏**

安政五年四月一日生

京都府何鹿郡上林村

略歴

氏は京都府の人羽室嘉右衛門氏の四男、京都府何鹿郡延村に生る。慶應二年八月氏齢九歳にして同郡中上林村波多野彌右衛門氏の養子となり、長じて氏の愛嬢幸那女と婚約す。

由來養蠶業は京都府下における最大産業にして、製絲業者また夙からず、斯業今日の發達を見たるは、當業者の努力勉勉によることは論を俟たざるも、また氏の如き積産興業の志厚き先覺者ありて、滅私の至誠と熱情を傾倒し、專念これが指導保護に勉めたる賜なり。氏の養家波多野家農を營む傍ら大規模に養蠶業をも兼ねたりしかば、氏もまた養蠶業の習得に深き興味を持ち、飼育の一般を習得するや、進んで專門的探究に志し、飼育法の改良、蠶種の選擇等に劃期的企畫を試み、効をおさむるやこれを同業に勸奬して、大いに斯業の發展に資するところあり、養蠶業の眞の發達を將來せんには、同業者の一致團結に俟たざるべきに想倒しては、蠶業組合の結成を提唱し、明治十六年蠶絲組合規約案を草して、何鹿郡第八農眞農談會に提出す。

然れども氏の遠大なる企圖を諒解するもの、いまた少數にして同案は遂に否決さるるの悲運に遭ひしが、超へて同十八年蠶絲組合準則發布のことあり、依つて氏を中心とする同志は再び蜜起して蠶絲組合の結成に奔走し、翌十九年輔知山において府下同業者代表協議會開催せらるるや、氏は何鹿郡代表として參加し、遂に組合を結成せしめて自らは何鹿郡組合長の重職に就くこととなれり。次で同二十一年京都府蠶業組合取締所設立せらるるや副頭取たり。更に同年十月農商務省蠶絲業諮問委員に推さる。のち同二十四年京都府蠶業組合取締所頭取となり、組長會議を組織して斯業の健全なる發展を期し、全國同種組合の模範となれり。この間明治二十一年には早くも何鹿郡ド各所に養蠶傳習所を設置して養蠶家を養成し、同二十六年に至りては綾部町に高等養蠶傳習所を設立、翌二十七年製絲講習所を開きて、關係一般技術の向上に寄與するところ夥からず、更に明治二十三年夙に有光社を設立して社長となり、製絲の海外輸出の途を拓き、同二十九年郡是製絲株式會社を創立、取締役たり。同三十四年同社長に榮進す。大正七年沒す。明治二十九年十一月十六日勅定の緑綬褒章を賜ひ功勞を顯彰せらるる光榮に浴す。

郡是製糸株式會社

表狀拜受者

郡是製絲株式會社

本社　京都府何鹿郡綾部町

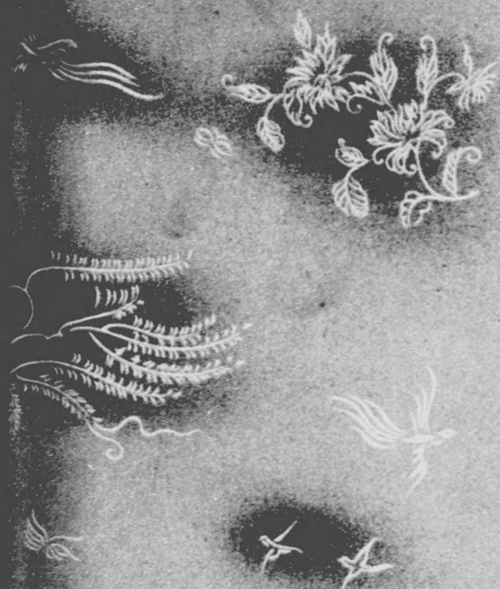
略歷

郡是製絲株式會社發祥の地たる綾部は、雄略天皇の御代秦氏民を遷して蠶桑紡織の業を勸め給ひし洩部の故地にして、のち近世に至るまで蠶絲業殷盛を極め、常に全國の優位にありたるも、安政開國以來蠶絲貿易大いに起り、奥羽、關東等の地方卒先して輸出生絲の改良增産に奔命するのとき、ひとり傳統の歷史を誇る綾部の地方にありては、何等對處の策を講ずることなく、徒らに長夜の夢を貪るのみなりしかば、僅僅二十年を出でずして、全國中最劣等の地位に顚落し、生絲の如きも輸出に適合せざるのみならず、內地需要家もこれを擯斥するの狀態たりき。

郡是製絲株式會社生みの親にして、數萬從業員より「郡是の父」として慈父の如く景仰敬慕されつつある波多野鶴吉氏は、當時の狀態を直視するに忍びず、銳意同業を聯盟指導して打開改善策を講ぜんことを期したりしが、恰も明治十八年蠶絲業組合準則發布せられ、翌十九年何鹿郡蠶絲業組合結成さるるや組長の重職に就き、先進地に人を派して研究怠りなく、製品の品位向上に努力すると共に、同業結束の必要を強調して遂に郡是株式會社設立の氣運を濃厚ならしめたり。洵に何鹿郡蠶絲業界の伸展は、郡是誕生の前奏曲とも謂ふべきなり。

明治二十八年わが郡是製絲は產聲も雄々しく誕生せしも、資本金僅かに九萬八千圓なりき。今日の隆昌を思ふとき坐ろ今昔の感なき能はず。爾來幾變遷時に波瀾に遭遇して危機に瀕することありしも、明治より大正へ、更に昭和へと異數の進展を遂げ、今や資本金二千六十六萬餘圓、拂込金一千八百八十七萬餘圓に達し、繰絲工場三十三ケ所、乾繭場二十ケ所に上る。その業實全國にわたり、臺灣、朝鮮にも及び、從業員、職員一千八百人、職工一萬八千人の盛觀を呈す。

郡是製絲は斯くの如き不動の陣營のもとに、職域奉公の萬全を期するとともに、また全社を擧げて社會公共に奉ずるの寄特の行爲尠からず。全從業員が一致團結のもとに報國の赤誠を披瀝して乘能の實を示したること一再にとどまらず。以て全國諸工場の模範となすに足れり。取締役會長平野吉左衛門、同社長波多野林一朔氏以下重役陣營に人材を得たると、全從業員の修練よろしきを得たる結果と謂ふべし。



關することありしも、明治より大正へ、更に昭和へと綿密の進展を遂げ、今や資本金二千六十六萬餘圓、拂込金一千八百八十七萬餘圓に達し、繰綿工場三十三ケ所、紡織場二十ケ所に上る。その職員全國にわたり、臺灣、朝鮮にも及び、從業員、職員一千八百人、職工一萬八千人の盛觀を呈す。

郡是製絲は斯くの如き不動の隆昌のもとに、職場奉公の眞念を期するとともに、また全社を擧げて社會公共に奉ずるの奇特の行爲尠からず。全從業員が一致團結のもとに報國の赤誠を披瀝して戰時の實を示したること一再にとどまらず。以て全國紡工場の模範となすに足れり。取締役會長平野育左衛門、同社長波多野林一郎氏以下重役陣營に人材を得たると、全從業員の篤誠よろし宜を得たる結果と謂ふべし。

中島鋼管株式會社々長、鋼管鋼造組

紺綬褒章受賞者

中島敬治郎氏

明治十五年二月十二日生

住所　大阪市西成區松島町二丁目四八

營業所　大阪市西成區鶴町西之町一丁目一〇

鐵道に船舶に飛行機に將又建築に、其他各種の現代文明を象徴するものの大多數が、鋼鐵の存在と不可分不可離の關係に在ることは、何人も辯ふべからざる所にして、從者は現世紀を目して鋼鐵時代の文明なりと言へるは寔に至當と稱すべきなり。此の鋼鐵の世界に於ける一部門として鋼管業の存在は、其量に於て或は大なりとすべからざるも、其使命に於ては、最も重要にして、軍艦、飛行機、發電所等動力に於て特殊の壓力を必要とする機關に在りては、鋼管の有する機能は斷じて閑却すべからざるのみならず、寧ろ之等文明利器の最尖端を往くものとして、最も重要視すべき必須の工業たり。中島鋼管株式會社は、多年斯業の經營に當り、優良無比の製品を産出して業界に獨歩の地歩を占め、今や業績業界に於ける一大存在として、嚮々たる業績を示しつつあるもの。而して當社主謀者として經營の衝に當れる中島敬治郎氏は、夙に鋼管業業界に於ける一權威として目せられ、異常の創意努力を以て、克く今日の地位を築きたる立志傳中の人物にして、苟くも斯業に就て語らむとするものの、輙じて逸すべからざる人材なりとす。

氏は岡山縣阿哲郡新見町中島民藏氏の次男として、明治十五年二月十二日を以て嚶々の聲を揚ぐ。責性聰敏識悟、頴る創造の才に勝れ、進取の氣に富み、少時既に經營の閫に頭角を顯はし、其多望なる未來を嘱目せらる。夙に工業に依りて身を立てんとするの志望あり。地方に學を卒へ、長ずるに及んで大阪に出で、住友伸銅所に入りて業務に精勵すること年あり。後增田伸銅所に轉じ、夏に大正三年杉野太郎商店の經營に任ず。爾來獨立の素地成るや、鋼管製造業を創し、後劉力中島鋼管株式會社を起し、猶擴經營、漸次業況の進展を見つつありしが、恰も滿洲事變、支那事變相繼で起り、工業界は前古未曾有の好況を呈するに至り、此事業も從つて一大飛進を遂げ、以て今日の隆昌を見るに至れり。由來鋼管は當初外國製品の壓制に委しつつあるの狀態なりしが、我業者が不斷の研究努力に依り、優良なる製品を産出し得るに至り、漸次外國品を驅逐して之に代らむとするの狀態に到達したることは、國家産業の上より謂て最も慶ぶべき現象にして、此等製造業者の獻身的努力に依る所頗る大なるものあるを否むべからず。乘に氏が鋼管再興に對して、多年に亘り不撓不休の努力を續け、之が技術上或は經濟上其他各方面より周到なる研究を行ひ、遂に之に成功したる一事は、益に特筆大書に値するものにして、氏こそは、本邦に於ける鋼管再興の創始者たるの名譽を享受すべき人として、業界の良く銘記すべき功績たり。

氏は斯の如く常に其事業に忠實にして勉心なるのみならず、亦公共公同の企劃る厚く、各種の社會事業其他に巻し、之に私財を投じたること屢々にて竟ふべからず。昭和十四年三月日本赤十字社大阪支部事業費として、金一萬一千九百圓を寄附したる能に依り、其功を賞せられて同年十月七日、勅定の紺綬褒章を下賜せられ、家門の榮譽を輝かせり。

當家は二重丸に五三の桐を家紋とし、禪宗に歸依す。家庭には進良貞雄の聞え高きエイ夫人、高津中學出身にして中島鋼管代表者たる長男敬一氏、同靜子夫人、令孫俊子嬢、二男保一君、神戸商大出身の三男三郎君、四男義三郎君、五男彦助君あり。長女花子嬢は他に嫁せり。夫人は明治二十九年、大阪府武田龜次郎氏の女として生れ、氏に嫁して以來能く家を治め、夫君をして後顧の憂ひ無からしめ、隣人の間に嘖々たる令名を馳す。其家庭の圓滿なる、恰も常に春風に坐するが如き感あり。其圓滿和樂の狀は、洵に羨望に堪へざるものあり。

氏の今日の成功は素より、其天賦英邁なるに由るもの大なるべしと雖も、亦實に氏が堅忍不撓、其職務に忠實にして、業務に研究に當人の企及すべからざる多大の努力を拂げたる賜と言ふべく、而も國家奉公の念に厚くして、公共の事を忘れざる、寔に吾人の景仰措く能はざる所にして、其閲歴行爲は以て後進子弟の龜鑑とするに足るものありと言ふべし。

富田平八郎

氏は斯の如く常に共益者に忠實にして熱心なるのみならず、亦公共公同の全體を厚く、各種の社會事業其他に進し、之に私財を投じたること擧げて數ふべからず。昭和十四年三月日本赤十字社大阪支部事業費として、金一萬一千九百圓を寄附したる際に依り、其功を賞せられて同年十月七日、勅定の褒賞狀並賞章を下賜せられ、家門の榮譽を揚げたり。

當家は二重丸に五三の桐を紋とし、淨宗に歸依す。家族には溫良貞淑の聞え高きエイ夫人、高津中島出身にして中島銅管代表者たる長男敬一氏、同夫人、令孃敏子嬢、二男保一君、神戸商大出身の三男三郎君、四男義三郎君、五男泰助君あり。長女花子嬢は他に嫁せり。夫人は明治二十九年、大阪府武田龜次郎氏の女として生れ、氏に嫁して以來能く家を治め、夫君として後顧の憂ひ無からしめ、隣人の間に噴々たる令名を聽す、其家庭の圓滿なる、恰も當に幸福に坐するが如き感あり。其圓滿和樂の狀は、洵に夢寐に場へざるものあり。

氏の今日の成功は素より、其天賦英邁なるに由るもの大なるべしと雖も、亦實に氏が堅忍不拔、其職務に忠實にして、業務に研究に常人の企及すべからざる多大の努力を拂げたる賜と言ふべく、而も同族事業の全に厚くして、公共の事を忘れざる、是に有人の景仰措く能はざる所にして、其閨門行爲は以て靑年子弟の龜鑑とするに足るものありと言ふべし。

綬褒章受賞者

富田平八郎氏

明治四十四年三月十八日生
住所　奈良市法蓮町一三三ノ一
營業所　大阪市北區宗是町一大阪ビルヂング

富田平八郎氏は奈良縣人富田正次氏の長男、奈良市法蓮町に生る。昭和十年七月父君の殘後家督を相續。父君正次氏は夙に海運業に志し、持前精勵家業の興隆に邁進して息りなかりしが、時に業界の悲運に遭遇して家業また破綻に瀕すること再三にとどまらざりしが、不屈不撓これに耐へ、百艱を克服打開して業礎を確立し、隨國たる針路を把握して業界に不動の地歩を築けり。

氏資性溫厚にしてしかも果斷の風あり、常に重厚よく業界の前途を達觀し、營業方針の堅實性を失はざるのみならず、時にまた果敢の決斷をもつて業容の刷新を斷行し同業に垂範の實を示したるほか、業界諸公職を歷任して斯業の發展に貢獻したるところ極めて多く、新昇進れに見るの逸材として景仰されざるはなく、また奈良市にありては、有數なる有力市民として自治の發展に產業の振興に、敎育の振作に、重擧するところ尠からず、推されて種種の公職に就くこと數りにして奈良市發展に寄與せし功績顯著なるものあり、戰中實を社會公共事業の擴充整備に用ひ、私財を投じて斯業の實施を助成せし美擧枚擧に遑あらず、氏の治績にして美果を結び、嘉譽を博らしつつあるもの鮮少ならず、市民遺德を追慕して、その功勞を多とするや切なり。

平八郎氏幼にして英才の譽高く、中等の課程を終るや早稻田大學商科に學び、昭和七年同校卒業、直ちに父業を扶けて敏腕を發揮し、早くも少壯實業家として、同業の關目するところとなれり。

父君につき實務を學ぶと共に、身を從業員の中に投じて修練を重ね、加ふるに專攻の學を活用して自在の活躍をつづけた氏は、父君の亡勝を繼ぎ家督を相續すると同時に、業礎のより强化と、業容の刷新を期して株式會社富田商會を設立、自ら社長となりて面目を一新せり。

父君の業界における多年の信望と、偉績拔きなき確固不拔の愛護は、年を逐ふて富田商會を殷盛ならしめしが、しかも氏は敢てこれを小成となし、斷じて安逸を貪るを戒しめ、健實なる營業方針のもと積極進取を忘れず業界の指導に即應して臨機應變の措置を誤らず、歐洲第二次大動物發して海運界頓みに繁忙を極むるや、公益優先の理念に基きて運賃方針を更新、戰場奉公の實踐に垂範の實を示すなど、非常時局下における貢獻の遂行に專念する傍ら、父君の遺志を伸べて社會公共に奉ずるの念厚く、昭和十二年奈良警察署新築の計畫なるや、率先してこれが敷地價格約二萬圓並に建築資金五千圓を寄附せしほか、同十三年二月日本赤十字社奈良支部資金として金一萬圓を寄附するなど奇特の行爲尠からず、昭和十三年五月二十七日勅定の戰殺褒章を賜ふの光榮に浴し、更に同十四年一月三十日賞勳局より賞狀を授與さるゝの光榮を重ねしが、氏が昭和十三年三月奈良刑務所內の進拜所竣成に多大の助力を投じたるは、氏の思想ならびに人格を物語るに足る佳話たるを失はず、即ち氏は同進拜所建築用地價格外二十八圓を寄附し、嶄嚴にして清淨なる進拜所の建設を容易ならしめ、圍圍の同胞をして敬神崇祖の精神を昂揚せしむるの施設を完成せり。

氏は夙に神道を研鑽し、生活はもとより營業方針の根幹もすべて神道より發するといふ。蓋し氏が年少いまだ三十歲を數へたるに過ぎざる少壯實業家たるに拘らず、嶄然たる風格あり、眞摯にして謙讓の美德を備ふるは、神道を信仰する崇敬生活の反映にして、衆人の瞻みざる模範所生活に、精神修養の意を光明を增らすに至りたるは、また氏の信仰の然らしめたるものと謂ふべく、富を積し地位を得たる少壯實業家の多くが、概ね浮薄に陷り易き中にありて、氏の如く終始一貫崇敬的信念に基きて、益々邁進しつゝあるは、まことに景仰するの値ひあり、殊に非常時局下にありて、自らを持するの嚴なるを必要とするの際、氏の私的生活公的生活こそ、以て衆庶の範となすべきなり。

氏は事業を勉勵する傍ら趣味として運動を好む。青年實業家たるの面目躍如たるものありと謂ふべし。心身の健調に富りなき氏の日常は、更に光輝ある將來への修練にして、今後における飛躍進たるや期して待つべきものあり。氏いまだ壯狀に富み前途洋々、わが海運界における逸材として雄飛するの日遠からざるを信じて疑はず。

愛子夫人は京都府立第二高等女學校出身の才媛。家庭に綱子雄也君、令弟正義氏あり。

田部長秋氏

てこれが數地價格約二萬圓並に建築資金五千圓を寄附せしほか、同十三年二月日本赤十字社奈良支部資金として金一萬圓を寄附するなど奇特の行爲尠からず、昭和十三年五月二十七日勅定の紺綬褒章を賜ふの光榮に浴し、更に同十四年一月三十日賞勳局より賞狀を授與さるゝの光榮を重ねしが、氏が昭和十三年三月奈良刑務所内の遙拜所建設に多大の助力を投じたるは、氏の思想ならびに人格を物語るに足る佳話たるを失はず、即ち氏は同遙拜所の精神を昂揚せしむるの施設を完成せり。

氏は夙に神道を研鑽し、生活はもとより營業方針の根幹もすべて神道より發するといふ。蓋し氏が年少いまだ三十歳を超へたるに過ぎざる少壯實業家たるに拘らず、凛然たる風格あり、眞摯にして謙讓の美徳を備ふるは、神道を信仰する宗教生活の反映にして、世人の顧みざる刑務所生活に、精神修養の尊き光明を齎らすに至りたるは、また氏の信仰の然らしめたるものと謂ふべく、富を擁し地位を得たる少壯實業家の多くが、輕佻浮薄に陷り易き中にありて、氏の如く終始一貫宗教的信念に基きて、堂々邁進しつゝあるは、まことに景仰するの値ひあり、殊に非常時局下にありて、自らを持するの嚴なるを必要とするの際、氏の私的生活公的生活こそ、以て衆庶の範となすべきなり。

氏は事業を熱愛する傍ら趣味として運動を好む。青年實業家たるの面目躍如たるものありと謂ふべし。心身の錬磨に怠りなき氏の日常は、更に光輝ある將來への修練にして、今後における躍進たるや期して待つべきものあり。氏いまだ春秋に富み前途洋々、わが海運界における逸材として雄飛するの日遠からざるを信じて疑はず。

愛子夫人は京都府の人竹澤七三郎氏の四女、京都府立第二高等女學校出身の才媛。家庭に嗣子隆也君、令弟正義氏あり。

元貴族院議員、元島根縣農工銀行取締役、育英、産業功勞者

綠綬褒章受賞者

故 田部長秋氏

嘉永五年四月八日生
島根縣飯石郡吉田村

祿生を公共公益の事に捧げて、鄉黨の福祉增進を圖り、或は山林田野の開墾に、或は農事の改良發達に、或は道路河川堤防の修築に多大の貢獻を爲し、就中敎育の普及整備に對して獻身的の努力を致し、以て地方文化の開發に偉大なる功績を貽し、我邦近世地方史の上に、嶄然たる光彩を放てるもの、之を故田部長秋氏と爲す。

抑々田部家は紀州熊野の庄田邊流增の別流、田邊宿禰の裔にして、文永年間に至り、田邊入道安西出雲に來り、吉田村に住し、九代の時田邊を田部と改む。爾來代々此地に在りて國內に古き由緒を誇る屈指の豪農たり。氏は嘉永五年四月八日を以て瓢々の聲を揚げ、初め長右衞門と名乘りしが、大正十五年退隱すると共に長秋と改む。資性溫厚篤實にして、克く家業に精勵すると共に、公事に盡瘁する所、頗る大なるものあり。今其經歷の一端を述れば、明治十七年縣會議員に擧げられ、始めて公人として地方自治に參畫し、越へて同二十二年吉田村名譽村長となり、同二十三年[illegible]當の典型を負ふて貴族院議員に推され、國政に參與す。後郡會議員、同議長、島根縣農工銀行取締役、島根縣農會長、同山林會長等に歷任、又恩賜財團救生會評議員、日本赤十字社島根支部商議員を嘱託せられ、共に能く其任を全うせり。茲に最も特筆に値するものは、敎育に對する功績にして、夙に時世の進運に伴ひ、國民敎育の忽せにすべからざるを感じたる氏は、鄉黨の間を奔走して其必要を力說したるも、當時明治政府創立の直後にして、士農工商の階級意識に囚はれ、擧事時代の弊習より脫せざる衆民は、商人百姓には學問の要無しとして、氏の言葉に耳を傾くるもの無きのみならず、却つて反感を懷くもの多かりき。されど懲ゆるが如き信念は、益上の反對に遇ひて益々堅く、熱誠を傾けて、學問の德を說へ、敎育思想の普及に努めしかば、漸次氏の說に心を寄するもの續出するに至れり。斯くて明治七年私財を投じて、鄉內に小學校を創設し、其名を田部小學校と命名す。是同地に於ける近世敎育施設の嚆矢なりとす。後明治十六年十月學區の改正に伴ひ、此田部小學校を出雲國第四十七小學區公立小學校として代用し、其經費は公費より支出することとなりたるも、編入の前年、即ち明治十五年迄の經費は悉く氏の負擔に係り、其累計實に二千二百六十二圓の多額を算せり又以て如何に氏が、敎育の普及發達に意を注ぎしかを證知するを得べし。新の如く氏は實に敎育事業に力を致したるに止まらず、農事の改良に對しても、或は自己の田畑を試驗田に提供し、或は私費を以て農事高般の施設を爲書し、又種產異業の方面に於ては山林の增植を計畫し、優良なる苗木を遠く他國より購入、無償にて各戶に分與し、時々講演會又は談話會を開催して、造林の思想を鼓吹し、以て勸業の發展を促す等、爲に今や同地方に於ける山林は擧首として繁茂し、既に近年續々伐材せられて農業資金の用に供せられつつあり。其他道路、河川、堤防の諸事業より救民施設に至るまで、一として氏の手眞せざるもの無しと稱するも不當に非ず。以て其貢獻の偉大なるを知るべきなり。

されば鄉民齊しく其德を慕へ、高邁なる人格を仰いで、慈父の如く敬慕せるの狀、見るものをして亦敬虔の念に堪へざらしむるものあり。惩かる氏の德行は、いつしか天聽に達し、明治十九年五月十八日、資性順良、平素篤實實直の厚志く、就中明治七年中、自費を以て田部小學校を開設し、公立小學校に代用して近鄉の子弟を就學せしめ、年々消費する所の金額少しとせず、其成績著明なりとして、勅定の藍綬褒章を拜受し、更に大正十二年五月縣江高等學校設置費として、金三萬圓を寄附したる廉により、同十三年三月十五日勅定の紺綬褒章を賜はり、又同十五年十二月島根縣立三刀屋中學校建築費一萬二千圓、同十二年四月同縣飯石郡吉田村吉田尋常高等小學校建築費金一萬圓を寄附し、孰れも飾版一箇を拜受し、家門の榮譽を輝かせり。其他產業開發の功により、明治二十年三月島根縣知事より、新民農會一部を贈られたるを始め、同三十九年六月帝國農會

田部長右衛門氏

興し、時々講演會又は談話會を開催して、造林の思想を鼓吹し、以て斯業の發展を促す等、爲に今や同地方に於ける山林は霽蒼として繁茂し、既に近年續々伐材せられて建築等の用に供せられつつあり。其他道路、河川、堤防の諸事業より貧民救濟に至るまで、一として氏の千與せざるもの無しと稱するも不當に非ず。以て其貢獻の偉大なるを知るべきなり。

されば鄉民齊しく其德を讃へ、高邁なる人格を仰いで、慈父の如く敬慕せるの狀、見るものをして赤敬慮の念に堪へざらしむるものあり。惩かる氏の德行は、いつしか天聽に達し、明治十九年五月十八日、資性順良、平素殖産濟貧の厚志く、就中明治七年中、自費を以て田部小學校を開設し、公立小學校に代用して近鄉の子弟を就學せしめ、年々消費する所の金額少しとせず、其成績著明なりとして、勅定の藍綬褒章を拜受し、更に大正十二年五月松江高等學校設備費として、金三萬圓を寄附したる廉により、同十三年三月十五日勅定の紺綬褒章を賜はり、又同十五年十二月島根縣立三刀屋中學校建築費一萬二千圓、同十二年四月同縣飯石郡吉田村吉田尋常高等小學校建築費金一萬圓を寄附し、孰れも飾版一箇を拜受し、家門の榮譽を輝かせり。其他産業開發の功により、明治二十年三月島根縣知事より、斯民農書一部を賜られたるを始め、同三十九年六月帝國義勇艦隊建設義金を醵出し、又大正五年七月林業に對する功勞により、それぞれ有功章を賜與せられたる外、感謝狀、褒狀、銀盃等を受けたること枚擧するに遑あらず。

惩く屢次の表彰を享けたる氏は、一身の光榮に深く感激して、一層公共に意を注ぎつつありしが、後遂に病を以て、鄉人哀悼の裡に、遽然として不歸の客となれり。

綬、紺綬褒章受賞者
勳八等 田部長右衛門氏

明治十一年一月三十一日生
島根縣飯石郡吉田町

島根縣下に於ける屈指の名門にして、同地の農業財界に嚴然たる一大勢力を把持し、產業、金融其他各方面に多大の貢獻を拂げつゝあるのみならず、各種公共事業に盡して已まざる田部長右衛門氏は、地元の信望眼る高く、實代平に優る人材として、朝くも縣下の情勢を知らむとするもの、、斷じて逸すべからざる一人なりとす。

先代長右衛門氏は晩年息狀と病し、肌に同地方の敎育、產業を始め、公共公同に有興する所甚だ大なりしのみならず、地方自治の爲に盡し、又貴族院議員として國政に參與し、更に島根縣農工銀行取締役、島根縣農會長、同山林會長等に擧げられ、地方の敎育、產業、金融其他に多大の功績を貽したる人にして、生前其功を賞せられ、勳定の褒狀竝賞狀、緒綬褒章並同御下賜の光榮に浴したる外、各方面より其德行を表彰せられたること枚擧に遑あらず。今日尚在場人より追慕の情を寄せられつゝある高德の士たりき。現代は同じく島根縣飯石郡吉田村の名家にして、先代の實兄に當る宇山清左衛門の三男に生れ、叔父先代長狀の養子となりて其家督を相續し、前名種之助を改め、長右衛門を襲ふ。卽ち通稱として父祖相傳へ、其號を享くること、氏を以て二十二代を算せり。夙に學を修めて、早稻田大學に學び、明治三十六年政治經濟科を卒へて後其家業を繼ぐ。表性溫厚にして、才識並に高く、克く勞めて怠らず、其學識を出でゝ、地に歸るや、幾許もなく吉田信用購買組合を創設して、組合長に推され、同三十七年、僅に二十七歲にして村長會長に選擧せられ、後更に縣農會副會長の要職に就く。以て如何に衆望の才に非ざるかを看るべし。卽來一意專心農家の經營を指導すべく、優秀の產額を以て之に當り、施設する所頗る多し。卽ち農作物種子の選擇、耕種の改善は勿論より、更は試驗田を設けて、品種優良なる米麥と劍比し、或は肥料を管理し、共同購入を行ひて之を安價に供給し、更に肥料の硏究に特を執り、其結果を實地に施して、農產物の增產改良に資する啻、幾近銅りに嘱託せらるゝ農事改良の一端と、能に數十年以前に實行し、而も着々として多大の實績を擧げ來りたる、其先見洞察の敏腿に驚へざるものあり。又敎育、行政の方面に對しても夙に一家見を有し、特に國民敎育の普及向上を期し、曾に町村の地位に就任するや、小學校の增築を斷行して施設の改善を行ひ、又道路、橋梁の新設改築、衛生設備の整備、村有林本財產の造成等實に資する所洵に大なり。曾て島根銀行、當場實業銀行の取締役たりしことあり。現時松江銀行取締役たる外、日本勸業銀行島根地方評議員に推され、同地金融、產業界に重きを爲し、又島根縣多額納稅者の一に列し、產業組合五萬五千餘圓を納むる篤者として、從民の模範を享けつゝあり、茲に所以なしとせず。其他各種團體林會を始め、大日本山林會、帝國實業會、全日本司法保護事業聯盟各評議員、日本赤十字社島根支部評議員、島根縣方面委員會、國民精神總動員島根地方實行委員會、島根防空各委員等の公職に就き盡瘁する所多からず。

前の如く各方面に卓公の譽を表しつゝある氏は、昭和十二年七月島根縣飯石郡吉田村等當小學校建築費として、金二萬五千圓及同校敷地として、土地一町四反一畝十三步を寄附したる譽により、其功を賞せられ、同十四年三月八日勳定の緒綬褒章を下賜せらるゝの光榮を擔へり。又去る明治三十九年四月日露戰役の功に依り、勳八等に叙し、白色桐葉章を授けられ、昭和七年四月同盟會に、同十一年十二月林業功勞者として觀彩會に招されたる外、大正十一年十月大日本農會より白綬有功章、昭和十四年四月帝國に際し軍費金獻納により大日本國防婦人會より感謝狀を受け、同十五年二月實業功勞者として島根縣知事より表彰せらる。其他各種の社會公共慈善事業に對しても多大の勞力を拂げ、之に私財を投じたること擧げて數ふべからず。

伽野夫人は、島根縣人團井本太郎氏の二女にして、能く家を治め、夫君をして後顧の憂ひ無からしめ、また子女の敎育に意を注ぎ賢母宜妻たるを得、典型的賢夫人として知らる。男爵之氏は京都帝大經濟學部出身の秀才にして、嗣子夫人との間に一男二女あり。清閑海に我むべき家庭たり。

胃腸藥アイフ本舗類和商會主、製藥業

緑綬褒賞受賞者

谷口作治郎氏

明治十八年七月六日生
生地　奈良縣宇陀郡榛原町大字萩原
住所　大阪市東區清水谷西之町三六五番地

略歴

化粧品、胃腸藥等の優良品を創製發賣し、製藥業者として多大の成功を收め、今や業界に卓々たる盛名を謳はれつゝあるもの、之を谷口作治郎氏と謂ふ。

當家は奈良縣に於ける屈指の醬家にして、曾祖谷口源右衛門は織田信長侯に仕へ、功臣たり。祖父源作の代に至り、農に歸す。後庄屋より區長に遷ばれ、多年其の職に在りて地方自治に貢獻する所多く、爲めに當時の顯知事より其の功績を賞せられたることあり。當代作治郎氏は先代嘉五郎の長男として、明治十八年七月六日、奈良縣宇陀郡榛原町に生る。年少にして大阪に出で、南區靱壹町なる中將湯本舗津村順天堂大阪支店に入り、勤苦精勵店務に勝み、商才大いに其の商才を認められる。

次で明治四十年店主貴族院議員津村重舍並に實業界の巨頭大倉新太郎の兩氏が相提携して東亞公司を創立するや、拔擢せられて天津支店長に赴任す。後同公司を辭し、大阪に於て獨立製和商會を創し、化粧水「花顏水」を發賣して江湖の好評を博し、更に胃腸藥「アイフ」を創製し、奏効顯著なるの故を以て、現時胃腸藥中の第一を以て稱せられ、此の種要品中の王座を占め、業運隆々として今日に至れり。

敎育振興の念に厚く、日蓮宗に歸依し、又德川家康の遺訓を遵奉し、己を持すること謹嚴にして、常に國家奉公の念を忘れず、日本赤十字社、帝國水難救濟會、國防婦人會、愛國婦人會、帝國在鄕軍人會、海軍協會等の事業に賞賛して、屢次之に私財を投じ、有功章、賞狀、賞狀、感謝狀、銀盃、木盃等を贈られ、又昭和六年の事變以來、或は陸軍へ裝甲車を獻納し、或は軍醫學校へ金員を寄附し、或は陸海軍將兵慰問の爲め、愼兵品を數回に亘りて寄贈する等、大いに銃後に努め、軍部より感謝を受けつゝあり。

昭和十四年六月、奈良縣宇陀郡榛原第一等常高等小學校講堂建築費として、金四萬六千圓を寄附したる廉に依り、其の功を嘉せられ、同十五年九月二十一日、勅定の緑綬褒章を賜ひ、其の施行を褒彰せらる。

衞生設備の整備、村有基本財産の造成等貢獻する所洵に大なり、曾て雲陽銀行、雲陽實業銀行の取締役たりしこと島根縣多額納稅者の班に列し、直接國稅五萬五千餘圓を納むる長者として、衆民の景仰を享けつゝある、玆に所とあり。現時松江銀行取締役たる外、日本勸業銀行島根地方顧問に推され、同地金融、産業界に重きを爲し、又以無しとせず。其他帝國森林會を始め、大日本山林會、出雲育英會、全日本司法保護事業聯盟各評議員、日本赤十字社島根支部尚議員、島根縣方面委員會、國民精神總動員島根地方實行委員會、島根防空各委員等の公職に就き盡瘁する所尠からず。

斯の如く各方面に奉公の誠を致しつゝある氏は、昭和十二年七月島根縣飯石郡吉田村尋常小學校建築費として、金一萬五千圓及同校敷地として、土地一町四反一畝十三歩を寄附したる廉により、其功を錄せられ、同十四年三月八日勅定の緑綬褒章を下賜せらるゝの光榮を擔へり。又去る明治三十九年四月日露戰役の功に依り、勳八等に叙し、白色桐葉章を授けられ、昭和七年四月産業功勞者として觀櫻御會に召されたる外、大正十一年十月大日本農會綠白綬有功章、昭和十四年四月事變に際し軍資金獻納により大藏大臣より感謝狀を受け、同十五年二月實業功勞者として島根縣知事より表彰せらる。其他各種の社會公共慈善事業に對しても多大の努力を拂げ、之に私財を投じたること擧げて數ふべからず。

梅野夫人は、島根縣人福井本太郎氏の二女にして、能く家を治め、夫君をして後顧の憂ひ無からしめ、また子女の訓育に意を注ぎ寬嚴宜しきを得、典型的賢夫人として知らる。男朋之氏は京都帝大經濟學部出身の秀才にして、喬子夫人との間に一男二女あり。清福洵に羨むべき家庭たり。

三共株式會社々長

藤、紺綬褒章受賞者

鹽原又策氏

明治十年一月十日生

住所　東京市渋谷區神泉町一〇二

番地所　東京市日本橋區室町二ノ二

略歴

○大正四年四月恩賜財團濟生會へ金壹萬圓寄附の廉に依り同九年四月十六日勅定の紺綬褒章を賜ひ、其の善行を表彰さる。

○多年製藥並に幾多の化學工業に竭したる功績顯著なるの故を以て、昭和三年十一月五日勅定の紺綬褒章を賜ひ、其の功勞を顯彰さる。

氏は神奈川縣出身、横濱市に生る。明治三十年二十歳にして横濱英語學校を卒業するや、早くも翌三十一年獨力克く横濱絹物株式會社を設立し、取締役支配人となり、翌三十二年副業として製藥業に手興、同三十五年に至りて製藥業に專念することとなり、東京市に製藥工場を創設す。これ實に我國製藥業界に王座を占むる三共株式會社の起源にして、また氏が今日の盛名を馳するに至りたる端緒たり。

當初絹物貿易を志したる氏が、偶々製藥事業に干與したるを奇緣として、將來製藥業界に君臨するに至りたるは、一見偶然の幸運に依るものの如しと雖も決して然らず、氏の英邁なる資性と不斷の精勵に依る賜に外ならず。氏も亦立志傳中の人物たるを失はず、以て業人の範となすに足れり。

製藥事業たるや當時にありては未だ幼稚の域を脫せず、これが進展を期するには先進諸國の斯業に就きて學ばざるべからずとなし、明治三十七年先づ米國に渡りて具さに製藥事業界を視察し、大正元年再び渡米して研鑽を重ぬると共に、歐亞兩洲各國を巡歷して大いに見聞を博む。

大正二年個人經營を株式組織に變更し、三共株式會社を創立、自ら代表取締役となり、社業の整備充實を期するため同九年三度渡米せり。

今や三共株式會社々長たるのみならず、寶眞化學工業、日本ベークライト、高峯コーポレーション其他諸會社々長、東洋窒素工業、合帥樹脂、住友アルミニューム其他諸會社取締役として重要産業部門の機樞に參畫しまた製藥、藥學、化學工業、發明、社會公共事業關係諸團體の理事、評議員として報國の至誠を披瀝し、職域奉公に邁進しつつあり。多年にわたる功勞洵に顯著なるものあり、頭書の通り紺綬褒章、並に紺綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

考によりて業態は確立されたりと雖も、纖詰業の如きは、その關聯學品多種多樣にして、特に輸出向製品にありては、先進國すでに販路を獨占するあり、極めて優秀なる製品を以て商戰に臨むにあらざれば、惨敗は火を睹るよりも瞭らかなり。氏が材料の選擇に、製法の改良に、衞生鐵の改善に不斷の努力を投じたる結晶は、遂に先進諸國の製品を凌駕するの結果を齎らし、商勢頓みに殷盛を加へしのみならず、わが國纖詰業の信用と聲價を海外に高からしむるに與つて大いに力あり。氏今や陸上製纖詰業水産組合長、全國輸出纖詰業水産組合聯合會評議員として斯業の發展に邁進しつつあるも、その過去に於いて斯業の伸展に貢したる功勞もまた沒すべからざるものあり。

昭和九年七月縣社會學岡神社造營の計畫成るや、衆に卒先して、造營費金壹萬圓を寄附せし廉に依り、同十年五月二十二日勅定の紺綬褒章を賜ひ、其の善行を表彰せらるるの光榮に浴す。

維新表彰受賞者

故　正六位勲四等　**弘世助太郎氏**

明治四年十二月生

自邸　兵庫縣武庫郡住吉村堂ノ本八二四番地

略歴

弘世家は舊幕時代江州愛知郡愛知川の本陣を勤め、苗字帯刀を許されたる名門にして、後彦根に移住す。第六代を助市と稱し、實に當家中興の祖なり。廣く和漢の學に通じ、又詩歌に巧みにして、書を能くす。四代の頃より稍衰微せし家運の恢復に努め、東西南北に行商し、數年にして再び家運を盛ならしむるを得たり。又義氣に富み、時に巨費を擲ちて窮民を救ひ、國事を援くる等一再に止まらざりしが、明治十二年病歿す。第七代助三郎は實に助市の甥に當る。篤人温厚にして商略に富み、廢藩後彦根町の衰頽に赴くを憂ひ、教育、産業、交通の興隆に盡し、又明治二十二年大阪に生命保險業を創始す。現時日本聚一を以て鳴る日本生命保險是也。其他銀行、報償機關等助三郎の企畫せる事業尠からず、大正二年天壽を全うして逝く。

助太郎氏は即ち其の長男にして、明治四年十二月を以て彦根に生る。夙に京都第三高等學校を卒業するや、初め三菱銀行に於て銀行事務を實習し、次で日本倉庫及び山口銀行支配人となり、事務的卓越の手腕を揮せらる。明治四十一年日本生命保險株式會社取締役となり、大正八年專務取締役に推され、昭和三年社長の重任に就く。當社が躍進的發展を遂げ、我邦生保界の覇王たるの地位を得たる、實に氏の功に歸せざるべからず。昭和二年以來生命保險會社協會理事長として終始業界を指導せり。氏は一人一業主義の信奉者たりしも、日本生命保險事業との關係上、三和銀行、關西信託、日本無線電信各株式會社取締役、新大阪ホテル、都ホテル、大阪毎日各株式會社監査役たりき。

公共、公益の事業に異常の熱意を有し、大正十三年には、財團法人日本生命濟生會を設立し、後其の理事長に就任、結核豫防協會、癌研究會等に盡し、又獨逸文化研究所、日佛文化協會等に關係して、民間外交に貢獻する所大なり。昭和八年外遊以來、國防充實の研究を痛感し、會社基金中より一百萬圓を國防費に献納せり。茲に大正十二年三月彦根高等商業學校建設費として、金一萬圓を寄附せし縁に依り、同十四年十月廿四日勅定の維新賞牌下賜の光榮に浴せり。

昭和十一年三月九日逝去として逝けり。

日本生命保險株式會社々員

維新表彰受賞者

正八位　陸軍主計中尉　**弘世正方氏**

明治四十三年四月廿八日生

自邸　兵庫縣武庫郡御影町郡家道内二八三番地

略歴

日本生命保險株式會社は、大阪財界の重鎮にして、元其の社長たりし、故弘世助太郎の先代助三郎翁が、發起創立したるものにして、今や本邦最大の保險會社たり。茲に小傳を叙せ

日本生命保險株式會社々員

紺綬褒章受賞者

正八位　陸軍主計中尉　**弘世正方氏**

明治四十三年四月廿八日生

自邸　兵庫縣武庫郡御影町郡家堺内二八三番地

略歴

日本生命保險株式會社は、大阪財界の重鎭にして、元其の社長たりし、故弘世助太郎の先代助三郎が、發起創立したるものにして、今や本邦最大の保險會社たり。茲に小傳を叙せんとする弘世正方氏は、卽ち會社々長たりし故助太郎の令嗣に當る。

卽ち弘世家は近江國愛知郡奥知川町に於て、德川幕時代苗字帶刀を許されたる名家たり。六代目曾祖父助市の代に至り、彦根町に移り、紙問屋を業とす。助市は頗る英明にして義氣に富み、或は領民を救濟し、或は國事に奔走し、慶應二年國歩多難の折柄、五穀實らず、庶民の飢饉に瀕するを見るや、家財を盡して之が救濟の資に充て、又明治戊辰の役に際し、數百金を藩の軍費に獻じ、更に之が調達の爲に當る等功績大なるものあり。其の子七代目祖父助三郎亦有爲の資を享け、敎育の普及に努め、彦根中學の設立に與つて功あり。又第六十四銀行、第百三十三銀行を創立し、明治二十二年生命保險業を開始す。是日本生命保險株式會社の濫觴なり。

先代正二郎氏は、明治七年彦根に生れ、東京帝國大學政治科を卒業後、職を大藏省に奉じ、特勅恪勤終始に渥んじ、時の理財局長松尾臣善に其の才幹を認められ、日露戰爭の當時銀行界が恐慌に陷はれたる際、其の懇囑を受けて大阪農工銀行專務取締役に就任し、爾來之が經營の衝に當り、遂に行運を挽回し、大正六年其の勳功に推され、業界に多大の貢獻を爲したる人材なりき。

當主正方氏は、卽ち正二郎氏の二男にして、長男正一氏は伯父助太郎の養子となれり。由來弘世家は歷代一家一門悉く是英邁の材ならざるはなく、氏亦聰敏篤信の資性を享け、長じて早稻田大學商科に學び、卒業後日本生命に勤務し、精勵恪勤を以て聞ゆ。今次支那事變勃起するや、陸軍主計中尉として應召、大陸に出征して軍務に服しつゝあり。

公共の念に厚く、先代の遺志に依り、昭和十四年十一月、海軍省報國內火艇建造費として金一萬圓を、又同時に陸軍省軍事費として一萬圓を寄附したる外、恩賜財團軍人援護會大阪支部事業資金として金一萬圓を寄附したる廉に依り、昭和十五年九月九日勅定の紺綬褒章下賜の光榮に浴せり。

そのから十、昭和二年以來生命保險會社協會理事長として終始業界を指導せり。氏は一人一業主義の信奉者たりしも、日本生命保險事業との關係上、三和銀行、關西信託、日本無線電信各株式會社取締役、新大阪ホテル、都ホテル、大阪毎日各株式會社監査役たりき。

公共、公益の事業に異常の熱意を有し、大正十三年には、財團法人日本生命濟生會を設立し、後其の理事長に就任、結核豫防協會、癌研究會等に盡し、又獨逸文化研究所、日佛文化協會等に關係して、民間外交に貢獻する所大なり。昭和八年外遊以來、國防充實の緊要を痛感し、會社從業中より一百萬圓を國防費に獻納せり。茲に大正十二年三月應擧高等商業學校建設費として、金一萬圓を寄附せし廉に依り、同十四年十月廿四日勅定の紺綬褒章下賜の光榮に浴せり。

昭和十一年三月九日逝去として逝けり。

元合名會社永福屋商店代表社員

藍綬褒章受賞者

故 安部彦平氏

文久二年四月九日生
埼玉縣大里郡深谷町

略歴

氏は先代彦平氏の長男、埼玉縣大里郡深谷町に生る。幼名孫平、大正十二年十二月先代の祝後家督を相續し彦平を襲名す。安部家は氏の祖父儀右衛門氏代まで農を以て業とせしが父君英使にして夙に商業を志し、海産物乾物等の販賣により産を興し、後砂糖の賣買をも營み、遂に埼玉縣下屈指の資産家たり大老舗たるに至れり。

氏は明治六年深谷小學校に入り優秀の成績を以て學業を卒へるや、授業生に選拔せられて、教鞭を執る身とはなりたれど、商家の辛酸を身を以て體驗し、德育上の資料となし、また自らの薫陶に資せんことを志し、放課後の餘暇を利用して父業を扶け、天秤棒を肩にして魚類、乾物類の行商を試みる等、年少にして心身鍛錬を怠らざりしが、以て氏の非凡の材たるを窺ふに足るべし。

長じて氏は一意家業に專念して怠るところなかりしが、五十二歳にして健康を害し、田園生活に入ることとなれり。しかも閑じて無爲を好まざる氏は自邸の後園に一家屋を新設して、田園生活の根據となし、專ら山林の開墾、桑園の造成、野菜の栽培等に從事しつつ、桑園の一部はこれを貸つけて小作となし、地方農業の發展に資するところあり、また桑の賣付代金の回收は生繭賣却後にこれをなすの新例を示して金融上に新機軸を出し、以て業界に活氣あらしむる等、氏の創意による新企畫に依りて斯業の發展は大いに促進せられたり。

氏はまた先考の素志たりし社會、公共に率ずるの實を擧ぐるに專念し、深谷町に電信電話を誘致するに奔命の努力を投じ、金融機關の完備を期しては深谷銀行設立に參畫してこれを促進せしめ、埼玉縣興業株式會社を創立して地方産業の發達に資するところ尠からず。其他町會議員、郡會議員、營業稅調査委員等を歴任して、自治の發展に寄與し、深谷町今日の隆盛の基礎を築けり。

關東大震災に際しては卒先して米麥其の他必需物資を調達して罹災民を救濟し、大阪より物資を移入して物價の昂騰を緩和せしめたるが、其の機敏の措置と德行は今なほ同地方の話柄たり。大正十三年六月深谷町立商業學校設置費として金壹萬五千圓を寄附したる際に依り、昭和二年二月三日勅定の藍綬褒章を賜ふの光榮に浴す。昭和八年四月歿す。

元日東格普蘭儀株式會社々長、元本後藤合名會社々長

藍綬褒章受賞者

故 後藤彦三郎氏

明治十六年一月一日生
本籍 島根縣米子市錦町一丁目四八
自部 同 上

略歴

父祖の遺業たる鋼山業を繼承し、格段の奬勵を實收して大いに其の業を擴め、國家産業振興の一翼として、多大の功績を

上に新機軸を出し、以て業界に活氣あらしむる等、氏の創意による新企畫に依りて斯業の發展は大いに促進せられたり。

氏はまた先考の素志たりし社會、公共に率ずるの實を擧ぐるに專念し、深谷町に電信電話を誘致するに奔命の努力を投じ、金融機關の完備を期しては深谷銀行設立に參畫してこれを促進せしめ、埼玉縣興業株式會社を創立して地方産業の發達に資するところ尠からず。其他町會議員、郡會議員、營業稅調査委員等を歷任して、自治の發展に寄與し、深谷町今日の隆盛の基礎を築けり。

關東大震災に際しては卒先して米麥其の他必需物資を調達して罹災民を救濟し、大阪より物資を移入して物價の昂騰を緩和せしめたるが、其の機敏の措置と德行は今なほ同地方の話柄たり。大正十三年六月深谷町立商業學校設置費として金壹萬五千圓を寄附したる廉に依り、昭和二年二月三日勅定の緋綬褒章を賜ふの光榮に浴す。昭和八年四月歿す。

元日東格魯遜鑛業株式會社々長、元本後藤合名會社々長

緋綬褒章受賞者

故 後藤彦三郎氏

明治十六年一月一日生

本籍 鳥取縣米子市錦町一丁目四八

自邸 同 上

略歷

父祖の遺業たる鑛山業を繼承し、格魯遜鑛を買收して大いに其の業を擴め、國家産業陣營の一翼として、多大の功績を業界に貽し、尙將來の飛躍を期待されながら、世人愛惜の裡に、卒然として長逝せる故後藤彦三郎氏の足跡は、本邦鑛山史上に燦として輝くものあり。玆に大いに偉へざるべからざる人材なりとす。

抑々富家の祖先は、今を距ること約三百年の昔、島根縣濱田より出で、後鳥取縣米子に移り、爾來連綿として彦三郎氏に至り、十六代を數ふ。氏は明治十六年一月一日の吉辰を以て、米子市に生れ、家督を繼ぐに方り、前名寬一郎を改め襲名す。學序を經て專修大學に學び、明治三十九年同經濟科を卒業するや父業に從事し、大正四年クローム鑛山を買收し、玆に獨立して本後藤合名會社を組織し、代表社員として其の開發に邁進す。此の格魯遜はクローム鐵鑛として産し、鍛びざる鋼其の他特殊鋼、合金等の原料となり、又クローム鉄金用として使用せらるゝ重要鑛物にして、世界の産額は昭和十一年度約八十五萬噸、ソ聯、土耳古、南阿等を最大主産地とし、我邦は同年度に於て三萬八千噸の産額あり、今後製鐵業の發展と共にクローム鑛の需要は激增すべきも、更に國内の增産を圖らば、大體自給し得る見込にして、國防上洵に喜ぶべき事象と言ふべし。此の重要産業に着目して、其の事業に全精力を傾注したる氏の努力空しからず、事業の發展目覺しく、京都市上京區烏丸一條上ルに營業所を、北海道に作業所を設置し、更に一段の飛躍を見むとするに及び、憾むべし、昭和十三年六月九日遂逝として逝く。蓋に痛むべきなり。

資性豪放にして人情に厚く、常に國家に對して忠勤を盡すを本分とし、昭和十二年三月米子市米子飛行場設置費として三萬圓を寄附し、勅定の緋綬褒章を下賜せられたる外、陸軍省へ一萬圓、鳥取、島根兩縣出征將兵慰問金二萬圓、皆生陸軍療院建設費二萬圓、出征將兵軍人家族慰問費二萬圓、島根縣軍事援護資金四萬圓を寄附し、爲に陸軍大臣より軍事功勞章を贈られ、其の他赤十字社、救濟會、濟生會各有功社員として奉祝する所甚大なりき。洵に當代稀なる有德の士と稱すべし。

平塚市長

緑綬褒章受賞者

原田敬治氏

明治二十四年十月六日生
神奈川縣平塚市平塚二一九〇

略歴

氏は神奈川縣の人原田藤右衛門氏の二男、神奈川縣中郡平塚町原田に生る。原田家は神奈川縣有數の豪農にして舊家の誉高し。

長兄夭折し、父君の程後家督を相續す。夙に英才として聞目されしが、氏が原田家の主柱となりたる頃は、都市の膨脹發展漸く急激を加へ、地方農村疲弊の傾向著しきを加へんとする風潮亢しかりしが、平塚町は横濱市に隣接するの地域的優位に依り、急速度の下に都會化へ進展し、忽ちにして小都市の盛觀を呈するに至れり。

氏は平塚町の日進月歩の發展裡にあつて伯父加藤銀藏氏の薫陶たりし平塚銀行取締役として金融界に雄飛し地方發展の助長に拍車を加ふると倶に、人口増加に伴ひ住宅難が想へらるゝや、自己所有地に多數の住宅を建設し、これが緩和を圖りて貢獻せしところ尠からず。殊に大正十二年九月の關東大震火災に際しては、借家料を免除し或ひは救援金を贈る等愼念的措置に關して率先して範を示したる外、罹災商工業者の資金調達に減寂の標度を示すとともに、平塚信用組合を創設して、町民の經濟的基礎を鞏固ならしめ、和親の美風を振作し、私財を投じてこれが發展を助長し、功績顯著なるものあり、擧町一致の敬仰を一身に鍾むるに至る。

氏が都市の發展に最も必要なる住宅の建設、金融機關の整備發展に盡瘁したる努力の結晶は、遂に平塚町をして市たらしめしが、今や氏は同市々長の要職にありて、更に平塚市百年の大計樹立に邁進し、多大の效果を擧げつつあり。

往年氏が平塚町に投じたる精進の幸は、堂々たる結實への一途を辿りつつあり、市民また名市長たる氏に絶對の信任をかけ、擧市一心同體の下に愛市の至誠を示しつつあるは、全國都市中稀れに見る偉觀たり。

氏は平塚市長たる外、日本赤十字社、方面委員、済生會、警防團、軍人援護會、司法保護事業聯盟、其他各種公共團體の機關に參畫して寄與するところ極めて多く、個人としても亦社會公共に奉ずる念厚し。卽ち昭和二年五月神奈川縣中郡平塚町警察署敷地買收費として金壹萬壹千圓を寄附したる歳に依り、同三年六月六日勅定の緑綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

株式會社木本シャリング工場社長、千歳鋼業株式會社取締役社長、中央製鋼株式會社監査役、千歳商事株式會社取締役社長

緑綬褒章受賞者

木本勇二氏

明治二十九年二月八日生

生地　兵庫縣三原郡阿萬町木庄上組四百番地
自邸　兵庫縣川邊郡川西町寺畑中尾
勤務所　大阪市港區南濱川二丁目二十二番地

略歴

株式會社木本シヤリング工場社長、千歳鋼業株式會社取締役社長、中央製鋼株式會社監査役、千歳商事株式會社取締役社長

紺綬褒章受賞者

木本勇二氏

明治二十九年二月八日生

住地　兵庫縣三原郡阿萬町本庄上組四百番地

自邸　兵庫縣川邊郡川西町寺畑中尾

營業所　大阪市港區南境川二丁目二十二番地

略歷

赤手空拳を以て、夙に鐵工業界に入りあらゆる辛勞酸苦を嘗め異常の忍耐と精勵により斯業に關する事務と技術を體得し、後獨立してシヤリング工場を創設し、遂に業界に覇を稱するに至りたる木本勇二氏の如き、洵に立志傳中の一頁を飾るに足るべき人材にして、其の奮闘努力の跡は、以て衆人の模範と爲すに足るものあり。玆に大いに傳へざるべからざる一人なりとす。

氏は兵庫縣人岸上半藏の次男として明治二十九年二月八日、同縣三原郡阿萬町に呱々の聲を揚げ、木本家を繼ぐ。資性慧敏剛悟にして、敢爲の氣に富む。

夙に工業に志し、長じて大阪に出で、坂口商店に勤務し、其の間精勵恪勤、克く業務に努め、業界の衆望に通ず。依くて獨立の機熟するや、大正七年鐵材商を開業し、シヤリング工場を創設す。

爾來拮据經營に任じ、業況漸次隆盛に向ひ、昭和十一年一月、株式會社に組織を變更し、自ら社長となり、專務取締役に荻谷玉喜、取締役に岸上久太郎、監査役に岸上雲吉氏等の俊英を配置し、以て今日に至る。

現に千歳鋼業會社取締役社長、千歳商事株式會社取締役社長たるの外、中央製鋼株式會社監査役として、業界に重きを爲しつゝあり。

公共、公同の念に厚く、昭和十三年四月日本赤十字社大阪支部事業費として、金一萬圓を寄附したる廉に依り、同十三年八月九日、勅定の紺綬褒章を、同十二年六月、社團法人帝國軍人後援會事業資金として金一萬圓を寄附し、同十四年九月十八日、同飾版を下賜せらるゝ光榮に浴せり。又、帝國在鄉軍人會大阪軍人會館建設資金を寄附して賞狀を贈られたる外、豐中高女、日本海員掖濟會、愛雀兵幼稚園、市岡第三警防團、大阪聯隊區司令部、其の他各方面に寄附せる私財巨額に達せり。

氏が都市の發展に最も必要なる住宅の建設、金融機關の整備擴充に盡瘁したる努力の結晶は、遂に平塚町をして市たらしめしが、今や氏は同市々長の要職にありて、更に平塚市百年の大計樹立に邁進し、多大の效果を擧げつつあり。

往年氏が平塚町に投じたる精進の擧は、豈々たる結實への一途を辿りつつあり、市民また名市長たる氏に絶對の信任をかけ、擧市一心同體の下に愛市の至誠を示しつつあるは、全國都市中稀れに見る偉觀たり。

氏は平塚市長たる外、日本掖濟會、日本赤十字社、方面委員、濟生會、警防團、軍人援護會、司法保護事業聯盟、其他各種公共團體の機關に參畫して寄與するところ極めて多く、個人としても亦社會公共に奉ずる念厚し、卽ち昭和二年五月神奈川縣中郡平塚町警察署敷地買收費として金壹萬壹千圓を寄附したる廉に依り、同三年六月六日勅定の紺綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

濱田端

元東京市神田區會議員、同事務委員、地主

紺綬褒章受賞者

濱田端氏

明治三年五月三日生
東京市神田區東松下町二八

略歷

氏は東京府の人濱田吉氏の長男、東京市神田區東松下町に居住して生る。

濱田家は寛政元年以來百五十餘年間、神田松下町に居住して著聞たる名家なり。

先代までは醬業を營みしも、廣大なる土地と巨萬の富を繼承したる氏は、專ら資財の利殖に專念し、傍ら社會公共に盡すを以て天業となし、東京市多額納稅者の列に加はるに至れり。氏は神田の名家に生れたる生粹の江戸ッ兒にして、しかも江戸ッ兒の誇りとなす神田ッ兒たり。

由來江戸ッ兒は仁俠に富むをもつて知られ、淡々たる氣質をもつて誇りとなす。氏も亦江戸ッ兒の代表者たるの資格を失はず、幼にしてすでに英俊豪宕を拔く、の英氣に富み、四隣その將來を囑目して期待するところ極めて大なりき。

明治十一年家督を相續せし氏は、いまだ幼少の域を脫せざりしが、よく輔佐に勵むとともに、慈善に仕へて孝養に怠りなく、使用人を勉はりては能すところなし。すでに家長たるの風格を備へたりといふ。長ずるに及んで家業に精勵する傍ら、商次公共諸團體に職を奉じて社會に貢獻し、德望大いに加はる。

推されて神田區青年學校後援會長、同教育會理事、同衛生組合理事、在鄉軍人會神田區第四聯後援會長、市立千榮小學校保護者會長となるや、常に率先して使命の達成に邁進し、關係諸事業の完遂に誠忠の努力を投じ、特に教育事業に關しては、周密たる研究と調査を遂げ、當事者を激勵して斯業の伸展に資するところ勘からず。氏が千榮小學校保護者會長たること實に十二ヶ年に及ぶの事實に徵するも、如何に氏が眞摯なる態度を以て、子弟教育の振作に努力を投じつつあるかを窺ふに足るべし。

神田區會議員、同事務委員として自治の發展、區教育界に進捗せしところまた多く、町會結成の事あるや擧げられて神田區東松下町々會長たり。今や銃後國民の指導者的使命の遂行に邁進して寧日なし。

昭和二年八月神田區奬學會として金萬壹圓を寄附せし慶に依り、同四年三月二十三日勅定の紺綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

紺綬褒章受賞者

有馬市藏氏

明治二十四年八月十九日生
神戸市須磨區大手五丁目八番地

略歷

氏は兵庫縣人有馬市太郎氏の長男。嚴父市太郎氏は、夙に神戸市川崎町にて米穀肥料商を營み、清國大豆、大豆粕、印度米等の輸入商として業界に重きをなし、傍ら慈善同濟の事

組合理事、在郷軍人會神田區第四班後援會長、同教育會理事、同衛生
推されて神田尋常青年學校後援會長、市立千櫻小學
校保護者會長となるや、常に率先して使命の遂行に邁進し、
關係諸事業の完遂に滅私の努力を捧じ、特に教育事業に關し
ては、周密たる研究と調査を遂げ、當事者を激勵して斯業の
伸展に資するところ尠からず、氏が千櫻小學校保護者會長た
ること實に十二ヶ年に及ぶの事實に徴するも、如何に氏が眞
摯なる態度を以て、子弟教育の振作に努力を捧じつつあるか
を窺ふに足るべし。

神田區會議員、同學務委員として自治の發展、區教育界に
盡瘁せしところまた多く、町會結成の事あるや擧げられて神
田區東松下町々會長たり。今や銃後國民の指導者的使命の遂
行に邁進して寧日なし。

昭和二年八月神田區奬學資金として金萬壹圓を寄附せし廉
に依り、同四年三月二十三日勅定の緋綬褒章を賜ふの光榮に
浴す。

緋綬褒章受賞者

有馬市藏氏

明治二十四年八月十九日生
神戸市須磨區大手五丁目八番地

略歴

氏は兵庫縣人有馬市太郎氏の長男。嚴父市太郎氏は、夙に神戸市川崎町にて米穀肥料商を營み、清國大豆、大豆粕、印度米等の輸入商として業界に重きをなし、傍ら區會議員回漕の事業をも營みて、神戸市に於ける有數實業家として名を成せしが、明治三十八年に至り、營業の一切を令弟有馬勝次郎氏に讓り、自らは第一線を退きたるも、此の間多年兵庫縣並に神戸市の重職、社會公共事業に盡瘁したるところ尠からず。即ち神戸區會議員、同市會議員、同參事會員、同參事會員、兵庫縣會議員、郡揖五郡聯合會議員として地方自治の發展に寄與せし功績は多大にして、會て推されて神戸市七宮小學校々長たりしことあるなど、同氏の信望と徳望を證するに餘りあり、更に神戸商工會議所理事として、神戸市商工業の發展に資するところ極めて多かりしのみならず、實業方面にては、株式會社日本商業銀行の創立に參劃して其の取締役となり、中小商工業者の金融施設に劃期的進展を齎らしたる外、兵庫電氣軌道、日本米穀、山陽皮革、兵庫倉庫、兵庫運輸、日本毛織、山陽水力電氣、その他多數會社の重役として、縱横の活躍をなす。

氣宇偉大にして、しかも精勵恪勤の性格は、關係諸事業の隆盛を促進し、氏も大いに産を成したるが、昭和二年不幸病を得て歿す。仍ち市議氏衆會を相續して、亡父關係諸事業を繼承す。

市議氏は秀才の譽れ高く、青雲の志を抱いて東京高等商業學校に入りしも、學業の半ばにして病氣の爲め學業を斷念して歸神、健康回復するや直ちに日本毛織會社に入社し、樞要地位にありて社業の發展に渾身の努力を捧じ、入社後僅めて日淺きにも拘らず、拔擢されて人事課長の榮職に就き、累進して同社取締役となり、昭和十四年七月まで其の職にありしも、退職して閑地につく。現に伊丹製絨所取締役、兵庫電氣軌道、山陽皮革、日本米穀各會社の重役たり。

責性溫厚篤實にして、公共心に富み、私財を投じて社會公共の事業に盡したること尠からざるも、昭和十四年一月恩賜財團濟生會兵庫支部へ、其の事業資金として金壹萬圓を寄附せし廉に依り、同年六月二十日長くも勅定の緋綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

元東洋紡績株式會社相談役、元日本紡績聯合會會長

故 工學博士 齋藤恒三氏

安政五年十月十七日生
元東京市上京區中長者町

略歷

○我が國紡績業の發展振興に寄與せしところ尠からず、明治四十年勅定の緑綬褒章を賜ひ、其の功勞を顯彰さる。

○大正九年八月日本赤十字社愛知支部資金として金壹萬圓を寄附せし廉に依り、同十月二日勅定の緑綬褒章を賜ひ其の善行を表彰さる。

○大正十二年十二月山口縣萩町公會堂建設費として金參萬圓を寄附せし廉に依り、昭和二年五月六日勅定の緑綬褒章飾版並盃を賜ひ、其の善行を表彰さる。

○大正十二年九月關東大震火災救援費として金壹萬圓を寄附せし廉に依り、昭和五年五月二十一日勅定の緑綬褒章飾版並盃を賜ひ、其の善行を表彰さる。

○昭和四年十一月名古屋市公會堂建設費として金壹萬圓を寄附せし廉に依り、同五年十月十三日勅定の緑綬褒章飾版並盃を賜ひ、其の善行を表彰さる。

氏は山口縣人藤井正脩氏の令弟、長じて齋藤貫三氏の養子となる。明治十五年工部大學を卒業、大阪造幣局に入り、大藏作所建築改良事業を擔當、非凡の學識と才能を發揮して同十八年任官を免ず。これより先き同十六年大阪紡績會社の創業に際し、其の汽機汽罐類の選付を監督、更に同十九年三重紡績會社の創立に當り工場設計、機械購入及び鐵道敷設等、紡績事業調査のため專門技術家一名を英國へ派遣することとなり、其の選に入る。歸朝氏は官途を去つて技師長として三重紡に入る。これ實に氏がわが國紡績業界の雄宿として敬仰さるるに至る第一歩たり。同二十一年歸朝するや紡績と併せて綿布事業を起すの必要を說き、萬次これが實現を促進せしめ、三重紡の業績益々擴大するに及んで、請ひて大正三年東洋紡を創立、專務取締役となり、同九年取締役社長に推さる。同十五年齡古稀に達するや取締役を辭して相談役となりしが、氏がわが國紡績業の發展に貢したる功績は洵に偉大なるものあり。

この間氏は紡織聯合會委員長、四日市市會議員、同議長、名古屋、大阪各商業會議所特別議員等の職を擧げて盡瘁するところまた尠からざりき。大正四年工學博士の學位を受く。

貴族院議員

勳一等 瑞綬褒章受賞者

正三位勳三等 子爵 **岡部長景氏**

明治十七年九月廿八日生
東京市赤坂區丹後町一〇

略歷

○昭和三年五月岸和田市へ公園敷地として山林六段六畝十一歩、池沼一町六段五畝二十四歩、横三畝十五歩を寄附せし廉に依り、同六年十月三日勅定の緑綬褒章を賜ひ、其の善行を表彰さる。

貴族院議員

錦、紺綬褒章受賞者

正三位勲二等　子爵　**岡部長景**氏

明治十七年八月廿八日生
東京市赤坂區丹後町一〇

略歴

○昭和三年五月埼和田市へ公園敷地として山林六段六畝十一歩、池沼一町六段五畝二十四歩、畑三畝十五歩を寄附せし廉に依り、同六年十月三日勅定の紺綬褒章を賜ひ、其の善行を表彰さる。

○昭和三年五月埼和田市へ市公會堂敷地として畑八畝十五歩、宅地七畝十七歩を寄附せし廉に依り、同六年十一月二十六日勅定の紺綬褒章飾版一箇を賜ひ、其の善行を表彰さる。

岡部家は其の祖藤原武智麿の後裔に創る。權守清綱駿州岡部郷に住し依を以て氏となす。十三世を經て右衛門尉正綱に至り初めて徳川氏に仕ふ。その子美濃守長盛武勳を樹て、濃州大垣に封ぜられ五萬石を食む。更に其の子宣勝に至り、泉州岸和田に移る。世々五萬三千石の城主たり。後十四世を經て先代長職に至り、明治十七年子爵を授けらる。長景氏は其の長男にして、大正十四年家督を相續、同十五年襲爵仰付けらる。

子は學習院を經て東京帝國大學法科政治學科に學び、明治四十二年七月卒業。同十年外交官補に任ぜられ、米國大使館付となり、書來英國大使館書記官、外務書記官、同參事官を歴任して、文化事業部長に任ぜられ、後宮内省に入り、内大臣秘書官長式部次長たりしも、昭和五年九月官を辭して、貴族院議員となり、同十年十二月、聽軍政務次官に任ぜられしも、同十一年三月退官。

子は斯くの如く其の官歴の示せるごとく、外交官たること久しく、のち政界に投じて貴族院に重きを成し、國家の興隆に種蒔するところ尠からざるも、特にまた國際文化事業の牖機に干與し、文化を通じて國際親善の實を擧げたる功績また顯著たり。

現に對支文化事業調査會、國際文化振興會、日滿支文化協會、朱日本タイ協會、比律賓協會の副會長または理事として國民外交の重要なる一環を擔當し、國際關係の整調是正に努力を投じつつあるほか、國立公園委員會、國語審議會、神社制度調査會、美術振興調査會、文部省美術顧問、帝室博物館顧問、其の他文化關係諸團體の役員として國内文化の向上振作にも亦寄與するところ極めて多し。

創業に際し、其の汽機汽罐類の新付を監督、更に同十九年三重紡績會社の創立に當り工場設計、機械購入及び製造監督、紡績專門調査のため專門技術家一名を英國へ派遣することとなり、其の選に入る。即ち氏は官途を去つて技師長として三重紡に入る。これ實に氏がわが國紡績業界の嚆矢として敬仰さるるに至る第一歩たり。同二十一年歸朝するや紡績と併せて絲布事業を起すの必要を說き、續次これが發達を促進せしめ、三重紡の業績拡大するに及んで、諸社を合併して大正三年東洋紡を創立、專務取締役となり、同九年取締役社長に推さる。同十五年齡古稀に達するや取締役を辭して相談役となりしが、氏がわが國紡績業の發展に貢したる功績は洵に偉大なるものあり。

この間氏は紡織聯合會委員長、四日市市會議員、同議長、名古屋、大阪各商業會議所特別議員等の職を奉じて盡瘁するところまた尠からざりき。大正四年工學博士の學位を受く。

安藤安太

醸造業

紺綬褒章受賞者

故 安藤安太氏

明治八年生

自邸 兵庫縣明石郡大久保町

略歴

近畿より中國一帶は、風土の適順と水質の優良とに因り、酒造業に好適し、灘五郷を始め、古來優良清酒の産出を以て江湖に其の名聲を謳はる、明石地方も亦其の名産地の一として知られ、安藤家醸造の春錦の如き、風流酒徒の最も愛飲する所たり。

抑々安藤家は、兵庫縣明石郡大久保町に於ける屈指の舊家素封家にして、本家安藤政夫氏より分家し、代々安太を襲名し、當主充一氏を以て五代目を數へ、先々代までは庄屋を勤めたる家柄たり。多年醬油醸造業を營み、地方一流の業者たりしが、先代に至りて酒造業に轉じ、爾來業運隆盛を極め、以て今日に至れり。

故先代安太氏は、明治八年を以て生る。人格頗る圓滿にして、商才に富み、事に當りて甚だ熱誠なりき。其の家業に就くや、異常の勤勉努力を以て經營に當る。後酒造業の將來好望なるに着眼し、父祖以來の醬油醸造業を擴張して、酒造業に轉向す。一方多年村治に貢獻し、又明石實業組行重役として同地金融界に尽す所尠からざりしが、感ずる所ありて一切之等より手を引き、酒造業にのみ專念し、御影町に支店を設置するなど、大いに家業の經營に努め、其の自家醸する所の清酒に「春錦」の銘を冠して、市場に提供するや、忽ち酒徒の間に嘖々たる好評を博し、業運頓に隆昌を加へ、爲々業界に重きを爲すに至れり。昭和十四年七月十八日、六十五歳を以て長逝す。

公共公同の念に厚く、各種の社會事業其の他に盡して、之に私財を投じたること枚挙に遑あらず。昭和十四年七月、兵庫縣明石郡大久保尋常高等小學校外一校基本財産として、金一萬圓を寄附したる處により其の功を錄せられ、同年十一月十四日勅定の紺綬褒章を賜る。死して餘榮ありと言ふべし。

當代充一氏は、同縣加古郡阿閉村梅谷善作の二男として生れ、安藤家の養子となる。資性温厚篤實、慶應大學を卒業後第一銀行に入社し、銷場係勤務して行務に努め、其の將來を囑目せられつゝありしが屋ること一箇年餘にして家事の都合を以て退職歸郷し、養父を補け家業に從事し、先代の後を享けて、家督を相續し、以て現在に至れり。家庭には母堂のぶ子、夫人綾子の外二男一女あり、頗る圓滿を以て稱せらる。

紺綬褒章受賞者

阿部義次氏

明治二十五年二月十八日生

住所 東京市深川區森下町二ノ九

第一工場 東京市深川區森下町二ノ一七

第二工場 東京市深川區高橋一ノ二〇

第三工場 東京市深川區清澄町一ノ四

第四工場 東京市深川區清澄町一ノ五

河部第一工場 東京市本所區緑川町三ノ二八

業佐鐵工所々主、高級工作機械設計製作業